

# 叛旗

2 | JUL. 1969  
第一部

破防法体制突破！

安保粉碎＝日帝打倒・70年へ！

4.28闘争の総括と沖縄解放闘争への視点

共産主義者同盟  
三多摩地区委員会

# 破防法体制突破！

## 安保粉碎 日帝打倒・70年へ！

### 四・二八闘争の総括と沖繩解放闘争への視点

#### 共産主義者同盟三多摩地区委員会

序

四・二八安保Ⅱ沖繩闘争は、首都の激的な市街戦を頂点として全国で爆発的に展開し、帝国主義の支配秩序をゆるがすことを通して今日の帝国主義支配が、その社会的底辺から政治国家の頂点に至るまで深い危機の中にあることを、全人民のまえにあざやかに露き出した。そして七〇年を目前にひかえた今日の日本社会の中で、真の叛乱者・闘士・戦闘的大衆が、体制内反対派Ⅱ社・共の統一集会からはっきり区別された地点に自らの闘いの旗を掲げて、官憲の暴虐な弾圧体制をいたるところで分断し打ち破り街頭を制圧することの中に、議会制反対派と現代大衆闘争のあざやかな分岐が描き出されている。

- 序
- I 四・二八闘争の若干の総括点
  - II 現在の闘争の構造
  - III 革共同人奪還V論の構造
  - IV 七〇年への論争基軸
  - V アジアの革命と反革命(1)
  - VI アジアの革命と反革命(2)
  - VII 沖繩にとって解放とは何か(1)
  - VIII 沖繩にとって解放とは何か(2)
- 結び

四・二八闘争のこうした到達点は、十・八羽田に本格的な開始をあきらかにしたわれわれの「ベトナム反戦」を基軸とする全社会的・全人民的闘争の総結集のもたらしたものであり、それは、新左翼運動のつくり出した、あらたなる統一戦線に象徴されている。

わが同盟が、革共同全国委をはじめ新左翼諸党派とともに発表した五派共同声明が、ただメンツだけを共通利害としてとりおこなわれた社共の「統一」などから遠くへだたられ、一片の宣言では決しないものであることは、権力も又、闘う人民も、正確に認知していた。われわれの共同の戦闘宣言は、支配者にとっては、あらゆる手段を総動員して第一に撲滅すべき部隊の存在を、闘う大衆にとって、現時点における日本階級闘争の真の戦闘部隊の所在を、全社会のまえに公然とあきらかにしたのである。それは、二八日全国と首都を結んでもえあがった闘争自身によってあますところなく実証さ

れた。権力者たちは無知ではない。四・二八闘争に対して配置された当日の弾圧体制は、二八日当日だけのものではない。二三日の中央大学館ロックアウトにはじまり、法政・早大に対する機動隊の導入に端的に示されるように、そして、革共同の本多・藤原両氏の事前検束がみせつけたように、権力は、われわれの闘争宣言の秘める爆発力を事前に圧殺するためにあらゆるこころみをくりかえした。しかしかれらは、そうした弾圧の無力を二八日に、はっきりとつきつけられなければならなかったのだ。

われわれが「言う」だけでなくとどまらず「実行した」ことをもって、ブルジョア政治委員会とその忠実な番犬どもは、わが同盟と革共同に対して、ついに破防法の適用に踏み切った。「実行」のともなわぬ「こと」は空論にすぎない——これはブルジョア教育が全社会に普及されて来た原理のひとつではなかったのか。ブルジョアジーが、自らの政治国家による市民社会の理念的な包摂——そのもとの賃金労働力の社会的な養成と分配のために生み出したかれらの公教育理念は、今日のブルジョアジーの体制支配の政治的要請と衝突している。これは論理ではない。四・二八闘争をめぐる政治過程の現実である。それは、今日の帝国主義支配の危機の表現でなく、てなんである。支配階級は、その階級の本能により、敏感に自らの危機を意識した。危機意識は、残虐な大弾圧の布陣を敷かせた。だが、事前検束による破防法の恫喝も、事前の拠点襲撃も、一万二千の武装警官隊の首都への集中も、かれらのかかえこまなければならぬ危機を自己暴露する役割を果たしたのであって、危機の隠蔽のためには無力であった。それゆえにこそ彼らは、今日、戦闘的政治諸潮流と、とりわけ地区反戦の戦闘的労働者に対して狂気のような

な報復を続けているのだ。

小ブル的反対派は、ブルジョア的理念をもってブルジョア政治の現実に対立する試みを、なおも空しく選択しようとするだろう。だが、われわれにはわれわれの選択がある。われわれは今日の状況の中に、ブルジョアジーの支配との闘争が社会過程の深部にまで推しすすめられつつあるがゆえに、それは、一切のスコラティックな・静的な「理念」をもろくも打ち砕き、荒々しい姿をとっていること、そこには、ブルジョアジーの個々の支配の危機ではなく、全社会的な、従って全世界的な普遍性をもった危機の本質が、いまだ部分でしかないとしても確実にその一角をあらわしつつあることを、小ブル的反対派のあわれな姿とともに、ただ冷酷に見定めておけばよい。

権力の報復的弾圧には、ただ、闘うプロレタリアートと人民の、さらに強化された闘いが応えるだろう。破防法体制のもと、五月十七日に開催されたわれわれの地区集会は、二百名の労働者・学生を結集し勝利への進撃を誓うなかに圧倒的に成功した。大学の帝国主義的再編と、全社会に支配秩序の深刻な危機を告知して来た学闘争の圧殺をもくろむ大学立法に対しては、全都五千の戦闘的學生が、神田一帯の街頭バリケード戦によって闘いの開始を告げている。戦闘的労働者は、帝国主義権力と資本の支配と搾取への攻撃の拠点を打ち固め、出撃の体制を整えている。

ミッドウェー会談がアメリカ軍二万五千の南ベトナムからの撤退を告げ、第四回アスバック会議が、官憲の狂暴な弾圧布陣にまもられるなかで、ポスト・ベトナムに焦点をあわせた日本帝国主義的侵略・反革命の意図を表明したとき、同時に南ベトナムの解放革命は、誇りにみちた声で臨時革命政府の樹立を高らかに宣言した。アジア

## 一内

は、全世界の階級闘争の焦点として、激動の渦をさらにひとまわり拡大し、帝国主義に対する人民の抵抗と解放の闘争の歴史を創造する突端の地である。沖繩をふくみ、七〇年は、日本帝国主義をも、仮借なく激動の渦中に叩き込むだろう。

四・二八闘争は、かかる状況の中で、われわれの七〇年への政治展望を全面的にあきらかにすることによってはじめてその意味を確定しうるものとして総括されなければならない。七〇年闘争が、羽田から四・二八に至る街頭政治闘争と、学園闘争が代表する社会的叛乱の単なる結合の延長線上をこえるものとして闘わねばならない。

## I 四・二八闘争の若干の総括点

(一) 戦闘的大衆は、体制内反対派の指導部から自立して、闘う能力をはっきりと示した。

代々木公園における社共共闘は、沖繩派遣団の強い要請のもとに、ようやく形式における統一性を保持した。それはまた、総評・日共に対する社会党の反戦排除をめぐる妥協によって維持された統一である。国家権力は、一切の闘争力の牙を抜かれたこの体制内反対派の統一行動に対して、何の警戒を払うこともなく許容し、商業ジャーナリズムは、その整然たる行動をほめそやした。だが、三重の内バリ体制、陽動作戦部隊もふくめた一万二千の武装警官、集会禁止・デモ禁止令に加えて、首都圏全域におよぶ鉄道駅・道路の検問体制・さらに破防法の公然たる登場——軍隊なき戒厳令体制のもと、闘う大衆は、新橋・銀座地区に結集し、全学連・反戦青年委組織部隊を

としたら、われわれは、六〇年安保闘争の持つ意味を再度検討し、六〇年代階級闘争のふくんだすべての可能性と教訓を、七〇年へむけて血肉化しなければならない。

われわれはここに自らの見解を卒直にのべ、七〇年へむかうわれわれの戦線の自己点検のための問題提起として提出し、四・二八闘争を自らの責任において闘い抜いたすべての労働者・学生・インテリゲンチア諸氏の批判的な検討に供したいとおもう。

中軸として、敢然と闘いを挑んだ。

当日の状況については、すでに多くを語る必要はない。

確認されなければならないのは、四・二八において、擬制指導部に対する真の闘争の展開を、組織された少数の部隊が担うという構図の時代が、完全に終りを告げたということである。新左翼運動は、社共に対する組織された反対派としての位置を完全に越えて、街頭政治闘争において、その第一の指導部隊としての位置を確定した。

羽田闘争は、事実上新左翼のみの闘争であり、社共との拮抗関係はなかったといっている。佐世保闘争——王子闘争では、少くとも闘争の焦点となる地点は社共とほぼ同一であらざるをえなかったがゆえに、われわれの側への大衆の結集が、はじめから社共に訣別して新左翼の闘争を選択したものであるとは、厳密な意味では決して言え

なかつた。社共の呼びかけに応じて闘争に参加して来た大衆を、現場の状況の中でわれわれの側に吸引し、組織することが、そこではまだ可能であつた。

四・二八闘争は、こうした諸点において、完全にちがった地平にある。社共の「闘争」とは地理的にも完全に区別された地点で、官憲がその持てる全力量を傾注して組織した戒厳令体制を武力で打ち破り、新左翼と戦闘的大衆の固い結合によって闘争の焦点をつくりだすことが、厳密な意味で完全に実現されたのが四・二八であつたのだ。今日の対権力闘争の政治的・社会的な質を理解することも直観することもできないがゆえに、あわれな「革命的マルクス主義」派は、構改革派にさえおよぶ地位へ完全に転落し、佐世保での民青のように、情況と無縁な地点で自己満足のなデモをくりかえす、ぶざまな姿をさらすことになつてしまつた。

擬制指導部と新左翼への大衆の完全な分裂、そして後者への圧倒的な結集——これが、われわれの第一の確認点である。そして、そうした状況をつくり出し、指導するうえで、五派共同声明と二八団体共同宣言は、闘う大衆の統一戦線の第一歩としての自己規定にふさわしい、歴史的役割を、みごとに果たしたのである。

〔二〕しかし、四・二八闘争は、その八分裂Vと八結集Vの質において、今日わが国の階級的政治闘争の到達点の弱さをはっきりと表現している。この点を第二にあらわしななければならぬ。それは何よりもまず、今日における新左翼政治潮流の、政治的指導能力の問題である。

大衆は、社共共闘ではなく、圧倒的に銀座——新橋に結集した。そこを四・二八の闘争の主戦場と認定し、戦列に加わつた。しかし、

四・二八闘争における党派の闘争指導について、その弱点はさまざまに指摘できよう。軍事・戦術問題はそのひとつの点である。十一・二二新左翼闘争については騒乱罪をひきだすことが出来たのが成果だつたと言ひ、四・二八では、権力の騒乱罪摘要の野望をも許さなかつたなどという矮小な「総括」をする者は論外として、われわれの四・二八闘争は、官憲をして全面的な敗北に追いこみ、権力の騒乱罪適用に踏み切らざるをえない情況をつくりだすことが出来なかつたし、政府中枢——霞ヶ関占拠は、実現できなかったのである。(もつとも革共同の「主都制圧」はといえば、銀座もたしかに「首都」であるから実現されたにはちがいない)。

しかし、階級闘争の政治指導が問われるとすれば、四・二八に關しては軍事問題は特殊な領域として定例し検討しなければならぬ。今われわれが克服を迫られている主要な弱点は、何よりもまず、われわれの沖繩闘争の路線設定と、革命戦路上の位置規定にかかわるものである。それは、前述したように八復帰V路線に根本的に対立し、それからの訣別をなしとげる路線と展望を、鮮明に提出しきれていない新左翼党派の政治力量の問題である。そして、新左翼統一戦線をわが同盟とともに牽引している革共同がこの点には完全に無自覚で、復帰路線の實力闘争化、沖繩奪還論を「何のちゅうちょもなく」ふりかざしており、そして又他の諸党派もこの点で革共同を超える姿勢をもちあわせていないとすれば、この新左翼運動の現段階が情況から克服を迫られている基本問題への解答を与える任務はひとえにわが同盟のうえにかけられているのである。

だが、われわれのかかる弱点にもかかわらず、戦闘的大衆は、新橋——銀座で果敢な闘いをくりひろげた。その自然発生的な闘争力

社共共闘と銀座——新橋の相違を、その闘争の路線と戦略において大衆が判別し、選択したわけでは決してない。大衆が擬制指導部ではなく新左翼に与えた支持は、直接にはその「戦闘性」の一点にのみあつたと言つても決して言いすぎではない。八沖繩返還——本土復帰Vという、定説化している頽廢の論理に對立するものとして銀座——新橋を選択したのでは決してなかつたのだ。それは必然であつた。なぜなら、われわれの新橋——銀座そのものが、大衆のまゝに、かかるものとしてその姿を明示していなかつたのだから。

この点では、学園闘争における情況とは異つてゐる。今日の学園闘争において、日共、民青と八全共闘Vとの對立が、目的への温和な接近と戦闘的な前進などという点にあるのではないことは、大衆は正確に感知している。八大学改革Vが、闘争の中で基本的相違をうつしだす鮮明な争点として提出され、かりに日共、民青を「反革命」だとまで考えないとしても、かれらとわれわれの間の對立が、まさに目的そのものに、路線そのものにかかわるものであることを認知したそのうえに八全共闘Vへの支持は形成されてきていると言ふことが出来る。しかし、八沖繩Vに關する路線上の對立が、そのような意味で選択の分岐点として四・二八に、大衆のまゝに提出されたと言ふことはできないのである。

ここから二つの問題がひきだされる。第一に、新橋——銀座を、八復帰路線Vに基本的に対立する路線のもんだいとして大衆に鮮明に呈示しえていない段階の新左翼政治諸党派の責任の問題である。

そして第二に、われわれの闘争を八復帰路線Vの實力闘争としてしか認知しえないにもかかわらず、それを支持し、結集し、ともに闘いに参加した大衆の示す、今日の社会叛乱の質の問題である。

の爆発は、今日の階級的政治闘争の社会的根拠を、そして今日の情況そのものを、正確に反映している。われわれはこの内容に迫らなければならぬ。

われわれは、次章で、以上の二点のうち後者に関してまず検討し、それにつづいていくつかの問題を整理したうえで、第一の問題にわれわれ自身の解答を与えるための展開を五章以下に示すだろう。

〔三〕最後にわれわれは、四・二八闘争が、二・四ゼネストの挫折とともに、現地沖繩での開放闘争を、新たな局面へおしすすめてい

る事実と言及しなければならぬ。

沖繩現地の關係は、朝鮮戦争以後の米軍のむきだし暴虐支配に抗しつづ、祖国、日本への八復帰Vの旗を掲げて、沖繩で国連の委任統治から日本政府の統治へ移行することを求める運動として展開されてきた。星条旗から日の丸への移行——それは沖繩人民が自らを八日本人Vとしてみなし、その祖国日本へ八復帰Vすることを意味する。

しかし、まず平和憲法の理念と、現実の日本政府の政治との差は、拡大しこそすれ、決して未来において予定調和的に超越される筈のものではないことを、沖繩人民は、その生活の底辺から政治の頂点にまでわたる、血にまみれた犠牲にあらがわれて認知して来た。

憲法秩序は本土にもない。それは、あるがままの本土にはなく、ありうべき日本の姿として未来形でしか語れぬものへその位置をかえた。そしてその位置転換によつてのみ、沖繩人民は八復帰Vを他者、本土への願望から自己の闘争の論理へすえなおすことができたのだ。その闘争は、未だ実現されざる憲法秩序(八抑圧と迫害からの解放)を、祖国、本土と沖繩に同時に実現する目的意識をその

内にやどし、本土における目的を同じくする運動主体革新勢力との連帯が、あらためて重い意味をもってとりだされる。

だが、本土革新勢力とは、沖縄人民の死活をかけた闘争にとって何であったのか。二・四ゼネストをめぐる総評の現地派遣オルグはその真の姿を、ゼネストの破壊に狂奔することによって沖縄人民のまえに自らあきらかにした。同時に、屋良革新主席も又、その渦中に自己の階級的位置を鮮明にした。それは、現地沖縄の闘争史における巨大な転換の開始を暗示していた。

四・二八闘争における沖縄上京代表団の大挙上京は、二・四ゼネストでひとつの頂点に達した現地における闘争の限界に対する直観と、本土の社共による復帰―返還運動に対する不信をそのうちに含んでいる。社共共闘のデモの中で、この現地代表団は、労働員にふくまれている「反戦派」とともに、終始戦闘的な行動を展開した。当初の予定人数が大巾に縮小され、左派が削られたにもかかわらず、沖縄代表の多くは、銀座―新橋を闘った部隊―全学連・反戦を軸とする戦闘的大衆に対し、公然と共鳴し連帯の意志をあきらかにしたのである。

沖縄現地での闘争は、日本政府に対する幻想から訣別し、今、本土革新勢力への幻想から自らを解き放つことによって、巨大な転換を開始しつつある。そして、われわれの十・八羽田以後の闘いによってそうであったように、ここでも、この転換の推進力の最も重要な要素を、南ベトナム解放革命が担っていることを確認しておかなければならない。沖縄現地闘争が、本土の擬制指導部から訣別する過程は、同時に、八祖国復帰Vのスローガンがそのうちに含み、増巾させてきた欺瞞を根元からあばき出し、日本帝国主義の武力に

二内

## II 現在の闘争の構造

(1)

四・二八闘争が表現した、大衆の擬制指導部体制内反対派と新左翼体制破壊派への分解が、沖縄闘争の路線にかかわるものとしてあったのではないことをわれわれは確認した。銀座―新橋に憤出した闘争のエネルギーは、さらに言えば、四・二八が「沖縄」闘争であったがゆえにあのようにはげしく自らを表現したわけのものでもなかったのである。

その一例としては、東大全共闘の場合を見ておけばよい。「七項目要求」を掲げ、その論理性と道義性において、民青・秩序派を圧倒するヘゲモニーを創出し大学の帝国主義的再編に対して大学解体を旗幟に掲げた東大闘争が、沖縄闘争としてある四・二八にどのようリンクするのか、させるのか―八指導部Vは整合的な論理をのみだすために四苦八苦した。四・二〇に全共闘が結集したのはわずかに四〇名であった。それを、学園闘争と政治闘争の関係についての整合的論理がないためだと考える限り、四・二八にも又、圧倒的な結集などを予想することは出来なかった。しかし、そうした八指導部Vの思惑をこえて、二八日の本郷集会には二千に及ぶ大衆が結集し、東京駅から新橋へ進軍したのである。

闘争の路線における選択によってではなく、闘争課題によって

より併合されて成立した「沖縄県」の歴史のうえにたちもどる過程であらざるをえないだろう。その歴史的反省が、ベトナムの革命への連帯に結合したとき、沖縄は、はじめてその解放闘争の革命的位臆と役割をあきらかにする筈である。そして、かかる過程は又、琉球大学を中心とする沖縄の戦闘的學生運動にとっては、同時に、今日の社会的激動の開始に対して盲目な革マル派からの分離の過程となるであろう(四・二八を革マル派の隊列で闘った、琉大反戦學生會議代表の大仲君の発言『サンデー毎日』五月十一日号を見よ)。

今や沖縄人民の「復帰」のスローガンの含む正当性は、ただ、沖縄人民の政治的・社会的自治権の要求の一点に凝集されつつある。そして、沖縄人民の解放闘争が、この自治権の意味を根本から問いつくるとき、そこにはじめて、戦後二十余年の米軍支配をこえて、近世日本史において沖縄のおかれてきた位置の歴史的な重みが、はじめてうかびあがってくる筈である。同時に、沖縄人民の闘争が、その自治権の問題に始まるとき、本土復帰―返還の欺瞞に支えられたスローガンは、われわれの本土での戦列から最後の最後に消えてなくなるだろう。

以上の三点を四・二八闘争の総括点としてとりあえず列挙したうえで、われわれは、第二の点からひき出しておいた二つの問題の検討に移らねばならない。次章でまず、今日の大衆闘争の構造と今日における社会叛乱の意味を検討し、IIIで、革共同全国委員会の八奪還―復帰V論を、その論理構造に関して検討しておいたうえで、ベトナム革命が表現している今日の状況の中で問われているいくつかの点の検討をへて、われわれの沖縄解放闘争の基本的な視点を最後に提起していくことにする。

もなく、しかも広範に・ラディカルに憤出する大衆の闘争力―それは、従って厳密に言うなら、どのような意味でも政治的なものではない。そして、大衆の反権力闘争の成立を、狭い政治性の水準においてしか考えることの出来ぬ頭脳によっては、今までおこっている闘争の大衆の闘争力の質も、その出生の根拠をも、透視することは原理的に不可能なのだ。

今、憤出している大衆の反権力的な闘争力は、政治的というよりはるかに社会的なものである。「社会的」とは何か。政治権力の政治的動向に対する政治的な怒りから論理上は区別されて、政治国家がその社会的支配の諸政策の累積の結果として生み出した市民社会における矛盾とあつれきの中から、にじみでるように生まれている叛逆の精神という意味である。それが今、政治集団の前衛的行動を媒介としてラディカルに憤出している情況は、市民社会―社会過程における大衆の反権力意識が、大きな不均衡をもちながらもその先端的な部分では、今や沸騰点にまで加熱されつつあることを意味する。

われわれは、ここにこそ、今日のブルジョア支配が自らのうちにやどしている危機の本質的なあらわれを見なければならぬのだ。講座派理論が、日本革命思想の正系としての位置を確定して以来、繰り返えし語られてきた経済決定論的「危機論」の位相をこえて、今日の支配の危機は、ひとことというなら、政治国家が、その共同

幻想のうちに市民社会を包摂しきれなくなっている点に、その本質をもっている。

われわれは、六五年の日韓闘争の政治過程で、大衆の中における議会制民主主義への戦後的幻想が（あるいは戦後的「価値意識」が）もののみごとな風化をよせていることを、あの強行採決時点以後の闘争の急速な退潮の事実によってまざまざとみせつけられた。強行採決に対する大衆的な怒りへの期待——それによる闘争の激化への期待は完全に裏切られた。そこにあったのは大衆の政治的アパシーである。何よりも議会制民主主義の政治に対するアパシーである。そのアパシーを私生活民主主義の中に組織化することは、政治国家の行政的能力にかかわる問題ではなく、支配階級の社会的ヘゲモニー能力にかかわる問題である。しかし、日本帝国主義は、（そしてすべての帝国主義が例外なく）このヘゲモニー能力を欠落させているがゆえに、大衆の中の政治的アパシーは、私生活民主主義＝秩序の中に安息を発見することの出来ぬ剰余部分をたえず増大させてきている。そして、秩序から自己を疎外し、市民社会の暗い底流としてよどんできた政治的アパシーこそが、今、街頭バリケードから交番襲撃に至る諸々の様式のうちに憤出してきているのだ。

かかる状況は、共産主義的政治集団に対して、新たな課題をつきつけている。大衆闘争の爆発が政治国家との関係においてのみ形成されるのではなく、政治国家の政治に対する政治過程をめぐる闘争とは論理上区別される、市民社会の深層から惹起される社会過程での闘争が、今、学園をはじめとするいくつかの「拠点」に限定されているとはいえ、その自立的な発展の歩みを開始していること、それを権力への闘争の展望のうちにどのように位置づけ、どのような

## 二 外

の論理的区別だての世界の中から見ると、大衆の現下の社会叛乱は、かれらの理解をこえた「小ブルブルランキズム」として映じ、彼ら自身はたえず右派として登場するほかないように運命づけられているのである。

だが、問題はひとり革マル派のみ与えられているのではない。今日のわれわれの武器として所有する「マルクス主義」のいづれにとっても、現代は、たえず不可視の領域をもって理論に迫っている。△ハードからソフトへ▽これは、△連続から断絶へ▽とならんで、電子計算器ファシズムのうたい文句のひとつである。実に、現代帝国主義は、機動隊の警棒のように「ハード」かとおもえば、そのうしろに、とらえどころのない「ソフト」なものをひきずっている△柔構造社会▽である。そして、われわれが《革命》を展望しなければならぬのは、この△柔構造社会▽の中であり、この柔構造をトータルに把握することを、われわれの理論は、たえず迫られているのだ。ここでいう《革命》とは、言うまでもなく、マンガの「臨時政府宣言」などとは無縁である。われわれがこの言葉のうちに何を考えているかは、▽章以下の展開の中に断片的にはさんである主張をとりあえず参照してほしい。又、今日の階級闘争の二重的構造については創刊号の巻頭論文を参照せよ。

## (2)

現在の大衆の街頭闘争がかかるものとしてあるとすれば、それは、それは直接には政治的叛乱ではなく、社会的叛乱と呼ぶほうがふさわしい。従ってまた今日の激動の性格は、なお小ブルジョアの急進的叛乱の

指導を与えるべきか、という問題である。そして第二に、それとの関連のうえで、革命のインタナショナルリズムをどのように運動論として形成するかが、あらためてとわれている。それを不可避の間として設定しているものは、言うまでもなくベトナム革命であり、第三世界の革命闘争である。

六〇年安保闘争に至る過程での諸闘争の歴史において、社会的闘争がそれ自身として自立的に展開されたことがなかったわけでは決していない。しかし多くの場合、それらは△経済闘争▽あるいは△改良闘争▽の名のもとに△全国的政治闘争▽への従属的な位置規定を与えられて来た。それは、ひとつには、政治闘争が理念的な全体性を保持しえて来たことの結果でもある。

福祉国家的幻想の破綻と、市民社会の深部で進行する生活破壊をも伴った帝国主義の国民支配の全社会的再編は、戦後の政治闘争の全体性の根拠を解体させたのち、政治的位相とは相対的に独自の論理で運動する、社会過程での闘争を激発させている。ブルジョア階級支配における政治国家と市民社会の解離の開始は、必然的に反権力闘争の構造を二重化させ、大衆の闘争を、その組織形態に至るまで二重化させているのであり、こうした現時点における政治集団（党）の、政治的指導性は、この二重性の止揚を、プロレタリア独裁の樹立の展望のうちに、歴史的階級の自己形成過程として遂行する方向を与えるものでなければならないのだ。

かかる二重性は、帝国主義権力支配の歴史の所産として必然的なものであり、歴史認識を論理認識におきかえなければならぬ革マル派の理論はこの必然性への理解を射程の外にしている。それゆえ個別改良闘争＝「大衆運動」と「革命運動（＝党のための闘争）」

枠内にあるといわなければならない。こうした急進的社會叛乱の延長線上には、小ブルジョア自己権力の《神話》（注）はあっても、プロレタリア独裁への発展をそのうちに透視することは、論理的にも不可能なのだ。（注）小ブルジョア自己権力は、今日の大衆的社會叛乱の中では、あくまでも《神話》（「ミート」）として啓示のおとずれるのであって、決して《空想》（「ユートピア」）ではない。そして、まさにそれが、《空想》（「ユートピア」）から区別されるところの《神話》（「ミート」）としてあるところに、今日の小ブル急進主義運動の必然性と有効性が示されているのだ（なお、《神話》と《空想》については、ソレル『暴力論』によって、その意味を確認されたい）。

プロレタリア独裁の樹立を綱領的立脚点とする政治集団にとって今ひとつとされてきているのは、現下の自然発生的な大衆叛乱の昂揚に対して、小ブル急進主義の先駆性と有効性の原則点をあきらかにしておくことであり、それによって、大衆闘争の昂揚期にたえず政治集団をおびやかすものとして登場するところの、指導の側における自然発生的性への拜跪の諸形態との原則的な闘争の論理を再び確認しておくことである。それがどこまで原則的に遂行されるかは、ひとえに情況認識の深度とその射程距離にかかっている。

労働者階級の階級としての自己形成が未熟な段階にあり、本格的な革命運動の昂揚が開始される以前の段階に、小ブル急進主義は戦闘の前線を担うものとしてあらわれ、来るべき革命を社会に告知する。既製指導部が体制内化し、大衆の社会的＝政治的憤激を有効に組織しえないとき、小ブル急進主義は、闘争にたちあがった大衆の唯一の自己表現であり、そのようなものとして、それは、大衆的な

闘争の爆発をひき出し、開花させることができるのである。ロシア革命、中国革命、キューバ革命、そしてフランス五月において、われわれは、学生運動が実践的な先行性を示したのを見て、小ブルインテリゲンチアの急進的な闘争がプロレタリア運動に先行する革命性を持つことができるのは、それが形式においては小ブルインテリゲンチアの急進運動としてありながら、まさにそうしたものである。闘う大衆の自己表現となりうる場合だけである。その有効性の根拠は、主体としての小ブルインテリゲンチアの、心情や観念における革命性ではなく、小ブルインテリ大衆の闘いがもつ歴史的な必然性そのものにあり、従ってまた、大衆運動主義的な性格とその表現形態は、その有効性の条件の一つなのである。

この原則点を自己の現在においてあいまいにし、心情の主観性にもたれかかって自己の情況認識をたえずみぎきつづける努力をうち捨てる時、そこに、指導の側における自然成長性があらわれる。それは、小ブル急進主義運動の歴史的必然性と社会的根拠への科学的洞察を、眼下の昂揚や激動に目を奪われて忘却し、小ブル的昂揚の連続的発展の延長線上に人権力奪取Vを夢想するか、あるいは、小ブル闘争の限界をその形式のうち求め、観念における革命性の純粹培養へ問題を歪曲するかの、いずれかの形態をとってあらわれる。そして、政治集団(党)の位置は、前者にあっては、大衆に危機をアジリ、戦術をエスカレートするための単なる機能上のものに、又後者の場合には、その心情の革命性を教宣し、その狂信者たちを組織する密室と化する。

この両者は、実践的には両極をなしつつ、その論理において相互に密通し、情況の変化によって単振子のように相互転化するもので

### 三 内

一握りの左翼空論主義者たち(共産主義突撃隊の総括「党・赤軍・戦争」なる文書を見よ)は、まだ開始されてもいない「内乱」だとか「武装闘争」(相手を殺せないものは「武器」とは言えないのだ)の「戦闘Vへ、現在の闘争の戦術形態を「高める」創意工夫に熱中していた時期をすぎると、マンガのような「臨時政府宣言」についてしゃべりだし、その「臨時政府宣言」の「未来Vのために△現在Vの闘争から公然と召還しつつある。必要ならこの厳然たる事実を「臨時政府宣言」を「マッセスト」とおきかえてもよい。いずれにせよ人は、混とんの「現在」を絵にかいた「未来」によって超えようとするときには《神話》から《空想》へ身を転じているのだ。そして、これこそが、あれこれの△形態V論の本質である。

わが左翼的空論家たちは「武装」という「言葉」が大変すきである。こころみに、彼等が「これさえ読めばいじょうぶ」とおもっている、レーニンの『国家と革命』をめくってみると、こう書いている。「武装した労働者は実際の人間であって、感傷的なインテリ女性ではなく、おそらく自分をいいかげんにあしらわせはしないであろう。」——だがわが左翼空論家たちは、自らも参加した闘争を「実際の」ではなく「いいかげんに」扱ってはいないか。そのことによって、かれらは自らを「いいかげんに」扱っているのであり、その勇ましいことばが、どれほど「いいかげん」であるかは察しがつくのだ。

レーニンは、名著『何をなすべきか?』の中で、指導における自然発生性をきびしく批判し、そしてこの『国家と革命』の中で、政治スローガンと運動の根源的スローガンとの区別を強調した。レーニンは、原理的に正当な主張を、状況判断を考えにいれずに政治的

あることは、六〇年安保闘争の昂揚と敗北の過程における旧ブントの運動様式によって端的に表現された。反スタ派の諸君の観念史のうえてとはちがいで、現実の歴史過程として旧ブントをみたとき、まさに反スタリニズムの呪文に自己の過去史を売りわたすことを拒絶したこそ、旧ブントのもつ生命力の体現者であったといわなければならないのはこのためである。いうまでもなく実践的なもんだいとしては、この単振子運動は、小ブル急進主義の連続発展の延長上に革命を夢想しているように振れている時の方が、はるかに有効ではある。しかし、昂揚期の闘いのなかで、この単振子運動を根底からこえることを目的意識的に追求しないならば、いずれにせよ△組織Vが問題となるたびに悪しき前衛主義がくりかえし頭をもたげることが不可避なのだ。

今このことを確認するのは、ありうべき未来における闘争の歪曲を憂慮しているためではない。この単振子運動は、激動の今日においてもその運動を貫徹しつつあり、わが同盟自身、その危険性をまぬがれていないからである。小ブル的昂揚のはてに「激動」をこえて「政権奪取」を夢想する者が、その感性をひとたび論理化しようなどと考えだしたとき、それは論理の自己運動に身を委ねて、△未来から現在を規定するVなどと言いはじめめる。これが、何事もキチンと予定をたててやらなければならないというブラグマチズムにあるうちはいいのだが、これをこえて無限定に自己を主張するとき、それは、夢想された「未来」の闘争のために「現在」においては、闘争の実践局面からの召還を帰結することになる。この危険は、ただ論理的に予測可能なものの段階をこえて、実践的な問題となった。四・二八闘争総括から「赤軍がなければだめだ」などと言いだした

宣伝のスローガンとすることが、革命家の中に生み落す頹廢と誤謬を、くりかえし警告しているのだ。左翼空論主義者は、曇りなきひとみで、もう一度、『国家と革命』を読みなおす必要がある。そうすれば、『左翼小児病』のレーニンは誤りであった、などという、コーン・ベンディットまがいの心情的発言が出ることもない筈である。

「全体としての世界の政治情勢は、主としてプロレタリアートの指導部の歴史的危機によって特徴づけられる。」

『過渡的綱領』の冒頭の一句が、今よみがえるとすれば、それは、実に以上のべたような意味のことである。われわれは「組織」に関する限り今だに『何をなすべきか?』的情况」にいたるのだ。(創刊号神津論文「共同体論」八一頁を参照せよ)

### 《附記》

われわれは、ここで「中央権力闘争」について、簡単にその意味を考えておかなければならない。この言葉は、次の三点の区別をあきらかにしないとき、いくつもの誤解をよびおこすのだ。①権力に対する「抗議」闘争②権力に対する暴露の闘争③権力奪取を直接の目的とする闘争。①の場合、「権力」とは、論理的に言って支配階級そのものを意味するのでもなければ、支配階級の政治委員会を意味するのでもなく、特定の「政府」のみを意味する。そして、この闘争が形式として有効であるのは、大衆が、議会制民主主義に対して幻想を、換言すれば価値意識をもっており、それゆえ権力の横暴(例えば強行採決など)を、まさにその価値体系への背反としてうけとめ、怒り、行動へと決起しうる情況の中においてであ

る。②の場合「権力」とは、すでに幻想の対象として失格しているが、大衆の側は自らの行動の論理を固有の権力意志へと昇華させておらず、それゆえにここでの「権力」とは、悪の権化ともいべき抽象にとどまっている。③の場合に、大衆は②のような限界をのりこえ、何ゆえ悪たる権力が存在しているかを具体的にとらえ、その権力の存在基盤に対する具体的な闘いを通して自己の権力意志をあまりにしていなければならぬ。いいかえれば、プロレタリアートは、自己を支配階級として組織する作業を具体的に開始していなければならぬ。

いうまでもなくわれわれの歴史において、①はすでに過去のものとなった。六〇年安保闘争は、いうまでもなくこうした論理の有効性のうえに立脚し、それを最大の限度にまでつめ開花させえた闘争である。そして今、われわれは、いまだ③のような条件をもちあわせる段階に至ってはいない。まさに②こそ、大衆の中で、権力が、 $\wedge$ 悪 $\vee$ なるものの抽象体としてあらわれ、従って又その闘争が否定的な、拒否的な、破壊的な様相をおびて爆発する状況における、対権力闘争の段階なのだ。

そしてわれわれがここで深く注意をほらわなければならないのは、②から③への移行のための条件である。この移行のための決定的な困難さは、発達した資本主義によって、かつてないものにまで巨大に、重く構築されている。われわれが革命運動の歴史において、先進国革命の未踏の道をいかなければならない今、この困難さがどのようなものであるかにこそ、全理論的努力は傾注されなければならないのだ。

第二インターナショナルの崩壊を宣言し、第三インターナショナル

### 三外

ればならない。

大衆の中の議会に対する幻想は、支配階級の歩んでいる、全社会的再編過程によってこそ、そのペールをはぎとられたのであり、社会的拠点をめぐむいづれの闘争の中でも、闘う大衆は権力を $\wedge$ 悪 $\vee$ の根元として認知している。そしてさらに今日の状況の中では、その帝国主義的再編の要をなす問題に、行政権力の再組織が鮮明に浮び上っているがゆえに、中央権力闘争は、抽象的にしか展望されぬ政治革命と抽象的にしか提起されぬ社会革命への大衆の自然な接近の希求の統一として決定的な重要性をおびているのである。この中央権力闘争の目的意識的な展開を欠落させるときに、小ブルジョア急進主義の最良の要素は、小ブル自己権力の《神話》を呼びよせることになるのである。革共同の理論がこの点を認識しえぬその基本的な理由は、さらに後章で詳しく展開されるだろう。

(3)

さて、(1)でみたような社会的根拠をもって今、すべての街頭政治闘争が、そして社会拠点での闘争がアナキーにもみえる叛乱のエネルギーを爆発させている時、もうひとつ解答を与えておかなければならないのは、このエネルギーが、反権力的姿勢をもちつつもフアシズムに組織される可能性ももっているのではないか、という不安に対してである。このような「不安」は、今日多くの場合、指導部の大衆に対する「不安」であり、一種の「不信」でもあるのだが、この点については今は触れることは出来ない。ただ、三〇年代と今日を機械的アナロジーにおきたがる傾向に対しては、「歴史」とは

ルの革命的建設を宣言したとき、レーニンはこの問題に深い注意を払っていた。「修正主義」は、西ヨーロッパでは深く社会的な根拠をもっているが、ロシアでは、浅い根しかもつことが出来ない、と言ったとき、そして、アメリカIWWの労働運動やイタリアの工場評議会運動に高い評価を与えたとき、そして、コミンテルン四回大会での有名な「自己批判」をのべたとき、このことは、彼の脳裡に深くきざみこまれていた筈である。だがスターリンの支配下、コミンテルン運動は、レーニンのこの注目を完全に見落した。今日、左翼空論主義者は、西ヨーロッパにおけるスターリニズムの出生が、まさにこの点の視点を欠落させて成立した「極左」的ルンプロ革命思想の中にあつたことを深く考えてみるがよい。そして、一九一九年ドイツにおける、スパルタクス・ブンドの多数派の「共産主義労働者党」の活動とその帰結の歴史を、自己の言動に比較して深く検討してみるがいいのだ。そこにはおそろしいほどの類似があることを知る筈である。われわれは、機会をあらためて、この点の歴史的事実を本誌上で発表したいと考えているが、さしあたって以上のことだけは言っておかねばならない。

今日、「中央権力闘争」は、実に②のような意味で、決定的な有効性と重要性を発揮している。だから又われわれは、闘争の焦点となる地点がどこであろうと、渡り鳥のようにあちらからこちらへと移りゆくことの中のひとつの点としか「中央権力闘争」を考へることの出来ぬ革共同（『前進』四三七号における武部達郎君のわれわれに対する「訴え」を讀め。その正当な指摘のいくつかと、そして同君の同志的な姿勢に対しては、敬意と賛意を払うけれども、この点では、批判に同意することはできない）から、自己を区別しな

何であるのかも少し深く考えるように注意しておこう。

創刊号の巻頭論文が指摘したように、いわゆる戦後民主主義は、敗戦帝国主義としての日本が、新たな資本蓄積様式を社会的に形成するうえで決定的な条件をなすものであった。（「戦後民主主義」を政治制度の次元でしかとらえないとき、旧れいめい派の「妥協体制」論があらわれる。その批判は以下の論旨の中にふくまれている筈である。）この内容をいまいちど創刊号から引用して確認しておこう。

「アジアでの植民地の喪失によって自国とナショナルな結合を持つ市場を有していなかった。戦後の財閥解体から経済民主化への至る諸政策は資本の蓄積様式、独占体の形成方法に於て、打撃として存在したのではなく、逆に重化学工業を軸とする資本及び産業構成の高度化となった。巨大独占資本による超近代的生産様式と農村中小企業による前近代的生産様式の独特の結合として特徴づけられてきた（戦前の）社会構成の変化である。農村を軸とする共同社会の解体による日本社会の二重構造の構成の転換である。都市と農村の緊張関係から都市内部へ軸が移行した。と同時に生活の価値概念の中で旧共同体（土地——自然）にまつわる種々のものが解体し、商品経済の浸透が進行した。他方上部構造では天皇制と議院制の緊張としてあった国家の政治的解放を遂行した。戦後憲法の形成と戦後民主主義の浸透は過渡的な意義を有していたが、戦後に於ける資本家階級のイデオロギー的環であった。」（創刊号七頁）

かかるものとしての戦後型ブルジョアイデオロギーは典型的な自由主義として自己を表現する。そして自由主義こそは、ブルジョアナシヨナリズムが持つ究極の形式なのだ。戦後の自由主義は、ワイ



マールのドイツにおけるそのとき空疎な理念の宣言ではなく、まさにそれに依拠してこそ、労働力商品の社会的生産と分配の運動を再建することが出来たものとして、戦後日本ブルジョアジーの政治権力が市民社会の総体に対して作りだした社会的政治的ヘゲモニーの構造にほかならない。戦後期、この事情は全ての帝国主義にはば共通する。戦後の自由主義は反ファシズムを共通項とする、第二次大戦のブルジョアの総括としてあっただけでなく、それはさらに反ファシズムを反共産主義へスライドさせてゆく政治過程によって補強されたのである。さらにわが国の戦後の場合に、それに加えて被爆体験を媒介として自由主義はそのイデオロギーの振巾と射程を世界大に拡大する。その世界大に拡大された自由主義こそ、ブルジョア権力にとっては、軍事費の重圧をアメリカに依存することによってまぬがれ、産業投資へ主力をそそぐための条件をなすものとして有効な機能をもったのだ。

自由主義としての究極形態にまでたどりつくブルジョアナショナリズムの歴史の最終局面は、そのあとをもっていない。古典的ナショナリズムをウルトラ・ナショナリズムによって克え、そのウルトラ・ナショナリズムの敗北を超えるために自由主義を手にしたブルジョア社会は、ウルトラ・ナショナリズムを新たな民衆組織化の「神話」とすることは出来ないものであって、国家・民族といった概念は、ブルジョアイデオロギーの国民統合のための構成条件としては、決定的に無力化している。いうまでもなく国益・国防論は今日の日本帝国主義のイデオロギー的環として要請されているが、しかしそれは、実際には、ウルトラナショナリズムの小集団以外には、秩序派としてしかあらわれないことが出来ないのだ。

#### 四内

ない。右翼的ロマン主義の代表的人格と目されている三島由起夫が、東大文学部のカンズメ団交に対して書いた言い方の、もののみごとな秩序派ぶりをみよ。かつての日本浪漫派の妖しいまでの毒の誘惑力は、今、衰弱したロマン主義に変貌を余儀なくされているのだ。民衆のナショナルな組織化がブルジョアジーによってどのような

### Ⅱ 革共同へ奪還V論の構造

われわれは四・二八闘争が、日本階級闘争史上に持つその画期的な位置の評価を確定する(Ⅰ)とともに、そうした到達点がまさに到達点にあることによって顕在化させた弱点を確認した(Ⅱ)。それは客観的過程としては、プロレタリアートの階級としての自己形成の未熟性の表現であり、共産主義前衛としての自己をめざすものにとっては、自己の政治指導能力の問題としてある。

革共同全国委員会(以下「前進」派をこう呼び、「革命的マルクス主義」派は「革マル派」と呼ぶ)の「本土復帰——沖繩返還」論は、現段階における反帝諸派の総体の弱点を表現しており、わが同盟もまた四・二八闘争の組織過程でこの点で従来の水準を超えることは出来ない。「戦旗」紙上の「四・二八シリーズ」が、四・二八闘争の「沖繩闘争」としての解明に何らの展開も与えていないことに、それは端的に示されている。政治指導上の弱点の克服を左翼的空語で代位することへの誘惑ときびしく闘い、われわれの現在を超えるための主体的努力をかさねなければならぬのだ。政治指導の弱点とは、もう一度繰り返すが、伝統的「復帰路線」

この点では、そのファシズム化を左翼からも市民主義者からも予言されて来た創価学会の現段階が、象徴的な意味をもっている。

創価学会が、急速な膨張をとげていた時代の社会的基盤は、都市貧民層であり、没落の危機にたえずおびやかされる下層プロレタリア層であった。《第三文明》は、その時期にこそ《神話》としての条件をもつことが出来た。現世的利益の追求を積極的に賞揚された階級は、まさにそうした現世的利益から疎外されていたがゆえに、そこに自己の内部にうっ積していたエネルギーを発揮することができたのである。しかし、創価学会が、その組織化を中間層へ移行させたとき、その膨張のひみつをなす条件を自己のうちで切りすてた時代がはじまった。中間層にとっては、貧民層にとって非現実であった現世的利益は、日常の生活の中に与えられていたのである。イデオロギー武装に方向をかえたとき、そこには、教科書を熟読し勉強する時間的余裕をもつものと、そうした時間のすべてを生活のために割くことを強要されている者との対立が生じるのは必然である。

政治との関係でいえば、創価学会が公明党をつくって議会へ進出したときが、上記の転換点に対応する。自らが席をおくことのない議会や、その制度や、その生む政治は、いくらでも告発し、それによって議会制民主主義の幻想からも疎外されている階級のエネルギーを組織することが出来ただろう。しかし、公明党が議席をませば、それだけかれら自身の政治的位置を、秩序内反対派として、限定しなければならず、それによって自己の最初の社会的基盤をなす階級の代表者としての役割を減少させてゆくほかはなかったのである。

ウルトラ・ナショナリズムの今与えられているかかる条件(無条件)は、そのイデオロギー的代表者のうちにも刻印されざるをえなく述べることになるだろう。

画策されているかに、おびえた警告を発するよりも、それを自身の問題として積極的に把える努力の方が今必要なのだ。ナショナリズムは、われわれの問題であり、われわれの革命の問題である。のちにわれわれはこの問題にもう一度たちかえりわれわれの見解を少しく述べることになるだろう。

われわれは、この限界の中におかれているわれわれ自身をもふくめた革命的左翼諸派の今日の姿の中に、さまざまなイデオロギー主義(主観主義)を、苦痛をもってみつめる。だがそれへの解答は、果してより現実的Vな方針を拾い集めることの中に与えられるだろうか。A観念的Vと現実的Vと、われわれは、それらの言葉を、それらの持つ論理的位相と水準をたしかめることなく一般的にふりまわすことは許されていない。そのことの例証として、わが革共同の戦闘的同志たちによって全面的に展開されて来たその「奪還」論を、ひとまずその論理構造上の点に限定してここで検討しておくことにしよう。

われわれが革共同の「本土復帰」論を批判したとき、かれらはそれを「幼稚な反発」だと嘲笑しつつ、次のように自らの方針を提起した。

「われわれが七〇年に向けて沖縄闘争の本格的爆発を準備するためには、まず沖縄返還が帝国主義者がしかけた『落し穴』だとか『陰謀』だとかいう用心深い間ぬけた誤った理解をまず投げ捨て、安粉砕・日帝打倒と並んで沖縄の本土復帰・基地撤去のスローガンを、何のちゅうちょもなしに日本の全労働者人民のスローガンとして打ちだすことからはじめなければならない。」(パンフレット『沖縄奪還』八八頁——強調は引用者)

論争の方法としてはめっちゃくちゃだが、何にせよ大胆な方針提起にはちがいない。それはさらに次のような確信によって補強されている。

「まちがいがなく彼ら(奪還論に『幼稚な反発』をしめしている人たち)のこと——引用者」のB五二撤去闘争(従って沖縄闘争)のとりくみは本土復帰に対する確信の深まりに比例して強められるであろう。」(同二四頁)

これらがかくも確信をもって大胆に「何のちゅうちょもなしに」本土復帰——沖縄奪還Vのスローガンを掲げる根底には、このスローガンこそが「現実的」なものなのだという意識がある。なぜ、そしてどのように「現実的」であるのか。①本質認識——「分離支配」②帝国主義者の「返還」は欺瞞——現状認識が、③方法論——純化された政治力学主義によって体系化されたときに、その「現実性」はか

れらの「確信」となるのだ。その論理構成をかれら自身のことばによってみてみよう。以下の引用はすべてパンフレット『沖縄奪還』からのものであり、ところかまわず都合のよいところをとって並べた。組織性を誇る革共同であるから、こうしたことによっても内容の歪曲になってはいないと思うが、もしその意図する主張がねじまげられていると考えられるなら、批判をうける用意のあることを念のため断っておきたい。

①本質認識——  
②「日米同盟を基本的政治路線として、そこに敗戦帝国主義の復活強化の方向を設定した日本帝国主義は、軍事要塞——沖縄をアメリカの全一支配下におくこと、帝国主義的分離支配におくを積極的に承認してきたのである。」(六頁)

③「戦後の日本が『平和日本』と為政者がいうことのできる裏側には沖縄がアメリカ帝国主義によって分離支配されてきた、ということがある。」(同)

④「沖縄の米軍基地は、一切の法的制限をうけない、米軍政支配下に軍事的優位制を保持しているものであって、このような状態それ自身がアメリカ帝国主義による軍事占領という外からの力によって強化された分断支配によってはじめて可能とされたのである。」(八八頁)

⑤「沖縄におけるアメリカの支配は、日帝の安保同盟政策にもとづく『沖縄のアメリカ帝国主義への積極的ゆずりわたし』として存在しているのである。」(十六頁)

⑥「日本帝国主義が沖縄の返還を実現した後には日本の法律の適用

下で、現在の沖縄の軍事基地を『アジア侵略前線基地』としてそのまま維持し得ると考えることはできない。」(八八頁)

⑦「佐藤の沖縄政策は、アメリカの沖縄支配と本質的に不可分離な状態にある軍事基地としての沖縄をそのままにしておいて(むしろその維持と強化のために)アメリカの沖縄支配の動揺を日本帝国主義の補強的介入——予防的介入によってささえ、沖縄における矛盾の爆発と日本本土への波及による基地沖縄の危機の到来を避け、安保体制自体の危機の到来を避けることに基本的ねらいがある。」(十三頁)

⑧「基本的に沖縄をアメリカが支配していることと、沖縄の軍事基地とは本質的に切りはなすことができない。本質的に切りはなすことができないものをそのままにしておいて、一方では返還ができるのかのごとく提起しているところに佐藤の『返還論』の非常にベテ的な性格がある。」(十四頁)

⑨さて、このような分離支配を絶対条件とする「沖縄」に本質的にその現状の維持と強化をしか考えていない日米帝国主義に対して本土復帰Vはどのような政治力学的位置を占めるのか?

⑩「沖縄問題の特殊性は、それ自身としては何の社会主義的要求も含まない本土復帰という要求が、現実には日米安保同盟に媒介されて帝国主義の反動的拠点を根底から揺るがす闘いに転化しているということにある。」(八四頁)

⑪だから「日米帝国主義の沖縄の分離支配に反対し本土復帰を要求する百万沖縄民のたたかいは、(中略)安保同盟を必然化する日本帝国主義そのものの革命的変革を内含するたたかいとして発展していかざるをえない。」(二九頁)

まさにこの「い」かざるをえないVの一語の中にこそ、かれらの論理の生命がある。この「い」かざるをえないVの一語こそ、沖縄奪還論の現実性の根拠が、その「安粉砕・日帝打倒、反帝国主義への最短最良の水路」である根拠が、一点に凝集されるものとして機能する「キイ・ワード」なのだ。

沖縄の帝国主義支配の本質——分離支配に対置された「復帰V」は、日米帝国主義同盟——安保そのものの基礎に絶対的に対立する力学的位置を占めるのであり、それを社・共のごとくあるいは民族主義的にあるいは議会主義的にせよ、歪曲しないで「ちゅうちょなく」まっすぐ推し進めれば、安保同盟が、そしてそれをこそ自己の存立条件としている日帝が危機に追いこまれることはまちがいないのだ。かくて、この定式化された純粋力学主義の論理的帰結である「奪還——復帰V路線に対して、いささかでも疑問を持った」幼稚な反発——を示す者たちには、次のことばが鉄槌として打ちおとされる。

「スローガンを物神化してはならない。小ブル平和主義をおそれて原水爆反対のスローガンを避けるのか。経済主義をおそれて大幅賃上げのスローガンを避けるのか。大幅値上げのスローガンに誤りがあるから経済主義的墮落をするのではない。階級的立場で大幅賃上げを闘い抜くかどうか問題なのだ。」(十六頁)

⑫「い」までもなく今日の革共同の幹部たちはかなりの経験の持主であるから、AとBは対立している、だからBが進めばAは後退するほかないVという小学生の力学だけで問題がすべて片づくと思っ

ているわけではない。

「民族排外主義的・ブルジョア民族主義的墮落の危険性はもちろん大いに存在している。その傾向は現実にもある。だが、そうした墮落は、本土復帰の闘いの全人民的発展とは基本的にあいれないものである。むしろそうした傾向と闘うことによって始めて真の復帰闘争となり、反帝国主義運動となるのである。」(十五頁)

「本土復帰の闘いは帝国主義者の沖繩維持政策に対決するものであり、鋭い階級意識に指導されないならば一歩も前進することができない。」(同)

ところでこの「鋭い階級意識」はどこからもたらされるのか。

「民族排外主義的・ブルジョア民族主義的墮落」に対して、それはどのように闘うのか。△ヘンカン▽と言わず△ダツカン▽とむづかしい言いかたをすることによってか、整然たるデモではなく、断乎たる実力闘争をやることによってか？

早大新聞会の組織者として、革共同全国委員会の創成期のメンバーとして生きて来た本多延嘉氏(＝武井健人氏)はともかくとして、清水丈夫氏や岸本(陶山)健一氏は、全学連第二期黄金時代の指導者として、六〇年ブンドと全学連主流派のトップリーダーとして生きて来た人びとである。その彼等が、日共主流の民路線および右翼反対派＝高野グループと闘いつつ反戦学同を社会主義学生同盟へ転化したとき、その運動路線は何であつたらうか——スターリンの平和論を下敷にして平和擁護闘争を世界革命の戦術と規定するものであつた。帝国主義は平和とはいいれない。平和擁護闘争を徹底的に急進化して人びとをして、帝国主義の打倒なくしては真の平和はありえないことを知らしめ、反帝意識(鋭い階級意識)ですか△

五内

学へ坊主ザンゲし(全くナンセンスだと思ひますよ)、そしてさまざま政治技術を習得し(これ自体はナンセンスではない——念のため)十年をへだてた今ふりかえってみても、何も進歩していないではないか。なぜ進歩していないのだらう。単純に怠慢だったためではない。歴史の進展が呼びおこす諸問題を思想のレベルでうけとめることを放棄したところにその△鋭い階級意識▽が位置を占めていることこそが問題なのだ。怠慢という言葉を使うとすれば、まさにこの点を掘りさげることによって、自己の歴史をただ清算するのではなく克服することに努力して来なかつたことにあるのだ。

△現実▽としての情況に対しては「現実主義的」に、すなわち、「純粋政治力学主義的」に対応し、その活動に耐えぬくためのパトスを義務意識で与えるためには、空中にぶらさがつた△鋭い階級意識▽で武装する——これこそが、今も変らぬかつての全学連主流派今は革共同の指導者たちの「確信」にみちた一貫性にはかならない。

(3)

△現実的▽なもの△観念的▽なものは、両極分解をとげたその

#### IV 七〇年への論争基軸

(1)

革共同の主張を、大部長く相手にした。革共同の△奪還▽論は、

で武装させ、世界革命へ前進する。(注)——当時のあの運動図式と、今日の革共同論理とは、△平和▽を△反戦▽におきかえ、スターリンの名札をはずし、「反帝反スタ」でちょっぴり香りをつけただけで、十年まえと何もちがってはいないのだ。

(注) われわれは全国委員会のえらいさんたちより、幸か不幸かおくれで生まれたので、全学連運動の「黄金時代」に遅れてしまった世代に属する。だからこの点に関して言えば、それらは、われわれにとっては自分の歴史の中には実はないのであつて、一方では六〇年の闘争のその奥にほんやりと透けて見え、他方ではものの本によって知るはなかつた。われわれの「ものの本」とは、ついでに言っておけば、津田道夫の『現代のトロッキズム』(六〇年・青木新書)であり、山中明『戦後学生運動史』(六一年・同)であり、そして、陶山氏のおにい様、森茂氏の「平和擁護闘争から反戦闘争へ」という論文(『批判と展望』第二集・六二年春)であり、要するにつまらないものです。でも他に何もなかつたから仕方がなかつたのですよ。

「反戦闘争が実は帝国主義との真向うからの対決であり、最も鋭い階級の闘いであることは歴史が教えている。」(十五頁)

清水丈夫氏がこう言うとき、この△歴史▽には、反戦学同の「反帝平和闘争」、社会学初期の「原子戦争反対闘争」から、六一年マール同全学連の「革命的な反戦闘争」、そして今日の革共同の「被抑圧人民の立場」に立ったベトナム反戦闘争——これら十年の△歴史▽が透けてみえる。この△歴史▽を、たえず戦線の中心で生きて来た清水氏は、だがこの中から何を教えられて来たのだらうか。

これらの言う△鋭い階級意識▽は、「死の跳躍」として、黒田哲

果てで、一周まわって再び邂逅する。しかしそこには、ことばのもつ位相と論理段階を確定する自立的な規準がないために、その△観念▽はいくらでも△現実▽へ接近するかとおもえば、ピンチな時には△観念▽の密室へとじこもることもできるのだ。△観念▽の密室の中にわが身に似せて世界を構築する道をたどるのが革マル派である。カニはその甲羅に似せて砂をはる。幽閉者にとっては幽閉される者が幽閉者となりかくて自己は全世界となるわけである。だがその△世界▽の貧しさ、ガイコツのような「論理学」の組みあがる△総括▽と△他党派批判▽のまづしさを告発したものがこそ、歴史の現実であり、階級闘争の現実であり、南方の地からひびき来る革命と戦争の雄叫びであり、全世界をまきまくる叛乱の嵐であつた。今日の革共同の諸君が、外からひびいて来る物音にたえきれずに、黒田哲学の幽閉された空間からとびだして果敢に闘つて来たことをわれわれは高く評価するものである。しかし密室からとび出して来た諸君のまえに、次のように問いかけ、迫っているのだ。「わが内なるスターリン主義との血みどろの苦闘」をくぐり抜けて来た筈の到達点か、十年まえの左翼スターリン主義の地平であつたのは何故か、その壁はどのように突破されねばならぬのか、と。

やがて後章でかいめつ的な批判にさらされ、粉碎されるだらう。

しかし、ここに革共同の論客たちにつきつけられた問いは、ふりかえってみればひとり革共同にのみ向けられているのではない。

AとBは対立している、AをうしろへおしやるためにBをまえへおしやることは有効で現実的だ、ただBが途中で横道へそれることのないように、定規をあてるようにA鋭い階級意識Vで支えながら「ちゅうちょなく」Bをおしておしまくれ（そのためになら悪魔に魂を売ってもいい）という主張は、例えば旧れいめい派の主張（生活と権利の實力防衛を反帝闘争へ）が、そのひとつの典型を経済主義的に示していたし、独占資本の運動論理は本質的に反民主主義的なのだから、民主主義の政治的—社会的徹底化Ⅱ反独占民主的革新を通じて革命をやらうという、かつての構造的改良派の主張は、その市民主義的な例であろう。（正木真一「構改派民主主義の市民的性格」『共産主義』十号参照）。そして、一見合理的に見えるこうした主張の論理は、近代合理主義のそれではなくて何であるか。今日の学園闘争の頂点に立つ無党派急進主義のチャンピオンの中から、近代合理主義の一変種としてのマルクス主義に対する告発が出現するものも当然なのである。（山本義隆／海老坂武「近代合理主義を告発する」『情況』臨時増刊）。

戦後と呼ばれている時代——それは、こうした近代的合理論が反体制運動の論理として政治力学のうえで有効性を全面開花させた時代であった。しかしこうした有効性の歴史条件はただ一回的なものでしかない。今日、われわれはこうした時代の闘争が極地にまでこのぼりつめた地点での敗北Ⅱ六〇年安保闘争を経過し、こうした論理が反体制の思想としてはチリのように風に散り、それが独占ブルジョアジーの新たな人民支配の体系へ結集している状況の中におかれているのである。

学園闘争はその激発の中で、たんに権力の政治支配を揺がせた

課題であることを明確に把握することが重要なのである。」（パンフレット『沖繩奪還』二九頁——強調は引用者）

われわれは、すでに解析してみせたところの純粹政治力学主義とその政治力学を回転させるためのA鋭い階級意識Vによる空気入れの構図が、AもろろVという一語を接合点として典型的に完成されているのを見ることが出来る。だが、指摘しておかなければならない。ここにはさらにもうひとつのウラがある。力学的関係を運動させることが「目的」でありA鋭い階級意識Vはそのための「道具」であるように、それとしては正しく接合されたこの関係は状況の中ではたちまち逆転した関係に変化するのである。そのときA鋭い階級意識Vによる武装は「必要であること」から「目的」へとその姿を一変し、そのためにあれこれの力学運動は、従って大衆闘争は、利用の対象におとしめられることになる。いうまでもなくその典型は革マル派であるが、旧れいめい派の場合もこの点では大した違いはない。「日韓階級決戦」論が空しい敗北をのこして色あせた議論になったあと、旧れいめい派が、経済決定論的色彩をおびた人生活と権利の實力防衛路線Vへ転換したとき、同時に「党建設のための闘争」が強調して語られた。そして、解放革命の紅蓮の焔がベトナムの天地を焦がし、侵略と暴虐に抗って闘う人民の赤い血の叫びが、日本の「強制された平和」の完結体系を揺がせはじめたまさにそのときにあたって、われわれのベトナム反戦闘争を戦略展望のうちから疎外して、党建設の手段におとしめるといふ、議論のうえでの左翼性・実践的には右翼性としてあらわれる日和見主義を登場させたのであった。それには、当然のこととして、ベトナム反戦闘争自身の固有の意義と役割の評価が欠落しているという正当な批

けではない。その政治支配が政治支配として貫徹する条件としてのそのヘゲモニー装置をなす教授会Ⅱ大学アカデミーが近代的合理論を自己の論理的—イデオロギー的立脚点とすることによってそのうちに蓄積してきた嘘偽と汚辱をあかるみに出し、告発するものとしてあったがゆえに、大学叛乱は、大衆の社会叛乱の現段階を象徴的に表現する位置をもっているのである。

中核派学生運動はこのことがまったく理解できない。かれらが街頭闘争をどのように戦闘的に闘いながら、学園闘争の指導部として一流にとどまれているのは決して偶然ではないのだ。

われわれはA沖繩Vへ立ち戻らねばならぬ。だが、立ち戻るべき地点を鮮明に示すためにも、今与えられている制限の中で可能な限り議論の振幅を拡大しておく必要がある。繰返すが今問われつつけているものは、ひとつやふたつの党派だけに与えられているものではないからだ。

重復するが次の文章をもう一度引用しよう。

「日米帝国主義の沖繩の分離支配に反対し本土復帰を要求する百万沖繩民のたたかいは、民族主義的に歪められた表現をとりながらも、その根底において、世界反動の枢軸としての日米安保同盟そのを粉碎していく闘争としての意義をもっているものであり、したがってまた、安保同盟を必然化する日本帝国主義そのものの革命的変革を内包するたたかいとして発展していかざるをえない。もちろん平和条約第三條の破棄を国際法的表現とする沖繩の本土復帰は、直接に安保同盟・日帝打倒を意味するものではないが、にもかかわらず、現実的にはそれは、日米安保同盟を枢軸とするアジア太平洋の帝国主義支配体制に根底的動揺を与えることなしには実現しえない

判が『前進』紙から発せられなければならない。かかる傾向との闘争の中でわれわれは、同盟七回大会をもちとり、「民族解放Ⅱ社会主義」革命の評価と視点を確立し、国際主義の現代的内容的実践的展開を、ベトナム反戦闘争の實力闘争としての実践的遂行と、八月国際反戦集会の主体的牽引を通じて物質化して来たのである。

しかし、旧れいめい派との分派闘争が提起した問題は、そのすべてが正しく理論化されわれわれの血となり肉となって現在のわが同盟の中に共通の資産として継承されているわけでは決してない。分派闘争の理論化が不徹底にしかおこなわれてこなかった結果が、現在の同盟内に、左翼的空語に紛飾された大衆闘争からの召還を現実のものとしつつある。（Ⅱの（2）の《附記》を参照せよ）

大衆闘争の自然成長的な色調をおびた昂揚の時期に、左翼の理論と運動がそれへ拝跪してゆく傾向と、それを単なる利用対象におとしめる傾向とはつねに表裏の関係で結ばれている。新左翼運動が自らの現在を超え出るためには、かかる関係と構造そのものを総体において変革しなければならないのだ。

（2）

中核派Ⅱ革共同がこの点に関して示すおそろしいほどの無理解は、六六年の再建全学連大会期におけるマル学同中核派の諸論調に典型的な表現をみた。この時期のかれらの主張は、少なくともその論理構造に関する限り、今なお変わってはいまい。

今、手もとに当時の資料がそろっていないため、直接の引用で示すことが出来ないのが残念であるが、再建大会にあたってマル学同

中核派の名において提出された文書は、戦後日本学生運動の歴史叙述にその紙面の大半をさくという特殊な様相のものであった。

それは、まさにその点に、かれらの党派性が集中的にかけられていたことを意味する。そこで展開されたかれらの戦後学生運動史に対するかれらの理解は、以下のようなものである（この文書をもっている読者は直接検討されたい。ここでも、われわれの論点整理がもしも歪曲や矮小化をふくんでいるとすれば、批判をうける用意はつねにある）。

戦後学生運動は他国の学生運動からぬきんでた大衆性と戦闘性によって、その歴史的位置を確定している。全員加盟制自治会というその組織形態と、国際学連の分裂のちも敢然とISUの旗を高く掲げ、先進国学生運動の多くが有志連合組織の段階にとどまり、かつ、戦後の世界的な反共キャンペーンのもと右翼秩序派のヘゲモニーが貫徹し、分裂組織O.S.E.Oへ参加していったのに対して、帝国主義の支配に抗して闘う、プロレタリアート人民の最良の息子としての役割を果たしおした。そして、その中心的担い手は、圧倒的に共産主義者であり、日本共産党が大衆的な影響を持つ唯一の全国大衆組織が全学連だったのである。日本共産党との組織関係のいかんにかかわらず、学生運動の先頭には、つねに共産主義者が立ち、公然と大衆に革命を語り、帝国主義の打倒を呼びかけて来た。これは、誰でも承知している歴史の「事実」である。中核派は、戦後学生運動における共産主義者の指導性の貫徹という「事実」をくりかえしその「特徴」として述べつつ、これを、学生運動の大衆性と戦闘性のための「条件」に読みかえ（言いかえ）、そのうえでそれを論理として一般化した。

六  
内

革マル派から分離した当初の学対部長今井重雄君は、マル同中核派八回大会の膨大な・問題意識ゆたかな決議案を遺書のように残して革共同を離脱しなければならなかった。しかし、それらの同志たちの苦悩も痛みもぐっとのみこんで、かれらの論理は今、入沖繩奪還＝本土復帰Vなるスローガンのうちに、もっともにつめられた形で登場している。そして、その内容と構成の全体において、それは六〇年安保闘争の敗北の以前の時代のものの再現となっているのだ。歴史は一巡したのである。

この点に關しては、六六年においてこそ、革共同の諸君ときびしく論争すべきであった。それを果せなかったのはひとえにわれわれの側の責任であって、確信にみちた革共同の友人たちのせいではない。そしてこの論争が真に展開され深化されていたなら、十・八以後の「激動の七ヶ月」が、「サンパ全学連」としては「分解の七ヶ月」にならなければならなかった歴史は少しは変わっていた筈である。今、共労党をもふくめた六党派の統一戦線は、かつてこの三派全学連の時期よりも大きな根拠と要請のうえに形成されている。これに対して弱者の寄合いと呼びびたがっている矮小な中傷者どもに最後の死を与えるためにも、旧三派連合の間で果せなかった党派闘争を、生産的に・公然と展開しなければならぬ。六六年の負の遺産を返済することで、われわれは七〇年への道をきりひらくために、小さな貢献をしようとしているのだ。

(3)

問題は六〇年安保闘争の評価に、安保全学連の運動への評価に集

かくして、戦後学生運動の歴史は、共産主義運動の歴史に、学生共産主義者の思想史に転移する。実はこれは「十七回大会」をかれらなりに正当づけるためのドリックであったのだが、かくして、歴史は、学生共産主義者のイデオロギーの価値体系がスターリニズムの中からその左派として突出し、これをつき破った自己運動＝六〇年安保の敗北を経て、反帝反スタ・革命的マルクス主義の「立場」をついに獲得するに至る転倒した歴史として描き出される。二七回中委＝十七回大会はそのついにたどりついた「立場」の宣言の大会として「反帝反スタ・革命的學生運動の創成」の方針を確定した「画期的意義」をもつものとして、かれらの描きだした、学生共産主義者の頭脳の歴史のうちにその位置を確定する。今や「立場」は獲得された、あとはそれを「物質化」すればよい、そのために学生運動は、まさに理念の自己表出の媒介としての役割を割りあてられる。だが革マル派はよくない奴で、この「立場」を物質化する革命的任務にセクト主義的にしか対応しない（技術的にまずく、道徳的に許せない）。もっと大衆を大切に扱い、親切にかつ大担に接しなければうまくはゆかないのだ。「立場」の獲得につづいて、「技術」の習得とモラルの確立が大変大切であることを大管法闘争＝六二年十一月三〇日の統一行動の総括論争の中からかれらは確信した。（今井重雄「学生戦線における山本派（革マル派のこと）」との闘争にかんする覚え書」「共産主義者」八号、岡田新「学生戦線における思想的動揺と分解過程の革命の克服のために」同九号）。

こうして、ベトナム反戦闘争以後その論理を鮮明にする八中核派路線Vが登場するのだ。その過程の中には、もちろん彼らなりの苦悩も、痛みもこめられているだろう。奥浩平君は自ら生命を断ち、中することによって、そのうしろに、戦後史の総体からつきつけられている問題が姿をあらわすのだ。

六七年七月、秋山全学連委員長の招集した全学連大会をまえに『前進』紙は、中央学生組織委員会の機関論文「全学連大会の成功のために」を連続掲載した。再建大会期の文書のかわりに、これから若干の引用をして彼らの主張を再度確認しておこう。

『前進』第三四二号で六〇年の闘争に言及したかれらは次のように書いている。

「六〇年安保闘争をいま再びわれわれが問題とするのは、あの大闘争への思い出で自分をなぐさめるためではない。」（そうだろう、そうだろう。何しろあの「大闘争」の中の革共同などは、闘争の実践的指導とは無関係な「小集団」にすぎなかったのだから、「自分をなぐさめるため」の思い出などもあわせているはずもないのだ。）

「六〇年安保闘争は反スターリン主義革命的左翼の闘いの大衆的登場として巨大な意義をもっているのである。社共の指導を打ち破り、前衛の神話を地に落した安保闘争は、それ故（中略）共産主義運動の根本的転換の出発点をなしたのだ。」（根本的転換をとげたのは「理念」であって「現実」ではない。今日の彼らの、「現実」の、十年まえに比べた進歩ぶりがそれを示している。だがまあいいだろう。六〇年闘争は、スターリニズムから反スターリニズムへの「根本的転換」の出発点だったということが言いたいのだ。つまり、安保闘争の実践的指導とは無縁であったがゆえに、政治指導の責任を誰からも問われないですんだ革共同が、漁夫の利的に全学連の闘争の血の成果をさんだつするいやな時代がそこからはじまったという

ことだ。)

「この闘いを指導した共産主義者同盟は自ら創り出した運動の根本的性格をつかみえず崩壊していった。(中略)旧ブントはここに開始された共産主義運動の転換をそれ自身として思想的・理論的・政治的に徹底的に明らかにする必要があるたのである。ブントはそれをなしえなかった。全学連二七中委——十七回大会を出発点としてその闘いは革命的共産主義者同盟とマル学同によってなす遂げられて来たのである。」(美辞麗句で自己の汚辱の過去をおしかくすのはやめるがいい。六〇年安保闘争の「根本的性格をつかみえず」つかもうともしないで黒田哲学に身を売った者たちの手によって、全学連運動の解体と党派利害への従属の歴史は開始されたのだ。六〇年闘争を自らの血であがなった者は、かれらの自己欺瞞を決して許しはしないだろう。)

「『六〇年安保闘争は市民主義運動のピーク』という見解は旧共産主義者同盟の立場からも数百歩遅れた一市民の意識でしかない。」(何もわかっちゃいない革共同はそれ以下だということ。)

引用が——いやわれわれのハンジョウが——長くなって失礼したが、かくしてかれらの頭の中にある戦后学生運動史は、そして六〇年闘争のおかれてある歴史は、共産主義運動の歴史ですらなく、十七回大会でついに「反帝反スターリニズム・革命的マルクス主義」に到達するべくして到達した学生共産主義者の観念の歴史である。こうして歴史が書かれるのだ。人民の抵抗と解放の死闘が血と涙と呪いをこめて築いて来た歴史が、あるけっこうな「理念」にたどりつくべく予定されている砂のような歴史にこっそりとすりかえられるのだ。

だが何度でも強調しなければならぬ。

「思想的・理論的・政治的に徹底的に明らかにする必要があるた」のは、ピケ帽をいつもかむった $\wedge$ 哲学者 $\vee$ のもとへついでにころがりこむあわれな「学生共産主義者」たちの観念の転換などではない、ありえないことを。

われわれが今なお意識を集中しなければならぬように強制されているのは、六〇年闘争を極点とする戦後型反体制運動の歴史的な根拠と必然性の解明であり、そこから学生運動における共産主義者のヘゲモニーの構造を解析することによってはじめてそのイデオロギ—の歴史を現実過程の他の諸側面との関係のうちに定位し、生産的に問題として対象化できるのだ。そうすることによって、われわれの歴史は、たえず自らを未来へむかって開放することの歴史となるのだ。

だが、問題をその所在さえも察知することなく、革共同の神託へ自己保身を唯一の衝動としておのれを売りわたし、自己の過去史を清算した者たちの $\wedge$ 出発点 $\vee$ 十七回大会は、歴史が問いつめる問題を放棄し $\wedge$ 現実 $\vee$ と $\wedge$ 観念 $\vee$ の緊張関係を歴史のうちにとらえ・変革する視点に完全に眼をとじた組織官僚やその種々の分身たちの矮小なセレモニーとして「かちとられた」のである。眼をとじて $\wedge$ 永遠の今 $\vee$ なる意識のうちにはまぼろしの世界を築く道を忠実にたどれば革マル派へゆきつく。今日の革共同の指導部は、そのように忠実でありつづけるためには $\wedge$ 現実 $\vee$ に誠実であったのか、やや血の気が多かったのか、あるいは黒田哲学を本当は信じていないで、仮の宿として戦術的に位置づけていたのか、ともかくもその密室からおもてへとびだした。そしてそのとびだしたところは、「政治的」にはともかくとして「思想的」にも「理論的」にも十年まえと大し

て変ってはいなかったのである。「一九五六年のハンガリア革命から、早くも一〇年が過ぎた。この年、ささやかな出発を印した日本革命的共産主義運動は、一〇年の試練を経て、今新しい段階を迎えようとしている。」(「革共同第三回全国大会政治報告」『共産主義者』十六号七七頁)人も自分をも欺くようなされごとをたれるのはやめて、その「試練」や「段階」の内容を批判的に検討すべきときは来たのだ。

(4)

六〇年安保闘争を観念史上の転換点などと散文的に言って片づける彼等は、なぜに他方では「安保全学連の運動のあのみずみずしい人間主義とははしるような解放への情熱」だとか「革命的ロマンシチズム」などと、甘ったるい「思い出」を語らねばならなかったのか(六六年十一月十二月頃の『前進』の関連記事および再建全学連大会への中核派提案をみよ)。この「思い出」と、かの「観念史の転換」はどのように関係しているのか?そして今日の学園闘争が武装バリケードのうちに解きはなしたところの戦闘的学大衆の「みずみずしい人間主義と解放への情熱」や「革命的ロマンチズム」の激流は、なぜに革共同 $\parallel$ マル学同中核派のもとにはなく、ノンセクト・ラディカルによって代表されているのか。それに対して「ノンセクト・ラディカルにとどまることなく……」などと言いつつながら、まさにそのノンセクト・ラディカルの典型としてある日大闘争の隊列の中では、困難な状況にもかかわらず巨大な戦闘力をなお保持している全共闘の中で、なぜ中核派の活動家たちは、自己の任

務をかこいこみオルグへ矮小化しているのだ。

今日の激動が幕を切って落す少し以前に、われわれが自己の戦後を、そして六〇年を、深く批判的に検討することによって、革共同の放棄した問題へ稚ない、困難な接近をはじめたとき、岸本健一氏は、それを「安保闘争の清算主義的総括」だとして批判した。だが考えてみるがいい。安保闘争は、その指導部 $\parallel$ 旧ブントが左翼スターリニズムの母斑を身にまとったまま戦術極左を自己目的化し、反スターリン主義の革命的立場をついに自覚的に獲得しなかったから、革命的マルクス主義に武装された革命的プロレタリア党がなかったから、敗北したのだ。だから、革命的プロレタリア党創成のためには闘いに着手せよ、などという革共同全国委の $\wedge$ 総括 $\vee$ 以上に清算主義的なものなどあったらうか。

その総括「安保闘争」(六〇年・現代思潮社)の直接の執筆者であり編者だった武井 $\parallel$ 本多氏がこういうなら、それは一貫した態度にすぎないが、岸本 $\parallel$ 陶山氏や清水氏がこのような言葉を口にするとき、それは自らの闘った闘争の歴史を売りわたす行為なのであり二重の清算主義となるのだ。

さて、われわれは今ようやく沖繩への道をたどることができ。

われわれの沖繩は十年たっても何ひとつ進歩しなかった者たちの超えらるべき戦後の沖繩ではない。抑圧され迫害され、奪われ、戦渦の犠牲を日米帝国主義から強いられつづけてきた沖繩、その沖繩の人民にとってもしも解放があるとすれば、それは、日米帝国主義からの同時解放でしかありえない。われわれの本土の闘いがそうした闘争の一端を担うものとなるためには、革共同流の左翼的ヴェール

をつけた戦後の発想そのものをのりこえた地点に自己の原点をきざみつけなければならない。

「アメリカ帝国主義による沖縄県民への暴虐きわまる圧制と収奪とこれに対する沖縄県民の全人民的反撃は、それゆえヤルタ体制を基礎とするアメリカ帝国主義の戦後処理政策、すなわち軍事占領の継続、特殊な形態をもってする領土併合に対する闘争であるとともに、帝国主義戦争の耐えがたき犠牲性を沖縄県民に強制し今日になつてなお平然としている日本帝国主義（天皇の島・日の丸の島）に対して根底的に対決を迫るものとして把握されねばならない。」

## V アジアの革命と反革命（1）

（1）

ミッドウェー会談から発せられた米軍二万五千の南ベトナムからの撤退声明、それに追いうちをかけるように樹立を宣言する南ベトナム共和国臨時革命政府——帝国主義の戦後のアジア支配は今、ベトナムにおける無残な軍事的敗北・ベトナム解放革命の今やあきらかとなった勝利への新たな歴史の開幕へと大きく旋回しようとしている。南ベトナム開放革命の、この新たな勝利への前進の歴史の開始は、だが、われわれの反戦闘争に対しては何を告げているのか。

臨時革命政権の樹立は、今やベトナム人民が、「被抑圧民族」の暗い歴史に自らの手で終止符を打ちきざみつつあること、「被抑圧

（『沖縄奪還』二七―八頁）

本多氏のこの指摘が、「沖縄県民」などという言葉に端的に示されるその戦後運動論的枠の中の実力闘争版として墮落してゆかぬために、われわれは革共同の△確信Vにたいして△不信Vをつきつけ続けねばならぬ。その△不信Vが「幼稚な反発」にすぎぬかどうかは、読者の判定にまつ他はない。ただわれわれとしては、この△不信Vをつきつけることは、反帝統一戦線の強化と大衆闘争の革命的前進のために与えられた任務のひとつであることを「確信」しているのである。

人民」の立場を、血みどろの死闘を通してはっきりと超え出つつあることを意味する。今やベトナム人民は、すでに「被抑圧人民」の呼び名を返上しようとしているのだ。それは、ただ帝国主義者どもに対してのみならず、われわれにもまたむけられていることを知らねばならないのだ。ベトナム人民は言うだろう、われわれは今被抑圧人民ではなくなろうとしている、だから、われわれとの連帯は、「被抑圧民族の立場に立つ」ことによっては成立しないのだ、と。

臨時革命政権の成立は、「被抑圧民族の立場に立つ」ことをスローガンとして共通認識として成立し展開されてきたわが日本の反戦闘争に、革命的な脱皮を呼びかけているのだ。「反戦——反安保」闘争の延長戦上に七〇年を位置づけるのか、その闘争の革命的な再編のうちに七〇年を展望するのか、これが今、ベトナム解放革命の

七 内

現実によって、われわれのインタナショナルイズムにつきつけられている選択である。

「反戦闘争の革命的脱皮」とは何か？ それは、われわれがゆきつこうとする「沖縄」とどのように関係するのか、それは又、IIで展開した現在の闘争に対するわれわれの構造認識とどこで交叉するのか、そして今われわれが、二つの章を「アジア革命」にささぐとするのは、いかなる目的意識によるのか。

本論に入るに先だって、以上の諸点を簡単にあきらかにしておこう。われわれの議論の構造を説明して、読者の理解を円滑・正確ならしめるために（頭も心も良い人たちがばかりが本誌を読むのではないから）。

沖縄に対するわれわれの基本的な主張は、沖縄人民の米軍政支配からの解放を全力でかちとれ、そして沖縄人民を、決して再び日本帝国主義の支配下におくな、おこうとする一切の動きを粉碎せよ、という点にある。先述したところを再度くりかえせば「抑圧され迫害され、奪われ、戦渦の犠牲性を日米両帝国主義から強いられつつけて来た沖縄、その沖縄の人民にとってもしも解放があるとすれば、それは、日米両帝国主義からの同時解放でしかありえない。」

（本号二五頁）

「沖縄県民」などということばをつかい、返還論の左翼的亜種であることをすまそうと考えている者たちは、日本帝国主義の沖縄に対する抑圧の歴史を忘却している。四百年にわたる日本（＝島津）の支配の歴史を、そして、「沖縄県」が日本帝国主義の軍事力によって沖縄人民に強制された事実を忘れていた。今日の「分離支配」の終焉は、「沖縄県」の再開であり、それは沖縄人民にとっての解放

ではない——苦闘の中から沖縄人民がつかみ出しつつあるこの苦い、だが、確固たる真実に、今日の返還——奪還論は接近することが出来ない。しかもまさに日本帝国主義がアジアへの具体的な進出を開始しつつあるこのときに、それを忘れていたとしたら、それは単なる無知や鈍感をこえた犯罪的なことなのだ。これが今、本土における闘争の中で、復帰論が一片の正当性をもつことの出来ぬ根拠である。（なおのちにVIIでもっとくわしくわかりやすく展開する）

現地沖縄では、復帰論はその中にひとつの真理をひめている。それは、復帰論という誤った形式をとってあらわれている、現在の米軍政支配からの解放の要求である。われわれはこの要求をこそ支持し、連帯するだろう。そしてわれわれの闘争の前進はこの要求にふさわしい自己表現を生み出すことによって、△復帰Vなる今日の衣裳をぬぎすすんでいこう。だがそれは闘争の実践的遂行の中でのみ可能であり、それゆえわれわれは現地の闘争に於て、又、本土でのわれわれと現地の闘争との連帯に於て、復帰論のうちに戦闘性を強化しつつある現地人民と連帯し、行動の統一をすすめるだろう。だが本土に於ては話は別である。日帝の沖縄支配の過去史をいつわり、今日の日帝の沖縄再支配の野望に対して無防備を意識化しようとする「日本人＝ヤマトンチュ」などは、決してともに天を戴くわけにはいかないのだ。

さらに、日米両帝国主義からの同時解放の実践的方途は、新たな国際連帯の内容に支えられなければならないと考える。今日の第三世界の、就中ベトナムの革命と連帯することの中にはじめて沖縄解放の実践的展望はある。その連帯が、まさに、今日の反戦——反安保闘争の延長線を超えたものとしてはじめて実現できると考えるがゆ

えに、われわれは、革マル派やその他もろの小ブルジョア的党派の「解放」論の一国主義的内容からきびしく自己を区別し、そうした傾向と深刻に闘わねばならない。

この国際連帯が単にわれわれの主観的願望にすぎないものであれば、われわれの一国主義からの袂別も又願望にとどまるだろう。しかし、われわれは、ベトナムを前衛的表現とする今日の後進国人民の解放闘争は、民族自決権闘争として完結しうる条件を与えられていないこと、それはその世界性と永続性を不可決の前提として成立し発展していると考ええる。それは、勝手な読みこみでも、ゲバラ・ブームのせいでもない。かつての民族自決権闘争のように自己完結する条件がないのは、ベトナムやキューバの革命家たちの恣意によるのではなく、戦後の帝国主義支配の歴史が今日もたらしめている客観的過程の結果である。その内容はのちに展開するが、ここでは戦後期のそれとはちがった世界認識が前提となっており、だからこわれわれは「第三世界V」という言葉を、ひとつの歴史的運動概念として正確に駆使することが出来るのである。

われわれは第三世界の革命的前進に対して、同盟七回大会で、「民族開放」社会主義革命の位置規定を確立した。その地平はしかし、同盟内の一国主義的経済決定論的傾向との思想闘争を通じて切り開かれたのであり、かかる闘争は、今後もおお、続くであろう。現代革命の世界性と永続性の内容は、不断に再生産される一国主義の諸傾向に対する、われわれの革命的国際主義の立脚点の理論的深化と物質化に基づく思想的・理論的・政治的闘争を通じて豊富化され強化されるほかはない。現代革命の国際性と永続性に対する、従って又第三世界に対する革共同両派の無知・無理解は、ついでだか

## 八外

七〇年安保が、形式において六〇年安保が自動延長であろうがなからうが、それは現代政治の論理の運動においては、日米安保からアジア安保への旋回でしかありえない。帝国主義の反革命同盟の再編内容が、アジア安保であり、かかる反革命の旋回と再編の過程において、日本帝国主義の帝国主義的侵略の政治的・経済的・軍事的行動は、本格的に具体化する。日帝の対海侵略の結果する国内抑圧からのみ大衆の革命化を展望しようとするのは経済決定論であるばかりか、プロレタリア革命の政治性格に対する思考停止である。日帝の政治動向（対外・対内）と、そのもたらす社会的再編とに対する闘争の二重性の必然性とその統一をあきらかにすること、革命的国際主義が交叉するのはこの点でなのだ。「ベトナム反戦闘争の革命的脱皮」の意味はまさしくこの点にかかわるものとして提起されなければならない。

ベトナム反戦闘争は、ベトナムにおけるアメリカ帝国主義軍隊の反革命に反対し、それに加担している日本帝国主義に对立する、その意味で政治闘争として成立し展開された。しかしその今日にまで至る激烈な展開の動力は、ただその政治的自己意識だけによって与えられてきたのではない。その政治的闘争が、日帝の全社会的秩序の帝国主義的再編過程の下に抑圧を強化されつづけて来た人民の、反・再編闘争を呼びおこし、それとの呼応関係をつくりだすことによつて、反戦闘争の起動力は増巾され永続化される条件を獲得したのだ。今日の反政府・反権力闘争は、こうして、政治闘争と社会闘争の二重の構造を持ち、その二重性を直観のうちに統一している。そうした直観的統一は、同時にその反権力性の直観的性格をもたらす。言いかえればそこの権力は、なお、抽象性の次元で、A悪V

ら言っておくが、反帝反スタ論の世界認識——世界プロレタリアーに對する帝国主義とスターリニストの分割支配——の帰結である「代理戦争論」によつて、反動的に固定化されているのである。

六二年・六三年のキューバ海上封鎖に對して、カストロがスターリニストであるからという理由で、「革命キューバ防衛」のスローガンにそっぽをむいた革共同は、ベトナム革命に對しても又、帝国主義とスターリニストの代理戦争であつて革命闘争ではない、と主張し続けた。「前進」派は六五年以後プラグマチズムに立脚してベトナム反戦闘争へのりうつつだが、彼らの反スターリニズムは、代理戦争観を温存しているのであり、今日の彼らの反戦闘争論の次元（即ち戦後の次元）ではともかく、それをこえて、現代のプロレタリア国際主義の内容として第三世界を把握することは、まさにこの温存されている代理戦争観に底触するのである。（従つて、今日のわれわれの革命的国際主義は、革共同との論争に際しては、反帝反スタ綱領そのもの、まさにかのマルクス主義の心髄との論争を通して表現され貫徹されなければならないのだが、それは又別稿にゆずろう。本稿での論争対象は直接には中核派であり、中核派が中核派たりうる特徴点に、ここでのわれわれの議論は限定しておく。革マル派と共通する問題はむしろ革マル派を論争対象にすえたところで展開した方が、不純な要素をかかえこまないですむだけサッパリするだろう）。

さて、われわれの認識と意図をまとめて言えば、七〇年代階級闘争とはアジア全域の革命化の中でのものであり、アジア全域の革命化の基軸が沖繩である。そして、日本プロレタリア革命の実践的展望は、ただ、このアジア全域の革命の中のみ展望されるのだ。

なるものの抽象体として認知されるにとどまっている。

われわれがくりかえし問題にしているのは、この二重構造の直観的統一の歴史的必然性を見抜くことによつて、その直観性を意識的な統一へ不断に再編すること、そのことによつて、不断に発生する小ブル自己権力論の《神話》を現実の政治過程に直面させ、それを批判し克服すること、そこにこそ、現在政治指導の質があらためて深刻に問われなければならない本質的な問題があること、であった。十・八羽田以後の歴史をきりひらいて来たものが実力闘争であると言ふのは、その実力闘争が、かかる政治的・社会的闘争の拡大と永続の象徴であるという意味で正しい。しかし、ここから問題を戦術に限定し、政治指導の問題の全面的な提起をおこしたときに、指導の側の自然発生性がうまれるのだ（われわれの軍事——戦術問題に関する見解は、原則点については、本稿の最後で、又方針としては、次の論文で、そして具体的には内部文書によつてあきらかにする。ここで問題にしているのは、軍事問題が重要かどうかということではない。われわれを右翼日和見主義的傾向だと言へば批判は終つたと考えている諸君たちよりも、われわれの方が軍事——戦術問題はたぶん真剣に考えているだろう。ここで問題としているのは、今われわれに問われている政治指導の内容の全体構造と、その中心点のことである）。

反戦闘争の政治的側面がベトナムと結ぶ関係は、全アジアの解放革命と、その中で沖繩の解放闘争の政治戦略の中に、はじめて、反・反革命の一般性をこえて、ベトナムの革命を、同時にわが日本での革命を問題としてひきうけることが出来、それによつてはじめてその直観的位相を超えることができるし、社会的諸闘争も又、こ



うした現実の政治過程の中で自己の位置を鮮明にしてゆく政治的環を運動論の中にくみこむことによって、その持つ普遍性の、直観的な、自然成長的な、抽象的な水準を超えることが出来るのである。われわれが昨年の兵器生産・輸送阻止闘争や基地闘争に与えてきた評価と位置規定は、かかる認識を文えにするものであり、又、今日の学園闘争に与えている評価も同じである。社会的拠点の闘争を、政治闘争のためのプールとみなし、それを政治闘争へ上昇させてゆくことが前進だという考え方は、革共同全国委員会に典型的にあらわれる（わが同盟にもこの革共の主張はくりかえし登場する）が、われわれがそれに同意しないのは、政治的闘争を単純に上位におくという点でそれは現在の闘争の段階の構造に無知であり、従って又、すぐれて今日の状況が与えている政治指導上の問題に答えられないがゆえに、レーニンの口まねをしたり引用をしたりすることは出来ても、政治指導における目的意識性の今日問われている内容を何ら提起出来ず、アジテーションをそれに代位することによって、まさにレーニンの批判の対象であったところの、指導における自然成長論へ転落するほかないからだ。こうした傾向に対しては、ただ、情況認識の正しさだけがよく闘いうるのであって、論理的整合性などがそれ自体としてふりまわされても、何ら対決にはならない。今日の革マル派の、右翼的性格をみよ、革マル派の論理性に対して、革共同その他の左翼革命主義者もしたえられぬとしても、革マル派よりは、革命主義者たちの方がはるかに正しく、はるかに戦闘的で、はるかに同志として扱うに値する。革マル派の論理性は、世界をそのうちにふくみえず世界を疎外してのみ成立しうるからだと。それに対して、われわれの革命的インタナショナルイズムは、現代に

(2)

対する根源的な世界認識として未来へ自己を開放している。それは、今日の反体制運動の二重的構造を、意識的（対自的）に再編するための、われわれの立脚点である。それゆえにこそ、今日、インタナショナルイズムは、それを一般的な決意や願望やアジテーションの水準におとしめる者たちと、現代を新たな歴史規定と世界認識のうちに、その総体においてとらえようとするわれわれとの間の熾烈な論争基軸となる。

労働者国家軍の国境をいかに軍事基地網をはりめぐらしたアメリカ帝国主義は、後進諸国では、その軍事体制の中で、買弁ブルジョアジーと軍閥の再編の上にカイライ政権をおしたて、イギリス・フランス・日本に替って、アジアの戦後に君臨して来た。それは、第二次大戦に至る歴史過程が、帝国主義諸烈強による植民地のまさしく分割支配としてあったのに対し、それが少なくとも政治的構造のうえでは、アメリカによる単独統轄へ移行したことを意味する。（これは政治的水準のことである。政治がすべてだと思っている人々によってこれが主張されれば、客観的にそこから出てくるのはいうまでもなく超帝国主義の亜種でしかありえない。例えば革共同）。

あるひとはいかもしれない。第二次大戦後の歴史は民族解放闘争の未曾有の勝利の歴史であった、と。岡倉吉志郎・具島兼三郎ら「新植民地主義」論者たちの史観への根源的批判は、戦後期の後進国解放闘争の前進と挫折と、反革命の前進、そして今日の第三世界の闘争の出現　かかる歴史過程を、イデオロギーの歴史のうちに

八内

とらえかえずことからはじめられるのでなければ意味がない。

新植民地主義論者が、あるいは平和共存論者が言うように、戦後の世界史は、かつてない規模で民族解放闘争の連続的な進行を呼びおこした。第一次帝国主義世界戦争の最大の遺産がロシアの革命であったとすれば、第二次世界戦争の産物は、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの旧植民地における民族自決権の闘争であり、そして革命中国である。戦争による旧宗主国群の疲弊、タガのゆるんだ帝国主義的世界支配の亀裂の中から、長い暗黒の歴史をつき破るよう後進国人民は歴史の舞台へ登場した。アジアでアフリカでラテンアメリカで、植民地人民は英雄的に闘い、カイライ政権にかわる自治政権を、いくつかの諸国では樹立した。帝国主義の戦前型支配は何よりも政治的な側面で大巾な転換にせまられた。そしてこの転換を司る任務は唯一アメリカ帝国主義のみがよくひきうけるものであった。旧カイライ政権に代るカイライをおしたたところには、軍事的国家の建設をすすめる一方、民族政権の成立した諸国に対しては、いわゆる援助政策としてのドルの散布が旋行される。そこでのアメリカ帝国主義の政治路線は、一帝国主義アメリカのものでありながら、帝国主義総体の政治意志にもとづくものであり、まさに世界の「盟主」としてのものである。政治的には、それは、労働者国家群に対立する世界帝国主義のイニシアの確保のためのものであり、経済的には、世界市場の再編統一のための諸政策の一環をなす。

バンドン条約・平和五原則・そしてネール、周恩来・スカルノ・ナセルの名によって代表され象徴される「第三勢力」は、民族自決の旗を掲げ、政治路線は反帝独立・経済路線は「援助」のもとので自立更生、そして国民経済の構造としては国家資本主義の道歩ん

だ（むろん中国をこのような意味でくくることは正確ではない。しかしここで中国をかぞえたのは、政治レベルで同一だからではない。のちのべるように、その経済構造上の共通性をとらえることがひつようである）。

だが、「民族社会主義」と総称された、民族ブルジョアジーと社会主義者および農民の同盟は、後進国解放闘争の勝利をもたらしたであろうか。民族社会主義が描きあげたバラ色の未来は、政治的・経済的な独立と繁栄ではなく、貧困と汚職とクーデターの時代であった。五〇年代後半以後、後進国の歴史は、革命の歴史から反革命の歴史へと移行する。コンゴにおけるルムンバの虐殺、南朝鮮革命の敗北と朴政権の生誕、南アメリカ大陸における連続的クーデター、そしてインドネシアの九・三〇。

言うまでもなく、後進国におけるかかる反革命の歴史の開始は、戦後の世界支配を形成する帝国主義の運動が、あらためて後進国問題に解決をせまられたことにもとづいており、それは、政治的恣意のものだいでではなく、帝国主義と世界市場の経済過程から帰結されている。それは、五七年下期からアメリカではじまり、五八年ヨーロッパをとらえた景気後退（いわゆる「中間恐慌論争」の対象）が示している。この景気後退は、アメリカにおける景気循環が全世界のそれを主導するという意味で統一性をそなえた最後の景気後退であった。それまでは対外ドル債務の累積にもかかわらず大きく減少することのなかったアメリカの金準備は、これ以後、年々大幅な減少過程をたどることになる。それは、他の帝国主義諸国が、戦後期の設備投資からようやく一循をとげて、独自の運動転回を開始したことによって、又、それゆえにこそ後進国の問題が、アメリカの政

治＝軍事的単独統轄とその結果としての経済支配の圧倒性の時期を  
をこえて、あらためて問題の焦点として抬頭せざるをえないとい  
点において、この五八年以降こそが、真に現代資本主義の名に値す  
る歴史時代といわれなければならないこと、換言すれば、世界構造の  
再編が、帝国主義間競争を軸として本格的に開始されるのが五八年  
からであることを意味する。後進国にとっては、それが、反革命の  
時代として訪れるのだ。

その反革命に抗して、アルジェリア・キューバ・ベトナムでの革  
命が勝利の歴史をきりひらいて来たとするれば、それはかつての「第  
三勢力」論の延長線上ではなく、まさにその必然的な挫折と敗北  
の超克のうえに、かつ、第三勢力論時代の「味方」＝「社会主義世  
界体制」が、同盟者と呼ぶにはあまりにも革命の先端からかけはな  
れたしまっていることを苦々しく認識しつつ、自己解放と世界の解  
放を結ぶあらたな精神によつてはじめて勝利の言葉を現代史の時系  
列に刻みこんで来たのだ。その精神は、北米大陸の黒人叛乱に結び  
つき、第三世界Vとして自己を規定した。

東西の平和共存の谷間に咲いた「第三勢力」のバラ色の世界が終  
ったところから、東西をひとしく不信と敵意をもってねめつつつ、  
荒々しく第三世界は姿をあらわしている。

帝国主義の現段階における反革命と、それを血闘の中に打ちのめ  
し、勝利をきりひらく、第三世界Vの革命との激突こそまぎれも  
なくベトナムである。ベトナム解放革命の血しぶきと雄叫びこそ、  
帝国主義諸国の人民にその強制された平和の中の出口のない抑圧へ  
の反逆と覚悟を呼びおこし、今日の世界的な社会叛乱を、帝国主義  
権力支配の底部から噴出させているのだ。

九 外

日本社会主義共和国臨時革命政府樹立への展望の中に超え出なけ  
ればならないのである。

ベトナムの革命は帝国主義の反革命を軍事的に粉砕し、世界革命  
の前衛的位置をますます強固にうちかためつつある。しかしわれわ  
れは又、七〇年をひかえた今、アジアはなおベトナムのみを突出さ  
せている冷酷な事実を目をすえなければならぬ。ベトナムの革命  
はなお孤立している。革命が連帯しうるものは、ただ革命だけだ。  
しかし今、ベトナム以外にアジアのどこに革命があるか？

われわれはもう一度くりかえす。七〇年は沖繩をふくんで、日本  
帝国主義をアジアの政治過程の中に否応なしにひきずりこむだろう。  
そこに、日米安保はアジア安保＝アジア反革命同盟へ旋回するほか  
はないし、現にその方向はあきらかとなりつつある。それゆえに、  
われわれの階級闘争の深化と激昂は、ただ、全アジアの革命展望と  
の結合の中のみある。そして沖繩こそその現在の焦点であり、だ  
からこそ沖繩問題は、七〇年闘争の決定的 軸をなすのだ。日本革  
命は、ただアジア革命のみ、その現実的展望を持つ。一國主義的  
諸傾向との断つたる闘争は、この展望を、現実的たらしめるための  
不可避の闘争である。

新左翼の中から「アジア革命」という言葉が出て来たのは、われ  
われがはじめてではない。かつて旧れいめい派は、「日本革命をア  
ジア革命と世界革命の突破口とせよ」と言った。そして今日、第  
四インター系の諸君は『世界革命(W・R)』紙上で「極東アジア  
革命」を叫んでいる。だが、旧れいめい派のアジア革命は第一にそ  
もそもベトナム革命の現実と最初から切断されている点で、第二に、

だからこそ今、われわれは、これまでの反戦闘争の延長上に七〇  
年を考える者たちから袂を別って、われわれの革命的インタナシヨ  
ナリズムの物質化を、あらゆる困難に耐えて追求しつづけねばなら  
ぬように強制されている。

ベトナム革命なしにわれわれの「羽田」はあったか？ 第三世界  
の雄叫びなくしてバリの「五月」はあったか？ そして、そこにあ  
らわれる帝国主義的な全世界の再編と無縁のものとしてチェコ叛乱  
はありえたのか？

ベトナムの革命的人民は、今、臨時革命政府の樹立を宣言するこ  
とによって、全世界のプロレタリアート、人民に、叛乱を、革命を、  
さらに強く呼びかけている。国際連帯が自国帝国主義打倒とどのよ  
うに世界性において結合するのか。自国帝国主義打倒なくしては国  
際連帯はありえない、という主張の正しさは、あまりにも抽象的に  
すぎるといわなければならない。自国帝国主義打倒にもいろいろあ  
る。そのいかにかわらわらず、その彼岸に国際連帯を考える者たち  
は、旧れいめい派の道を、一國主義の道をもう一度たどることにか  
ならずなるのだ。自国帝国主義打倒の一國主義的措置、その算術的  
総和への「世界革命」の転落、そうした諸傾向はくりかえし登場す  
る。かかる傾向との原則的闘争の論理をあまりにすることなしに  
は、七〇年闘争は七〇年代闘争となることは出来ない。だからこそ、  
われわれは、われわれにとつてのベトナムとは何かを、繰りかえし  
問いつづけるひつようがあるのだ。換言すれば反・反革命闘争＝反  
戦闘争を、われらの革命闘争へ、すなわち、日帝打倒・日本革命・

それは一國主義的「日本革命」の延長概念にすぎないという点で、  
すでに展開したわれわれの批判の射程距離内におさめられている。

第四インター派の「極東アジア革命」は、一方にベトナムを、他方  
に沖繩をふくもうとしている点で若干近いようにみえるが、かっ  
てのトロツキーの中国革命論がそうであったように、先進国革命を  
上位概念として先験的に測定したうえに成立しているという意味で  
西欧革命論であり、戦後の革命論の枠内にある。それがかれらによ  
って、昔日のように厳密に展開されていないのは、ただ今日の自称  
トロツキー主義者たちが昔ほどには正統トロツキズムを信じていな  
いだけのことであって、かれらの思想や理論や政治が混乱している  
結果にすぎないのだ。

われわれが今「アジア革命」を、われわれの実践的方向として提  
起するのは、情況に追従することしか知らぬ後衛集団を闘争の実践  
的展開の中に超え出るためであり、同時に理論的には、なおれんめん  
として存続する一國主義・先進国革命主義の思想系符を根底から超  
え、戦後の革命論の構造を全面的に過去のものとすることを意図し、  
展望しているからである。革命的理論なしに革命の実践はありえな  
い。

およそ戦後の日本共産主義運動は、ただ一度でも民族解放闘争の  
革命論上の位置を、市民的進歩派やその同伴者どもの同情論から区  
別された地点で厳密に考え抜いたことがあるだろうか。

日本の共産主義者が、日本の革命をアジア革命の展望の中に真剣  
に考えつめた歴史は戦後にはない。それは、ただ、戦争直前から戦  
中に至る短い期間の中に、うもれるように存在しているだけである。  
天皇制ファシズムの支配は、戦前・戦中の共産主義運動をただ暴力

的に圧殺しただけではない。その思想を解体し、自己のうちに再編することを通してすぐれた共産主義者を転向に追いやったのだ。そして、尾崎秀実が示したように先駆的な思想は、戦後民主主義の微温湯にひたっていた戦後の共産主義運動からは、かえりみられようともしなかった。

われわれは今、アジア革命をわれわれの実践的・理論的任務として設定することによって、あるいは死刑台の露と消え、あるいは獄中で病に倒れ、あるいは大東亜共栄圏構想の合理・非合理の両面にわたる重圧に思想的に死んだ日本共産主義の、うずもれた遺産を復権しようと考えている。「支那には四億の民がいる」(「馬族の歌」)。この言葉のまにに思想として死んだ日本共産主義の過去史は、そのうちにふくんだアジア革命の幻影を呼びさまし、われわれの今日の階級闘争の中で実践的に検討することによってはじめてひきうけ、それを超越することが出来る。それは戦後の革命論の超克をも同時に意味するだろう。われわれが上りつめつつある地平は、国際主義が上れば民族性が下り、民族性が上ると国際性が下におちる戦後の地平ではなく、まさに、革命の民族性と国際性が火花を散らして互いにその核芯をあばき出し、ブルジョア世界主義||コスモポリタニズムとはっきり区別されるプロレタリア・インタナショナルイズムの地点をてらし出すところの地平なのだ。「ナショナルイズムはわれわれの問題であり、われわれの革命の問題である。」(本号五頁)と書いておいたのは、こうした意味である。ここでは、国際性は、政治権力||政治的国家の二元的構造の水準をこえて、「民族」を媒介として、政治過程と社会工程の二重の構造において姿をあらわす。

九内

フアンズムの問題は、単に支配者の攻撃という対象的領域に彼岸化されることをやめて、われわれの主体的な問題としてうけとめることが可能となるだろう。これらはすべて、「思想主義」的興味の問題ではなく、われわれの七〇年闘争と七〇年代階級闘争へむかう実践的営為のうちに位置づけられ、提起されている。これを理解する

## VI アジアの革命と反革命 (2)

(1)

再びベトナムに戻ろう。

ベトナム解放革命こそ、世界革命の新たな過程の最初の衝撃であり、そしてその過程の進行の中でなお最前衛の位置を占めている。それは、帝国主義の植民地抑圧に対する民族解放闘争という古典的な植民地革命の図式を完全にのりこえた革命戦争である。すなわち帝国主義世界体制そのものの発展||腐朽がもたらした帝国主義的世界秩序の危機を客観的根拠とし、それにもとづく彼我の主体的条件の変化、すなわち帝国主義の世界支配の戦略的転換として対応する第三世界の革命戦略の課題を、実践的に実現する新しい質の後進国革命である。その物質的条件をなす帝国主義の危機が全世界的なものであることは、直観的にはすべての革命的左翼によって承認されている。しかし、ベトナム革命の世界的性格とそのインターナショナルな質そのものは、決して正確にとらえられてはいないのだ。

戦後型コスモポリタニズムのフィルタを通過したわれわれの中の伝統的なコミンテルン・マルクス主義は、この問題を問題として設定するさえ出来ない。だが、コミンテルンの歴史そのものは、少なくともこの問題をとらえることはたしかにとらえていたのだ。

満鉄の調査部に属しつつ、同時にコミンテルン極東ビューローのメンバーであった鈴江言一(王枢之)の中国革命に対する分析は、そうしたすぐれた成果のいくつかをふくんでいる。しかし、鈴江言一が中国革命||アジア革命の展望のうちに日本の革命を考えることが出来たのは、彼に、他方で、日本の中に底流として流れていたアジア主義との交流があったからであることはほぼ確実であろう。『中国解放闘争史』(石崎書店刊)にみられる中国社会の分析は、満洲建国のイデオログ・橋の支那研究の諸成果なしにありえなかったことは、その術語その他から推しても、又、両者の満鉄との関係からしても、かなりの正確さで推察することが出来る。そして今日われわれは、日本型アジア主義と日本共産主義の、みじかく不幸な交流の歴史を、現代のわれわれの革命実践の中に検討することによって、政治革命のもっともラディカルな追求が、フアンズムへゆきついでしまった革命家・北一輝ら、日本のあらゆる革命主義の伝統をわれわれのうちにとらえこむことを追求する。

△アジア革命Vを語るとき、ナショナルイズムは、コスモポリタニズムとインタナショナルイズムの分水嶺をなすものとして、われわれ自身の政治的・理論的決着を与えるべき重い意味をもつものとして存在する。アジアの革命へ近づくために、政治理論の前進の営為は日本型アジア主義と日本共産主義の、みじかく不幸な交流の歴史をふりかえることを不可避として要求される。それによって又、日本

ことの出来ぬ者たちは、あれこれの中傷を他に投げ与えることでその無知を隠蔽することをやめて、自己の世界のせまきに思いを至すべきであろう。「革命的理論なくして革命の実践はありえない。」原則は今も、なお、きびしく貫徹されるほかはないのだ。

だからこそ、「反戦・反安保」の延長線上に七〇年代闘争を望しようとする、中核派から構改諸派に至る自然成長論が登場するのである。

前号巻頭論文でわれわれはベトナム革命に関連して次のように述べた。

「われわれは今ベトナム人民の反帝||解放闘争の客観的にはたしている役割について二つの意味を考える。その第一は政治上、戦後世界構造の打倒の先端にあることである。戦後世界構造(MFイーヤルタ体制||平和共存秩序)の一角を血しぶきをあげて突破しながら、世界総体の打倒の過渡的ではあれ前衛的任務をはたしているということだ。それ故にまたわれわれは自己の立場を単なる「ベトナム人民支援」というものにおしとどめない。戦後世界構造(平和共存秩序)の有力なる一環を形成している日本帝国主義の打倒によって連帯をはたすだろう。(注)だから一国主義と国際主義との分れ嶺は戦後世界構造のなりたちの認識とその打倒闘争の同質性をどこまで獲得しているかにある。例えばベトナム人

民の政治的解放闘争が含まれているナショナルにしてインターナショナルな質がわれわれにとってどのようなものを確定し抜くことである。(われわれがベトナム人民が解放闘争のなかに展開している歴史の意味として把握している第二のものはその社会的解放の前衛的性格である。周知のように土地解放として遂行されている社会的解放—社会革命のことをいっているのである。)(注)われわれはベトナムだけでこれが可能であると、そこでのみ達成されるとはいっていない。(われわれがここに着目するのはここで展開されている土地(農村)をめぐるベトナムをはじめとする自然の関係を提起していると考えからだ。農村(自然)の解体がほぼ完了しつつある高度な資本主義諸国での社会革命、あるいは人間の社会解放を想定しようとするれば、資本制的生産様式を否定的媒介にするというのは前提として、どのようなものをわれわれに迫るからだ。土地(自然)をめぐるベトナムをはじめとする第三世界の社会的解放と資本主義諸国での社会的解放と労働者国家でのその本質的同一性とその特殊性を把握しない限り、戦後世界構造の打倒と世界革命を実践的に、生きた闘いとしては提起できないのだ。ベトナム人民の反帝—解放闘争は政治的—社会的解放を特殊な過程を媒介として普遍化へ向うことで達成しようとしている。戦後の世界構造の政治的—社会的秩序の一還にありながら、その一還を突き崩すことによって、総体の打倒を果そうとしている。ベトナム人民や第三世界の戦士達が世界構造の中で不可避におかれる特殊な位置の突破による総体の打倒へ向う普遍性にみちたたたかいを展開していること、この『こころ』、『血』がわれわれにたたかひを呼びかけるのだ。)(創刊号二—三頁)

十  
外

てそれとの関係で、軍隊の社会的性格の問題である。

第二次大戦に至るまで、旧植地は、原料供給地であり同時に商品輸出の対象(商品市場)の一部であった。それはそのような意味でたしかに世界市場の一部をなしたが、しかしそこにおける生産関係、生産手段と労働力の結合関係は、それらの地域が資本主義によって侵略をうける以前から當んできた共同体的なものが温存されていた。その政治支配も又、もともとの支配階級、すなわち大土地所有者と地方軍閥の上に構成された専制的権力を、カイライとして位置づけ直したにすぎない。帝国主義期に入って市場分割の最終的な終了と再分割の時代が訪れ、近代の軍隊が植民地に投入されたものの、それは、あくまで本国の軍隊であって、植民地の生産関係に直接介入する性格を持っていなかった。かつて資本主義の侵略と暴力がまだ訪れなかった時代の牧歌的共同社会が、資本の暴力の下、牢獄の共同隊に移行したとしても、価値生産を担う労働力が土地—自然と直接に結合していた事情そのものは基本的に変化してはいなかった。産業資本主義から帝国主義への移行、金融寡頭制の成立が、過剰資本の植民地への輸出を必然化させ、旧来の商品輸出市場としての性格を変化させはじめたけれども、この事情は基本的に変わることはなかったのである。牧歌的共同体に代る牢獄の共同体、それは、プランテーションによって典型的に示される。そして、レーニンが『民族自決権』でのべたような、古典的な民族解放闘争の必然性、かかる関係の中に基本的な条件をもつものであった。

第二次世界大戦は、前章でのべたように、植民地支配をめぐる条件と構造を激変させた。後進国支配の問題は、まず政治的—軍事的にアメリカ帝国主義の戦争担当能力と、それを支えるアメリカ資本

抽象的な正しさと鋭さ、同時に又今日、その限界もあきらかだ。われわれはこの立場に立ちこれをこえてゆかなければならない。

(2)

ベトナム解放革命が世界の変革を告知しているとすれば、それは、その政治的特殊性をこえた社会解放の実践的進行の普遍性の中にある。そして又、帝国主義の側もそれらにみあう型での戦略をたて、そのうえにかれらのポスト・ベトナムが展望されている。われわれはまさにかかる帝国主義に対して、政治過程の上層から社会的基底にまで至る全戦線をうちきたえ、統一し、打倒を、革命を展望する。そして今この全側面にわたる政治指導の全面的な要求に應える任務から逃亡する者だけが、問題を、軍事(否、単なる戦術)の領域に限定してすましていられるのだ。軍事だけに限らない。あれこれの部分に自己の任務を限定し、そのあまきによって自らをせまめること、それが今日、問題になる政治指導の放棄であり、自らかかろうことの出発点他側面に対する自然成長論を生む。

ここでの問題は、植民地革命の現段階をあきらかにすることであった。そこへもどろう。

第二次世界大戦に至るまでと今日とは、帝国主義の後進国政策は、政治—経済の総体にわたって転換している。その転換の基本軸は、土地であり、一次産品生産であり、農業問題である。換言すれば、資本主義が本源的蓄積期において遂行した、共同体の温存と解体の問題であり、非資本主義領域の支配の論理の問題である。そし

主義の圧倒的な金準備を基盤とする資本力によって解決されなければならなかった。敗戦帝国主義国、西独・日本・イタリアは植民地を失い、老帝国イギリス、高利貸帝国フランスも、その植民地支配力を決定的に弱めた(イギリスは、金融的条件その他からして特殊な条件をもっているが、ここではそこに立ち入ることはできない)。

かかる帝国主義にとって、市場の統一性の回復と、蓄積機構の再建とが、これはいずれもドルによって、換言すればアメリカの金保有によって達成された。かつての必要物—植民地を喪失した西独・日本の高度蓄積条件は、さらに技術革新に代表される。技術革新は、蓄積機構の高度化を達成させただけでなく、それによって一次産品の代替品が多量に豊富に生産されたがゆえに、原料供給地としての植民地の比重を、レーニンの時代から比べて決定的に減少させるものである。そして、かかる高度資本蓄積のうえに帝国主義は世界の中心を再び占め、世界市場をまがりなりに再遍し、労働者国家群をもてのうちにふくみつつ、それとの平和共存秩序を形成して来た。

しかし、歴史の原則は貫徹する。「歴史の女神クレイオは、叔女たちの平和協会の会員であったことは一度もなかった。」(トロツキー)平和と戦争は、いつでも不幸なシャムの双生児のように背中

あわせに結ばれている。平和共存秩序は、軍事網の対立の秩序であり、帝国主義の平和共存路線は、米軍を主軸とする世界的軍事網を不可決の構成条件としてきた。後進国にあつたかつての軍隊は、そこにおける専制的治安権力としては、土着の軍閥で充分ことたりたし、帝国主義間の市場分割戦の担当は、本国の軍隊が、軍事緊張の高まった時に動員されればよかった。近代の装備をもつ軍隊が、後進国に常備的に配置される場合は、戦後のものである。たとえはあら

ゆる種類の軍事同盟や、又、後進国における軍事基地の存在様式をみれば、戦前との差異は一目瞭然であろう。

まさに平和共存と表裏をなす、対労働者国家包囲の軍事網体制、そのもとに組織される近代的軍隊こそ、後進国の社会関係を全面的に変化させる要因として機能したのだ。その近代的軍隊はあくまでも近代的軍隊であって、私的軍団ではない。軍閥と呼ばれる私的軍団の解体・再編を通して、常備的近代軍事部隊は形成されたのである。ベトナムの場合でいえば、バオダイからゴ・ジンジェムを経て、グエン・カオ・キへの政権移行が、こうした軍隊の再編過程を純粋に表現する。中国革命の場合でいえば、袁世凱が前者を、それこそ純粋な東洋的軍閥として代表し、又後者は、蔣介石によって代表される。これは経済的には（社会的には）どのように作用するの

か。

戦後の民族自決論——第三勢力論の前提は民族ブルジョアジーが産業ブルジョアジーとして成長することであった。それがためにこそ経済上の自立が基本スローガンでなければならなかった。第三勢力論は民族自決論の論理的前提は、換言すれば国民経済のブルジョアの自立可能性である。

さて、戦後資本主義の蓄積機構編成上の決定的要因としての技術革新は、前にのべたように、原料供給国としての植民地の比重を決定的に減少させた。一次産品を基礎的生産物とする後進国にとっては、これはただちに、その一次産品の売却条件に価値の実現条件の減少である。民族ブルジョアジーの成長条件が減少し、国民経済の自立性の条件が減少したことである。それは、後進国には、資本のかわりに、飢餓と貧困が蓄積される結果となつてあらわれる。その

開発構想が、帝国主義の後進国支配の今日を代表する。ニクソン政権といえども、これをひきづく以外に自己の展望はありえない。それこそが、パリ和平会談の客観的条件である。

南ベトナム解放民族戦線は、この帝国主義支配の論理を、南ベトナムの社会的現実を通して確として認知し、そのうえに戦略を確定している。解放戦線の「民族」的な姿をもつ新綱領が、かつての民族革命論から決定的に区別されるのもこの点である。それは、かつてのように、大土地所有階級からの土地の収奪を、小作農への土地分配と自作農の「健全」の育成などの展望のうちにはない。解放戦線も又軍隊であり、軍隊として自己を組織し、労働力を農村に土地からひきはなすことによって自らを形成し、勝利してきた。かつての共同体の再生やそれへの回帰ではなく、共同体の積極的な解体の方向へ、その「民族」の旗はかけられているのだ。そして、旧共同体の解体を通して形成される労働力の社会的編成と政治的団結とは、それこそ「ソビエト」でなくて何であらう。

かつての中国革命においても、たしかに「ソビエト」は、スローガンにとどまらず実践にも移された。しかし、「長征」は、それを中途半端に終らせ、そのあとには、古典的な土地解放・自作農温存・小作の自作への上昇の路線がとられたのだ。それがいかなる事情によるものかはここではおいておこう。しかしこれこそが、今日中国経済に、さらに全中国社会に底深い矛盾を生み、文化大革命を必然化させた根拠であることだけは確認しておかなければならぬ。

ベトナムの革命は、まさにこの一点で中国革命を、そして戦後期までの一切の民族革命の水準を超えている。ベトナムが「第三世界」の革命であり、世界的な普遍性への通路の中に自己をおいているの

うえに、帝国主義の戦後の量の体系はきづかれたのだ。六六年の国連経済貿易委員会に提出された「プレビッシュ報告」は、かかる情況に対する後進国からの告発である。それは革命展望を自己のものとし、ない限りひとつの長い悲鳴にすぎないであろうが、事実はそのうちにも正確に映じている。

こうした飢餓と貧困の蓄積の一方に近代的軍隊がある。疲弊した農村から都市に主として軍隊に入れば少なくとも収入の展望は与えられる。農作物を作っても売りさばくことも出来ぬ生活を離れて、農村の中心的労働力をなす青年農民は都市へ流出し、軍隊に入る。軍隊の膨張は都市の消費経済を拡大して第三次産業の奇異的成長をもたらすことによって、さらに多くの人間を、農村から都市へ誘出する。農村労働力の都市流民化——労働力と生産手段（土地）の結合の喪失、それによる国民経済の破綻の一層の進行、これが、戦後の後進国に与えられた、情況であり、帝国主義の戦後支配の産物である。それは、あとでふれるように、民族ブルジョアジーの「健全」な発展に絶望の未来を約束するものでもある。

帝国主義の後進国支配が、労働者国家に対する反革命的な政治の中に、同時に又、後進国からの経済収奪を目的とする以上、かかる情況の前に、旧来の植民地政策は、路線のうえで、すなわち戦略的に変更されなければならない。ここでもその先陣はアメリカ帝国主義である。旧植民地政策をほそぼそと続けようとしたフランスの老将ドゴールと、ベトナムにおけるゴム・プランテーションのみ権益を有するフランスのベトナム経済政策が今日の帝国主義のもっとも後進的部分を代表し、それゆえに崩壊と革命の危機にさらされるとすれば、ケネディとそのブレイン（マクナマラーブラッグ）の

は、この点でなのだ。これを理解することの出来ぬ「経済分析」やその上に構想される「世界革命」などは、ことごとく一國主義として、歴史から死を与えられなければならない。

(3)

現実過程の追求をさらに進めるまえに、ここで、△民族Vと△階級Vについての原理的立場を整理しておこう。それは、△革命V論についてのわれわれの見解と、今日の戦略論とのかかわりについて、読者の理解を助けるためのものである。われわれの革命的インタナショナルイズムの立場が、百凡の革命主義者たちの夢や願望からどこでどのように優越しているかは、現実過程と原理の両面にわたって説明されなければ十分に理解されぬかも知れぬと思うから、こんなこともついでに書いておかねばなるまい。

さて、まず『共産党宣言』の引用からはじめよう。

「労働者は祖国をもたない。彼らがもたないものを、それからとりあげることはできない。プロレタリアートは、まずもって政治支配をもちとって、民族的階級にみずからをたかめ、自分自身を民族として組織しなければならぬ」という点では、ブルジョアジーの意味とはまったくちがうとはいえず、プロレタリアート自身やはり民族的である。」（国民文庫版・五二頁）

百年の歳月をこえてこの一句が今われわれに告げているのは何か？ △民族Vといえればブルジョア的、プロレタリアートは国際主義だ、などといっていればすむとおもっている心情左翼たちは、ページ数も書いておいたから、もう一度『宣言』を読みかえすがいい。

「ブルジョアジーの意味とはまったくちがう」プロレタリアートに与るの「民族性」とは何か？「民族的階級」とは何か？自らを「民族」として組織するとは一体どういうことなのか？革命主義者どものコスモポリタニズムはこたえることが出来まい。われわれはこの一句の中に、一切の小ブル革命主義者にきびしく対峙してプロレタリア革命の核心を、政治革命と社会革命の相関においてとりだしていることを見なければならぬのだ。もしもプロレタリアートがたんに「政治的」に解放されるだけで良いのならそれは政治革命を必要とするだけだろう。プロレタリア独裁は、政權奪取をしか意味しないであろう。しかしそれでは、「逆立ちしたブルジョア独裁」（ローザ・ルクセンブルク）にしかならないであろう。しかし、人間の政治的解放は、ブルジョア革命が原理的にはなしとげた。まさにそれによってこそ、ブルジョアジーは、自己を支配階級として全人民に認知させたのだ。

プロレタリアートの解放は、政治的解放によってなしとげられるのではなく、全社会的に全人的解放でしかありえないし、現実の政治解放の残された領域もその中ではじめて解決の現実条件を与えられるのだということ、これこそ、初期マルクスの基軸であり、マルクス主義革命論の出発点であり核点である。それは周知のように、「ユダヤ人問題」「ヘーゲル法哲学批判序説」の中に白熱的に追求されて『ドイツ・イデオロギー』に結晶している。（注・1）先に引用した『共産党宣言』の一句は、あきらかに、『ドイツ・イデオロギー』の原理的表現を政治的に書きあらためた以上のものではない。だから又、その「民族的」ということは、「国家的」あるいは「社会的」ということばにおきかえることができるし、そ

政治思想の歴史は、民族自決闘争第三勢力にあいまいな同意と同意と同情と羨望のまじったまなざしを投げることで自己の進歩性の証文をかくとくし、まさにそのことによって「民族」の言葉をブルジョア・イデオロギーの再生と膨張に無防備に放置してきた。そして国際連帯を政治の現実過程ではなく、原水祭大会かなんかにみつけることによって、ブルジョア的コスモポリタニズムを、インタナショナルイズムの代用品としてふりまわし、人も自己もいつわりつづけてきたのだ。

今日の左翼の中で、われわれに対してこの問題を実践的に提起し物質化して来たものがどこに在るか。すべての自称インタナショナルイズムは、コスモポリタニズムにすぎない。それは、前にひいた『宣言』の一句を疎外することによって、とんでもないことをいいたす。そうしたエセ・インタナショナルイズムに立脚して書かれたマンガ本が、たとえば栗原登一（＝太田龍）の『世界革命』（三一新書）である。この本はマンガのくせに絵がかいていないし、ちっともおもしろくないから、ヒマつぶしのためにマンガを読みたい人にはこれよりも『マンガサンデー』とか『少年マガジン』の方をおすすめしよう。

ふざけるのをやめてほんの少しだけまじめにやってみようか。例えは太田龍のベトコン批判がある。太田はくずれトロックストのぶんざいをもかえりみず、解放戦線新綱領を「民族主義」だと言って批判する。なぜ「民族主義」なのか？民族ブルジョアジーの持つ生産手段を収奪することが明記されていないからだそう。マンガ本しか書けない売文左翼らしく、十七年ののちのレーニンの苦闘がどこにあったのかさえ知らないのだ。レーニンはブハーリンの「左

れは、国家・民族の実体的な位相とは異なった水準にある。このもんだいが政治的実態論の水準で現実の側から理論にせまったのは、マルクスにとっては一八六〇年代の「アイルランド」であり、又、レーニンの場合は、その状況を異にするとはいえ「先進的アジアと後進的ヨーロッパ」を苦々しく思い知らせる第一次中国革命であった。

だが、レーニン死後のコミンテルン指揮下の共産主義運動は、この宣言の一句にひそめられたマルクス主義革命論の深部の問題にも、マルクスにとつての「アイルランド」が、レーニンにとつての「中国」がつけつけた問題にも何ひとつ思いをはせることはなく、革命の世界性と永続性の原点は、さまざまな段階論へ転落することによって忘却のななたへうちすてられて来たのだ。その典型が民族革命と社会主義革命の形式論的図式であるし、トロッキーも又、革命をたえずヨーロッパに規準をおくことによって考えていたため、それを超克することが出来なかった。革命的プロレタリアの化身となつてスターリニズムを告発している反スター派も、正統トロッキー主義者も、この点ではトロッキーからさえ後退し、完全にスターリニズムの枠内にある。それが、今、ベトナム解放革命の現実によって照らし出されているのだ。われわれは、ベトナム革命の世界性と永続性の了解を立脚点とするわれわれの革命的インタナショナルイズムの立場において、こうした理解的後進性を早急に歴史の博物館へ送りこんでしまわねばならぬ。それはベトナムの革命的人民に対する日本の共産主義者の任務である。（注・2）

俗流マルクス主義と俗流市民主義が、近代合理論の構造の中に情眼をむきまわって、民主主義や進歩についてさえつづいていた戦後の政

翼」的主張を批判しつつ、権力の座についたプロレタリアートに与るの基本問題は、生産手段の収奪ではなく、生産手段を社会的に稼働させること、生産の社会化を組織することにあることを、革命ロシアの実践の中から、革命論の一般性において主張した。誤解のないように言っておこう。ブハーリンの「収奪」は、行政的領域の言葉であり、革命論を行政論に転化し歪曲することが理論の上では左右の日和見主義、実践的には官僚主義としてあらわれる。ブハーリン・トロツキーらに対するレーニンの思想的・政治的闘争は、かの労働組合主義論争にみられるように、まさに行政論をもって革命政權のすべての任務を説きあかそうとする者たちとの闘争であった。正確な引用をもって論陣をたてるべきところではあるが、まあ相手はマンガ本と、トップ屋のようにいろいろな情報を文章にして売りまいてる下劣な人間だし、それにわれわれは大変忙しい。こういう相手のために、紙面を余計にさくつもりも、レーニン全集をひっぱりだしたりひっくりかえしたりするヒマもないのだ。ただ、太田龍という俗悪なマンガ屋が見落した問題は、この男の無知と頽廢にのみ原因しているのではなく、まさに、革命のインタナショナルイズムを、ブルジョア的コスモポリタニズムにおきかえて来たこれまでのマルクス主義の理論的・政治的水準にもよるものである。それは、われわれにとつて彼岸の問題ではないのである。「共産党宣言」から百年、「沖繩県」の成立から百年、今われわれは、革命的インタナショナルイズムをもって百年の歴史をくつがえさなければならぬ。

〔注・1〕 いわゆる「疎外革命論」は、ここにいわれる「社会

的解放」は「人間的解放」の社会性を、階級闘争の現実過程の中に追求することを通して革命論のうちにそれを構成することを放棄している。それゆえ、「人間的解放」と革命論はそうした現実過程ゆきに観念のうえで単純接続し、一方では「政治革命」のストリップが、他方ではそこへかける個人の決意（「主体性」）が二元的に強調されるのだ。いうまでもなくこうした観念の世界での「人間」は「社会」に対して「対立している」という感性（「疎外されている」）のうちに自らをとらえることが出来るだけで、それ以上に自己についても社会についてもその関係についても現実的な冷徹な認識をもっていない。だから、疎外された存在から、疎外されざる存在への主義主義的な「変革」に、個人と社会が無元則に二重化される。このようにとらえられた「個人」なるものは、いうまでもなくブルジョア的「個人」でしかありえない。そしてブルジョア的観念のうちでの「個V」|||「全体V」の図式は、アナーキズム|||ファシズムの円環をなしているのだ。これは、創刊号の神津論文でも触れられている。いづれ又、本格的な批判を本誌上で展開するつもりである。

〔注・2〕 わが反スタ派は、前注でのべたような小ブルジョアの被虐意識の世界のうまれでありながら、みのほどもかえりみずくに、「革命戦略」などと口走ることがあるようだが、たまには教祖黒田のたどった「政治的」軌跡でもふりかえってみるといい。五四年の黒田にとって日本革命は「新綱領」そのままに、武装蜂起による民族解放民主革命であり、五六年には平和共存路線が、そしてハンガリア革命の憤激の中ではサルトルのテーゼが、そしてトロツキスト連盟にオルグられてからはトロツキーの永続革命

十一頁

るかわりに、その伝統的買弁構造に吸収し、自らの消費的消費にまわる分以外は、ヨーロッパ銀行へそっくり預金してしまった。アメリカ帝国主義の経済機構が蓄積してきた貨幣資本（ところで、経済の現実過程から自己を疎外する貨幣資本が少数の国家独占に集中することは、レーニンの指摘するように、帝国主義段階における資本の論理法則である。この貨幣資本の過剰はたえざる恐慌圧力として作用する。資本輸出。）は、それを後進国へ吸収させることによって再び現実資本として稼働させようとした帝国主義者の願望をよそに、スイス銀行を通じて、ユーロダラーと化し、全世界を、現実の価値生産の論理から完全に疎外された自己の運動論理にもとづき、利子率の変動によってどこへでもハイエナのようにうろつきまわることによって、アメリカ帝国主義の準備金高を喰い荒し、世界貨幣としてのドルに、戦後の通過管理体制が克服したかみえた危機の深淵を思い知らせることになったのだ。金の重々しい再現がドルをおびやかす。この危機を、金蓄積によってこえようとするおろかしい錯誤をドゴールのフランスは代表した。問題は帝国主義にとってドルでもなければ黄金でもない。蓄積される遊休貨幣資本を再度生産過程にひきいれ、現実資本として稼働させることである。レーニンの時代に、植民地領有は、かかる過剰資本の吸収機能を果たした。今その条件は変化している。その変化は革命的である。

いうまでもなく、帝国主義が死滅していない以上、帝国主義の鉄の法則は貫徹する。独占資本主義の論理、金融資本の論理は以然として貫徹し、過剰資本は少数の国へ大量に蓄積されている。帝国主義の総括的な世界収奪の政治構造として、列強による世界分割は、今も完全に、帝国主義の経済的衝動として存在している。これは否

論が黒田の「政治」的立場であった。この経過をみて笑うべきではない。革命戦略などは、黒田哲学の世界ではそもそもどうでもいいので、そのときどきで適当なものをプローチのようにつけておけばことたりるのである。そして、革命戦略なんてどうでもいい「革命的マルクス主義」とは、おそるべきではないか。深刻な問題なのだ。くりかえすが笑ってはいけませんよ。

(4)

さて、原理の問題はいささか簡単にではあったがいちおう展開した。当分これにまにあわせることにして、アジアにおける革命と反革命の現実過程へ立ち戻ろう。

戦後帝国主義は、後進国民族ブルジョアジーに「援助」の名において資本を投下した。それは第一に政治的には対労働者国家の反革命同盟の政治的ヘゲモニー創出をめざすものであり、第二には、まさにかかる政治ヘゲモニーのもとでの後進国収奪の路線を、植民地構造の温存の中で模索するものであった。しかしそれは、累積された収奪の歴史が遺産として残した後進国社会構成の現実によって、挫折した。ダレス|||ロストウ戦略の破綻。

軽工業で五年、重工業で最低十年の回転期間を見込まないでは手にすることの出来ぬ、将来の「利潤」が、どれほどの希望を後進国のブルジョア階級に与えただろうか。アジアだけではない。五年といえは、戦後のすべての後進諸国にとって、クーデターによる政権の解体・再編の周期としては十分すぎる時間である。だから、後進国の卑小な有産階級は、帝国主義者からの援助を生産過程に投資す

定する者は、革共同のとき超帝国主義論や、社青同解放派の「人権抑圧戦争」なる政治主義的世界把握へかならずやゆきついてしま

うだろう。しかし、植民地領有の意義の変化はまぎれもない事実である。戦後世界の構造的な急変は、旧植民地を、帝国主義的超過利潤の収奪の源泉としては完全に枯渇させてしまっている。そして、レーニン時代に主として植民地を対象とした資本輸出の圧力は、今では他の帝国主義へむかっている。ここでも転換は五八年である。アメリカの民間資本の海外直接投資は、五八年以後急速に増大したが、それは、その構成と対象において、レーニンの時代から決定的な変化をみせている。対象は、E.E.C. 日本・カナダであり、内容は化学・電子機械等の技術革新産業が主力である。ルクセンブルクが展開したように、資本主義経済は、非資本主義的領域なしに存立しえないとすれば、戦後帝国主義にとって、植民地収奪の構造的再建は、かかる状況の中で、いいかえれば、IMF・GATT体制の崩壊的動揺の中で、それを克服する必須の課題としてつきつけられた。これこそ、今日後進国問題が、帝国主義政治の中であらためて重々しく登場している客観的根拠である。海外投資の構成における南北比の逆転は、現代帝国主義による植民地の包摂が成功していないことを意味する。

戦後ベトナムに対するアメリカ帝国主義の介入は、ベトナムに対する収奪、そこへのアメリカ資本の進出と直接結びついていたわけではない。第一次ベトナム戦争は、フランス植民地としてのベトナムの民族独立戦争であり、CIAはこれに介入した。アメリカはフランスのカイライ、パオダイ政権に対して破壊活動を組織し、ゴ・

ジンジエム政権に対して投機的な援助をおこなった。その目的は、第一にダレスの冷戦戦略の戦略的環であり、政治的拠点の形成であり、第二にフランス植民地主義の追格しであった。経済的にはそれを、ロストウの「開発」戦略が表現する。

もし今日の世界市場における旧植民地の発展が、ロストウ理論がいうように軽工業から重工業へ、さらに技術革新産業へと段階的に発展しうるものなら、植民地構造Ⅱ共同体と買弁の温存は、金融資本の世界市配のために依然有効であろう。それは、ロストウが、現代を、『帝国主義論』時代の同質のものとして扱っていることを意味する。しかし、台湾・朝鮮・香港以外に、軽工業輸出の成功した例はどこにもない。

もし、スターリン主義者たちが主張したように、重工業優先の経済政策によって、旧植民地の非資本主義的発展が不能であるとすれば、金融資本にとっては、新しい形態の植民地政策を追求する条件が成立する。だが、歴史の現実が冷たく示しているように、スターリン主義者達の夢想はただ夢想にすぎず、重工業政策によって経済開発に成功した後進国はひとつもない。

帝国主義の側は、国家資本を軸として、冷戦戦略の中で投機的な軍事Ⅱ経済援助をおこなってきた。スターリン主義者は、後進国の非資本主義的発展のために、援助をおこなってきた。しかし客観的過程としてみるならば、この両者の援助の果たした役割はどれほどのちがいをももってはいない。それは、ひとしく、買弁構造に吸収され、ユーログラシーを増大させ、アジアの飢餓を膨張させて来たのだ。

ダレス戦略——耳なれたことばでいえば「軍事外交路線」——の下における軍事援助・投機的経済援助は、政治的水準においては、

旧植民地の政治的Ⅱ経済的根柢を反革命的に支える役割をたしかに果たしたということが出来る。そしてその限りでそれは、帝国主義者にとって「有効」でありえた。

だが、一方のスターリン主義官僚体制の構造に抱えられた労働者国家による軍事Ⅱ経済援助が、レーニンがいくたびとなくくりかえじてのべた「勝利したプロレタリアートと被抑圧人民との革命的結合の自由」の具体的実現であったらうか。その援助対象たる後進諸国の政治権力は「非同盟中立」を主観的に宣言した。ソ連は「民族主義と民族資本の二面性」を強調し、中国は一方、その反帝的性格を政治主義的に強調する。しかし「帝国主義列強の援助にせよ、社会主義諸国の援助にせよ、カネはカネであり、物は物なのである。それが客観過程としては、根柢的には、アジアの生産様式、アジアの停滞からの離脱、産業的テイク・オフ（離陸）の役に立たなかったばかりか、逆に、伝統的農村共同体の自己完結的生活構造の漸次的崩壊から都市貧民を大量に折出し、アジアの飢餓を昇進させる結果をもたらした、という点には、援助の主観政治性は何のかかわりをもっていない。」

そしてその歴史が残している今日のアジアの現実には、「アジアの停滞」から「アジアの飢餓」への「発展」であり、その構造化である。帝国主義の側は、すでに前にのべたように、その戦略のドラマチックな転換を開始した。大アメリカのケネディ、その六三年の「海外援助特別教書」AID「対外援助局」の改組、クレイ委員会の編成——これらに一貫する論理が今日、メコンデルタ開発戦略構想として実現に移されようとしている。それは政権構造としては、伝統的なカイライー買弁構造の否認の上に立つことによって、解放

戦線との連立政権の承認をも、単なる政治技術上の妥協の次元ではなく、明確な戦略次元においてくみいれることを可能としている。その限りにおいて、ベトナム革命の勝利の展望は明るい。

しかしそのことは、ひるがえって、帝国主義者にとってその危機の延命の展望が明るいことを意味するだろうか。そのように考えるためには、今や構造化されたアジア的飢餓の中の人民の反逆のエネルギーが、アメリカのニュー・エコノミストたちによるコンピューターの中にプログラムされ、開発のエネルギーとして組織され、管理されなければならない。しかし、それは原理的に不可能である。

アジア的飢餓構造の中の人民の抵抗は、電子計算器の中にプログラムされることを、どうして、抑圧として感ぜずにおろうか。帝国主義者の「合理的開発計画」を嘲笑し、闘う人民のエネルギーは、荒々しく、「非合理的」にはとばしり出るだろう。今、その胎動は、全アジアに拡大しつつある。ラオスで、左派は再び前進を開始し、政府軍は後退して米軍に援助を要請しなければならなくなった。マレーシアでは、「民族的」外皮をまといつつ叛乱が開始されている。だが、すでにあきらかにしたように今や民族自決の古典的展望は与えられていない以上、「民族」の外皮はただ外皮にとどまるだろう。フィリピンでは「フク団」が再生した。すでに民族独立の古典的な旗ではなく、再生フク団の旗には、民族——社会主義の文字が書きこまれている。フィリピン政府はこれに対して、戒厳令体制を敷かねばならなかった。しかし、戒厳令とは何か、それは権力の階級基盤の動揺を意味する。そして、権力の階級基盤の動揺は、開始された以上、ただ革命によってのみ止揚されるほかない。台湾Ⅱ国府は、米大陸に対して軍事挑発を開始した。しかし、軍事的勝利

の可能性の一片すらもたぬ国府の軍事挑発は、その内的危機の外化でなくてなんである。そして、今、南朝鮮では、朴の三選阻止闘争がはじまっている。

これがわれわれのまえにくりひろげられているアジアの状況である。民族開放Ⅱ社会主義・第三世界の闘争は全アジアのものとなる。うとしている。同盟七回大会の、一切の党派の小ブル的反戦闘争をこえたベトナムに対する評価の正しさはこの状況が説明している。いうまでもなくわれわれは非力であり、わが同盟国際部には、アジアの諸国語のスタッフもない。わが同盟の大会決議の影響がこの情況をもたらしたのではもちろんない。だからこそ、われわれの決議の正しさは、今証明されているのだ。それは、わが同盟が一国主義的革命的闘争の熾烈な理論闘争の中にうちきたえてきた、革命的国際主義の正しさによっているのである。

あらゆる小ブルの党派は、今あらためて自己の世界認識のまずしさをしみじみとふりかえってみるべきであろう。

われわれがベトナムを革命と呼んだとき、革共同は一貫してこの呼び方に敵対した。「ベトナム革命勝利」のスローガンに何故かれらは敵対するのか。「ベトナム戦争反対」のスローガンの方が、より広範な大衆の支持をとりつけることが出来るからか？ それは、かれらにとっての「大衆」と、われわれが獲得しようとしている「大衆」の差を意味するだけだろう。ベトナムにおける残酷な行為に悲鳴をあげる市民的大衆と、ベトナム人民の解放闘争の精神と自己の闘争の連帯を革命への共感のうちに直観し、実現しようとする戦闘的大衆との差を。そして、これこそ、かれらとわが同盟とが、大衆に対して、最も戦闘的な大衆の実践的闘争過程に対して形成し



ている関係の差のあらわれであり、そのヘゲモニーの質の差のあらわれである。この差は、今夏における二つの大衆戦線の焦点——全国全共闘、および全国労評の準備会議で、大衆的に確認されるであろう。そして、革共同がベトナムに、革命を第三世界の革命の前進の意味を読むことの出来ぬ思想的根拠「反帝反スタ「戦略」と「代理戦争」論の誤謬と頽廃は、えぐりだされ、うちすてられるのだ。理論の正しさが現実の中に貫徹すると同じく、誤謬は誤謬として自己を貫徹する。ベトナム革命を、真に現代の名に値する革命をみてとれぬ誤謬は、七〇年安保の、七〇年代階級闘争の、そしてその結節点をなす「沖繩」の把握において、誤謬として自己貫徹し、誤謬と頽廃を再生産する。

前章でわれわれの沖繩に対する視点は簡単にのべておいた。われわれはアジアの革命と反革命の以上の認識を確としてふみしめ、われわれの沖繩の現実過程へ出発しなければならぬ。

《附記》 本章での経済Ⅱ政治過程の叙述は、一理論家がガリ版で発行したレジュメによって行っている。これは近日中に単行本として刊行予定と聞いているが、われわれはその全てに対する理論的検討を今のところ十分におこなえていない。本来かかる状況の中では、このレジュメの引用を、参考資料として全面的に提出して、われわれのダイジェストなどに改変すべきではなかったのであるが、スペースの関係上やむをえなかった。

われわれの手もとにあるレジュメの題名と項目だけとりあえず紹介しておく。

(一) 『国際通貨危機と世界恐慌Ⅱ世界革命』項目はない。分量に

## VII 沖繩にとって解放とは何か (I)

### 1/△復帰V運動の成立の根拠

われわれの知る沖繩現地の闘争は「沖繩県祖国復帰協議会」——「復帰協」の下にすめられてきたものである。シンガポール陥落の旗行列と、四・二八の復帰大会のパレードには、同じように日の丸の旗、がうちふられる。「鬼畜米英」に対してうちふられた旗が「米軍政」に対してふられるこの歴史は今変ろうとしている。しかしそこへゆくまえにわれわれは、この二つの日の丸行列を結んでいる歴史の中に目をむけなければならぬ。

本土へ復帰したいという願望は、沖繩人民の△素朴な感情Vだといわれる。これは、理論や知識や思想やらの觀念の世界に政治を考える日本の政治的インテリゲンチアに、磐石の重みをもって迫るのだ。だが、△素朴な感情Vがその中に、どのような真理をどのようひめていくかは、たえず厳しく問いかえされなければならない。経営者が労働者を人間としてよりも商品としてみたり、白人が黒人を差別したりするときの意識も又△素朴な感情Vにはちがいないからだ。一般に△素朴な感情V生活意識がそのうらに真理をひそめて語られる度合いは、そうした感情を生む人間の社会生活の構造が△自然Vに対してもっている距離に反比例する。より自然に近い生活の中では、素朴な感情の中の真理性の占有率は相対的に大きいといえるのだ。そして「沖繩」も又、その△素朴な感情Vを、真理をひめた言葉として我々に迫らせる問題のひとつであるこ

してワラ半紙八枚片面。うち一枚は統計  
(二) 『新しい歴史規定として新しい帝国主義——世界革命の現過程としての七〇年闘争——』

一 共産主義への過渡期世界史  
—— 帝国主義とプロレタリア革命の時代の延長としての現代

二、主体的変革Ⅱ主体的認識、あるいは認識Ⅱ変革の弁証法。  
六〇年安保闘争と既製左翼理論の不毛性。

三、世界革命における経済学の意味

四、レーニン帝国主義論の歴史的意义

五、帝国主義の論理の貫徹の諸条件の形態変化——新しい帝国主義を規定する必要性

六、「資本輸出」と「植民地領有」の意義の変換。新しい帝国主義と新しい植民地主義の成立。

分量はワラ半紙片面十三枚。以上。

われわれは、このレジュメの本格的な検討を夏中におこない、過渡期世界論の深化をはかりたいと考えている。過渡期世界論は、現代世界市場の統一的な運動法則の追求の問題としてたてられなければならない。いうまでもなく反帝反スタ論は、こうした問題意識に完全に無縁であるし、岩田弘の世界資本主義論もその射程は「世界」にとどかない。理論的困難性はあきらかである。しかしその困難の具体的内容をあきらかにすることは、われわれの力量の中で最大限に追求されなければならない。同志・活動家諸氏の、同様の理論追求を望むところである。

とは間違いない。

だが、すべての言葉がそうであるように、△素朴な感情Vも又ひとたびそれが言葉として表出されるやいなやそれ自身の論理で自己運動をはじめ、欺瞞にみちみちたものへ変質してゆく可能性をつねにもっている。そして、△素朴な感情Vは、言語として表出されたものとしては、自身の変質を検証する論理をそのうちにもってはいない。われわれは、以上のことを確認したうえで、△祖国復帰Vがそもそも沖繩人民にとって△素朴な感情Vであるのかどうか、あるとすればそれはどのような意味に於てであるかを考えながら、二つの日の丸行列の歴史のあとをたどらねばならない。

十三世紀のはじめ、従来琉球王国として統一されてきた沖繩列島は、室町将軍足利尊氏が島津忠国にその支配権を与えて以来、日本△島津の支配と収奪のもとへくみこまれた。一六〇九年、島津兵の侵略的襲撃が、平和な南海洋の中の非武装列島を、苛酷な支配の列島へと変えた。日本の植民地としての琉球の歴史は、こうして徳川幕府の崩壊に至るまで継続される。島津△鹿兒島に対する琉球人の憎悪はこの期間に根強く形成されたのだ。

明治維新は、かかる歴史の転換点としてうけとめられた。明治維新は、台湾等とともに琉球列島の国家帰属を問題の焦点へおしだした。これらの島々は、中国△清と日本との間にあいまいな従属の歴史

のくりかえしをえがいてきた。それが、「近代」的に結着つけらるべき時点がこのときである。琉球王国内部は中国帰属派と日本帰属派に分裂した。いうまでもなく当時の清が「亜細亜の眠れる獅子」であったのに対し、日本は、近代国家として出発を開始していた。日本の帝国主義軍隊が現地へ登場し、中国帰属派に対する武力弾圧を開始する。それに対応して、現地には抗日独立闘争が展開された。この抗日運動のこととくが、日本の軍事力によって圧殺されつづいたときに、「沖縄県」が日本史のページに書き加えられた。敗戦に至る六三年の歴史は、「沖縄県」の歴史は、血ぬられた武力併合の歴史である。

抗日独立闘争の最後を記す宮古島の「サンシイ事件」が血の弾圧をもって終る数ヶ月前、すなわち、明治十二年（一八七九年）三月二十七日、警官隊百六〇名、歩兵大隊四百名をひきつけた琉球処分官・松田道之が、琉球藩王代理に対して読みあげた太政官令番外第一号『廢藩置県ニ関シ施設ノ大略告諭ノ件』はつぎのように言う。

「今般琉球藩ヲ廢シ沖縄県ヲ被置タルニ付キテハ今後如何様成行ヤト苦神ノ者モ可有之因テ其主意ノ大略ヲ告知セントス抑モ此琉球ハ古來我カ日本國ノ屬地ニシテ藩王始メ人民ニ至ル迄皆共ニ本邦天皇陛下ノ臣民ナレハ其政令ニ從ハサル可カラズ」

血ぬられた武力併合の執達宣告として読めぬ者ははいまい。島津藩の植民地は、かくて中央権力による武力領有にもとづき、「県」の名を戴くことになる。沖縄人民にはこの歴史を告発する権利があり、変革する権利があり、かくして自己を解放する権利がある。しかし本土プロレタリアートには、自国支配階級の抑圧の歴史を告発することは、義務としてあるのだ。「自国民によって抑圧されている植

民地と民族との分離の自由を主張しない社会主義者、とくに大国民族（大ロシア人・イギリス・アメリカ人・ドイツ人・フランス民主人・イタリア人・日本人、その他）の社会主義者は、実際には社会排外主義者と一致している」（レーニン『社会主義革命と民族自決権（テーゼ）』）。

わが戦闘的「奮闘」論者たちは「ちゅうちょなく」座してレーニンを読みかえすがいいのだ。「本土復帰」を叫び「沖縄県民」なる、ことばを連帯の名辞のように使ってはばからぬ徒輩どもは、革共同のごときその「戦闘的」亜種をもふくめて、ひとしく「抑モ此琉球ハ古來我カ日本國ノ屬地」たることを当然のこととしてうけとり、沖縄人民の中にもあった民権闘争の志士・謝花昇の狂死に冷笑をあげ、  
「実際には社会排外主義者と一致している」。反論したいならしてみるがいい、歴史はその者たちに、遠からず恥辱の死を与えべく準備している。

天皇制国家官僚のエリートの一入として文相の座についた森有礼の沖縄教育政策は、朝鮮や台湾におけるそれとまったく同様の性格をもつ。それは皇民化と近代化の結合のもとに、他民族の抹殺を意図するものであり、琉球文化の抹殺は、言語に至るまで徹底的に遂行されたのだ。それが「併合」の歴史である。

日本帝国による併合は、事実として、沖縄住民の一部からは好意をもってむかえられた。かれらはそこに、薩摩と首里王府の二重の支配と収奪からの解放の夢を託したのだ。しかし、武力なしに実現されない併合がどうして解放を夢以上のものにしただろうか。

「沖縄県」という名辞は、琉球列島の住民が日本人として扱われたことを決して意味しない。併合は異民族支配であり、異民族支配

は差別を必須のものとする。「沖縄県」が、内地のような「県」でなかったことは、明治以来の差別政策が物語るだろう。沖縄県行政の上層部は、つねに本土から赴任して来た官僚たちが占めることになっていったし、又、内地へ職を求めて出かけてゆく琉球労働者は、ゆくさきさきで「朝鮮人と琉球人おことわり」というはり紙のまえに追いかえされねばならなかった。それは、朝鮮・部落・アイヌ等の問題とともに、近代日本の深みを流れる暗黒の裏面史の一部をなすものである。

太平洋戦争の開始に伴って、日本軍は沖縄基地化のため、住民の強制立退を強行し、戦火の中で二十万の沖縄人が生命を奪われた。そして、日本の敗北とともに日本を占領した米軍総司令部は、南西諸島の行政分離を宣言する。六三年間の「沖縄列島」の歴史は、たちきられ、それまでまがりなりにも日本国の一部だった沖縄は、これ以後、独自の政治的流れの中におかれることになるのである。

中核派の諸君によってくり返し強調される「分離支配」はここに開始された。しかし、「分離支配」の開始は決して、「本土復帰」運動の開始ではない。五十年に至るまでの数年間沖縄には、沖縄独立論や沖縄自治論は出て日本復帰論などはなかった。なぜか。島津兵による侵略以後、沖縄は、軍事的・経済的に日本に從属しつつも、その精神の領域は、絶えず、中国へ向かってひらかれて来た。島津の苛酷な、非人道的な侵略は、沖縄人に、日本への尊敬などを生み出すはずもなかった。このことは、大日本帝国による併合以後も、強まりこそすれ、決して弱まったことはない。終戦をむかえ、その地形さえもが変ってしまった沖縄で、隠れひそむ日本兵を容赦なく

米兵につき出した歴史がこれを示している。

森秀人氏の「沖縄解放論」は次の様に書いている。

「戦前、戦中を通して、日本軍国主義にためつけられていた沖縄人民は、一九五〇年までは、すくなくとも自己の帰属についてはいまいな不定見にあった。暮しのよくなるほうにつけばよい、といった日和見主義があった。農民達は戦火を生きのびた、生活の再建に向い、それなりに努力してきた。沖縄はふたたびかつての日のような農村の風景（ミクロ世）になろうとしていた。米軍の占領下でも沖縄人民はそれなりに自立していた。国家なんぞは、どうでもよかった。かつて琉球王国として独立していたけれど、日本（島津藩）の四百年にわたる植民地として存在しなければならなかった沖縄人民にとって、国家は『どこかよそからやってきて、収獲物を奪っていくもの』というように考えるしかなかった。」「甘蔗伐採期の思想」九七頁・六三年現代現代思潮社。以下ページ数のみ示す引用は全て本書からのもの」

当時、日本共産党が、米軍総司令部の沖縄分離宣言に対して、これを沖縄の独立として祝ったことは、かの解放軍規定と同列の誤謬として批判されなければならぬとしても、当時の沖縄人民が自治政府樹立のスローガンを掲げていたのは、単に政治的な誤りとして一助するわけにはいかない。

沖縄に生れた徳田球一が戦後ただちに、自立した沖縄共和国を理想とする沖縄独立論を提唱したのは、柳田国男の民族学をもち出して、沖縄人はそもそも大和民族であるがゆえに、アメリカ帝国主義の沖縄支配は、民族感情の許しえないものだ、等という欺瞞にみちた祖国復帰論を展開することに比較すれば、△素朴な感情▽のひめ

る真理性からいえば、はるかに、正当なものだといふことができる。そして、沖繩エリートと日本の革新勢力が、本土と沖繩の両側から増幅させ膨張させて来たこの「復讐」論の欺瞞の中にひそむ日本のナショナルなエゴイズムと闘わない日本人などは、インタナショナルリズムを語る資格をもっていないのだ。革共同よ、よく聞け！

一九五〇年、朝鮮戦争を契機に情況は一変する。アメリカはその「民主主義」の仮面をうち捨て、帝国主義者の残虐な面相をあらわにして、沖繩人民を三たび、軍事的圧制のもとにしばりつけ、五年まえの行政分離宣言がそもそも何を意図していたのかを、血と涙を生命の危険をもって沖繩の人民に教えこんだ。一九四七年のトルーマン・ドクトリン、同年のマッカーサーによる二・一ノ庄殺、そして四九年中国革命によってさらに本格化する帝国主義者の反革命「解放軍規定」の誤謬が観看して来た戦後史の真実が、沖繩住民のまえに、農耕地を基地につくりかえる巨大なトラクターとして、それに抗議する農民の胸につきつけられる銃剣として、そしてさらに、さらに、最も英雄的に土地取上げ政策に反対して闘い抜き、敗れ去った者たちに対する「差別」の政策化としてあらわれる。もちろんその「差別」は、かつての日本がつくりだした粗暴なものから、「民主主義」と「合理性」の姿をとったものに変ってはいる。だが、それが、天皇陛下の名においてであろうと、合理主義の名においてであろうと、差別は差別であり抑圧は抑圧であることに何のかわりもないのだ。「注」沖繩人民にとって、歴史はその姿をかえることなくひきつづいた。農民の反抗は武力で鎮圧され、沖繩人民の生活に対する全面的な破壊と抑圧が、自由主義の防衛の名において強行

十二内

2/サンフランシスコ条約

五二年 日本復讐運動が、高潮の第一の極点にのぼりつめたままにその時、対日講和条約が発効した。「日本の沖繩人民に対する戦後最初の加害行為」(一〇一頁)が実行されたのだ。

「沖繩人民は、遂に一度も、政治的に自己主張することを許されることなく、一方的に日本国民とその政治によって、日本の領土として認定されたうえで、アメリカに売却されてしまった。沖繩人民の日本復讐の願望は、半分達成されたうえで、丁寧に打破されてしまった。」(同)

森氏は次のような比喻で彼自身の言葉を語っている。

「放蕩親爺(日本)が遊廓(米国)に自分の娘(沖繩)を売りとばしたのである。しっかりした娘ならば、あんな親爺は自分の親ではないと自分の方から縁切状をたたきつけることで、親爺の親爺の親権を否定し、売られることに抵抗したのである。ところが、娘(沖繩)は、売られる危険のせまったその時において、みずから、親爺の娘であることを名のりあげ、親爺(日本)は喜んで遊廓に娘を売りとばしたのである。」(一〇二頁)

そして、まさにこの対日講和条約を歴史の留数点として、復讐論は、底深い頹廢の道を進みはじめることになる。この講和条約によって「復讐」は「沖繩が日本から合法的に売られたという事実」を沖繩人民に認めさせ、そのこともつ沖繩人民にとっての最も主要な問題を「故意にかくす」論理の中に身をおくことになったからだ。さて、ここでわが革共同の諸君にお出ましを願わねばならない。まずかれらのとくいなになって書いている文章をここに引用しよう。読

され、かくして沖繩は、〈KEY・STONE OF THE PACIFIC〉として、不沈空母としての姿に全面的に変えられていった。

「注」 伊江島・真謝部落の土地収収と差別の実態について、森氏の書中「解放へのくびり道」を一読せよ。

「多くの沖繩人民にとってアメリカが自分達の敵として自覚される過程のなかで、味方探しがはじまった。奇らば大樹の蔭という。沖繩のような人口百万にみえない小さな群島の住民にとっては、日本は巨大な国である。そうして当時、日本はまだその独占資本を成熟させてはいなかったから、沖繩に対する直接の加害国ではなかった。(中略)一九五〇年―一九五一年という、復讐運動の開始期に、日本はいわば、関係のない中立国の立場にあり、まさにその点にこそ日本復讐が運動として成立しうる原因があったのだ。」

(九八―九頁)

だから、祖国復讐運動は、「決して、愛国心の発露とか、民族意識の形成とか、そうした観念にささえられているものではない」(九八頁)ことを、その成立については、はっきり確認しておく必要がある。祖国復讐が沖繩人民の素朴な要求だとすれば、その素朴さをもつ根拠は、彼らの日本人としての意識にあったものでは決してない。彼らを日本人とすることによって復讐を正当づける議論は、これをに意識的にか無意識的にか注目しないことによって、膨張する欺瞞をそのうちえかかえこんできたのである。

者は注意深くこの引用を読んでほしい。この引用文がひめる革共同奪還論の頹廢を、はっきりと見抜いてほしい。

「革マル派の諸君は、一方では『本土復讐』のスローガンに反対しながら、他方では『サンフランシスコ条約十三条の破棄』をかかっているが、では『サンフランシスコ条約第三条の破棄』とは何か。それは本土復讐の法制的表現以外の何ものでもないではないか。」(『沖繩奪還』八四―一五頁——ゴチックは引用者)

この強調はダテではない。本多論文「沖繩解放闘争の綱領的問題」でも、これと同じことがくりかえされている。いわく、「平和条約第三条の破棄を国際法的表現とする沖繩の本土復讐」(二九頁——ゴチックは原文)と。

念のためにここでサンフランシスコ条約(日本国との平和条約)第三条の全文を引用しておくことにしよう。

「日本国は北緯二十九度以南の南西諸島(琉球諸島及び大東諸島を含む。)、 婦岩の南の南方諸島(小笠原群島、西之島及び火山列島を含む。)、並びに沖の島及び南鳥島を合衆国を唯一の施政権者とする信託統治制度の下にこととする国際連合に対する合衆国のいかなる提案にも同意する。この様な提案が行われ且つ可決されるまで、合衆国は、領水を含むこれらの諸島の領域及び住民に対して、行政、立法及び司法上の権力の全部及び一部を行使する権利を有するものとする。」

さくして、この条項の破棄は何をもたらすだろう。ここに書かれたX諸島および領水に対する支配権が、アメリカのものでなく、なことを意味する。そして、それが、日本国の施政権の下へ移され

ることを意味する。なぜなら、これらの諸島の施政権のアメリカに売りわたしたのは「日本国」であり、「日本国」が、「云々の合衆国の提案」に「同意」を与えていることは、「抑も此琉球ハ古来我カ日本国ノ属地」であることを前提としなければ成立しない。誰も自分の所有物でないものをかかって売り飛ばしたりいはいけぬのがブルジョア法論理のおしえるところだ。琉球処分官の読みあげた叫力併合の宣告文のかわりに、革共同の主張をここへもってこるとみごとにピタリと、スキマもなくあてはまる。いわく「平和条約第三条の破棄を国際法的表現とする沖繩の本土復帰。」( )

はっはっ！「やっただぜベイビー、三多摩ブンド、血の海——いや失礼、排外主義の汚物の中にのたうつ中核派——」ときには母のないう子のように、どこかのマネをしてこんなピラをまいてみたい。だけど心はずぐかわる。ここはマジメな政治のお話としてやらなければならぬ。何せ相手は、ユーモアをてんで解さぬ革共同だ。ユーモアがわからないのは仕方ないとして、マジメになって考え

てみるがいい。一体、沖繩人民は、自己の政治的帰属をいつどこで決めたことがあるのだ？「平和憲法」のもとで日本の政府は、この対日平和条約を締結することによって、沖繩を自分の領土だと勝手に認めてしまった。それはしかし、日本政府と米合衆国の間にとりかわされた条約であって、沖繩人民自身は、何ひとつとして選択など許されたことはないのだ。これが、あの明治十二年の「琉球処分」の戦後版でなくて何であろう。革共同にとっての「沖繩」は、戦後でさえない。かれらにとっての「沖繩」は、朝鮮戦争以後の、言いかえれば沖繩社会大衆党結成以後の、二〇年弱の歴史しかもたぬ「沖繩」なのだ。それ以前の沖繩史は、革共同にとっては未知の

これは革共同そのものの主張であると、敬意を払って聞いておくべき主要な文章なのだ。「日本を美化し、日本の犯罪を隠蔽し、日本に帰ると幸せがくる、という称名念物の精神運動に転落していった」復帰運動のどす黒い顔龐が、どの様なものであるかは、森秀人氏の告発を直接読んでもらう方がよい。しかしその深みは次の様な軽妙な文体でこえることの出来る様なものでないことだけはあらかじめ知っておくべきだろう。

「民族排外主義的、ブルジョア民族主義的墮落の危険性はもちろん大いに存在している。その傾向は現実にもある。だが、そうした墮落は、本土復帰の闘いの全人民的発展とは基本的にあいれないものである。むしろそうした傾向と闘うことによって始めて真の復帰闘争となり、反帝国主義運動になるのである。」(清水丈夫)

△危険性△とか△傾向△だとかの問題ではない。それは、対日講和条約が発効以後の△復帰運動△に強制した本質であり、論理なのだ。だが、革共同の△鋭い階級意識△は、それを探知することができない。それ故、それと闘うことも論理的には出来ない。とすれば清水氏の論理に従えば、革共同は沖繩解放闘争を「反帝国主義闘争」として闘うことが出来なくなってしまうのである。断っておくがこれは論理的にそうなるということであって今日の革共同が沖繩闘争を戦闘的に闘っているという事実を否定するのでは決してないし、

沖繩開放闘争は反帝国主義闘争として闘わなければならないという彼らの直観や願望の正しさを否定しているのではない。しかし、主観的には沖繩解放闘争を反帝国闘争として闘わねばならないと信じている革共同の論理は、なぜこの様に、論理的には、とんでもない方向をむいてしまっているのであろう。それは、ひとえ

領域にある。何とすばらしいのだろう、かれらの△鋭い階級意識△なるものは、かれらの無知と頹廢と汚辱の△奪還△論は、かくして、日本の武力による琉球併合の血ぬられた歴史を美化し、是認しているのだ。被抑圧民族の立場に立てとアジってレーニンの『民族自決権』を学習指定文献にまで挙げてベトナム反戦闘争を指導した革共同が、ベトナムについて革命を、まさしく現代の名に値する革命をみる事が出来ず、従ってインタナショナルリストとして失格したその本質は、今、その戦闘的なよそおいをこらした△奪還△論において、沖繩人民に決定的に敵対するものとして立ちあらわれ、日本国家のエゴイズムを踏台として立つことによって、復帰運動の増殖しつづけて来たおぞましい頹廢のよどみの中にとっぷりつかっている。かかる部分と、革命的インタナショナルリストたるわれわれは、たとえそうしたいとおもったところで、共に戴くべき天などはもちあわせていないのだ。

「沖繩返還が帝国主義者がしかけた『落とし穴』だとか『陰謀』だとかいう用心深い間ぬけた誤った理解をまず投げ捨て、安保粉砕、日帝打倒と並んで沖繩の本土復帰、基地撤去のスローガンをなんのちゅうちょもなしに日本の全労働者人民のスローガンとして打ち出すことからはじめなければならない。」

かれらの中でも、経済学に強いことで有名な藤掛守氏が我々に加えた批判の中でも一段とイセイの良いパラグラフである。たまたま藤掛氏が、経済学には強いが歴史の事実の知識が足りなかったのとんだ威勢の良さを発揮してしまったのだろうか。いやいや、組織性を誇る革共同である。まさか彼一人のハプニングではあるまい。

に彼らの純化された政治力学主義の結果なのだ。

我々は、その政治力学主義がどのようなことを結果しているかを、更に検討しよう。Ⅲでは革共同の政治力学を、その論理構成において分析してみたが以下では、その具体的な姿を我々は見なければならぬ。

### 3/革共同にとって△奪還△とは何か

わが同盟は、沖繩闘争のスローガンとして「米軍政打倒」を掲げて来た。革共同は、この「米軍政打倒」を「沖繩における直接的な実体的な権力との闘いの究極的な発展を示すスローガン」としてはつきり掲げる(『沖繩奪還』十六頁)と言っている。我々に「本土復帰や日本帝国主義打倒との連関性を断つような意味で米軍政打倒が強調されるのはあきらかに誤りである」(同)などと言っているが、ここではそれは忠告としてありがたく聞いておくことにして、問題は、革共同が米軍政打倒を「究極的な発展を示すスローガン」だと言っていることにある。我々にとって「究極的な発展を示すスローガン」とは革命のスローガンのことである。とすれば、革共同のいう「奪還」とは何のスローガンであろう。改良的要求のスローガンであろうか。

岸本健一氏は、割と正しいことを書いた論文「階級闘争の主体を忘れてはならない」(『共産主義者』十六号)の中で、正しくも次のように述べている。

「こうした中では〔革命情勢に今だないない状況の中では、という意味―引用者〕個々の改良闘争はあくまで改良闘争であり、

共産主義者にとっては、それ自身全力あげて要求実現のために闘うべき闘争なのである。」(三〇頁)

まったく異議なしだ。ところで彼らの「復帰」が、もし改良的要求の闘争スローガンであれば、それは「それ自身全力あげて要求実現のために闘うべき闘争」のスローガンであるから、当然「復帰」奪還は、革命以前に実現可能なものと考えられなければならない。(実現可能なものを可能だというのは欺瞞であろう)。

この点では、『前進』四三七号で、我々に「共同の努力」を呼びかけてくれている武部達郎君の言葉を聞いてみよう。

「問題は、沖繩が、日帝の第二次大戦の敗北によって米帝の人質として売渡されたのであり、このことをもってのみ日帝は帝国主義国として存立してれら両帝国主義は日米同盟をもってこの沖繩の暗黒支配の上にアジア支配と日帝の延命的発展に安定の礎石を得たといふことにある。その沖繩の帝国主義支配が米帝の力とそれを補完する日帝の力によっても維持しえなくなりつつあるということ、これが日帝をして最大の危機に立たされている最大の環となっていること——これが『沖繩問題』の核心なのである。」

この「核心」につきつけられるスローガンが「本土復帰——奪還」であるとするれば、それは何を意味するだろうか。最大の危機に立たせられている日帝を更に危機へ深く追ひ込むことを意味する。日帝は安条約によってその戦後の再建を成し遂げたのであり、その礎石は沖繩の「分離支配」である。本土復帰は、この分離支配に對立するが故に、安条約に對立し、それに立脚している日帝を危機に追ひこむ——この政治力が学生主義のすてに前にも明らかにした論理の中で「復帰——奪還」は、日帝を危機に追ひこむためのスロ

彼らの純化された政治力学主義が、ついに、前に予言しておいた様に、一番便利なスローガンを手にするに至ったことは、その「鋭い階級意識」と「現実」の關係に、深い頽廢をやどしていることを示している。それは、沖繩人民の「素朴な感情」である(「実はこれも嘘である」)。「本土復帰」を、彼らの政治の目的に利用しているにすぎない。政治は常にそうしたものだというなら、それは革共同の政治が、沖繩に限らず底の底までブルジョア的政治であることを、直ちに意味するだろう。

かくて、革共同の沖繩闘争論は、第一に、本来沖繩人民の素朴な感情でないものを、そうであることに捏造し(捏造したのは彼らではなく沖繩の墮落したエリートどもだ)第二に、その偽られた「素朴な感情」を、政治力学的な計算のうえで、利用対象にしている、という意味で、そこには二重の頽廢が隠されているのだ。そして、彼らの論理構造は、その「鋭い階級意識」にもかかわらず、この頽廢を原理的に反省することを妨げている。

#### 4/自然発生性への拝跪——沖繩奪還

だが、二重の頽廢は十分えぐり出せし、あとは彼ら自身にまかせておこう。我々は倫理主義者ではないつもりだから、頽廢を一般的に論難することに興味があるわけではない。

しかし、どうしても言っておかなければならないのは、かかる二重の頽廢をひめたスローガンを「なんのちゅうちよもなく」おしただてくる彼らの政治力学主義が、今最も深刻に我々に問われている。政治指導の目的意識的な強化のために何の役にもたたないこと

「スローガンとしての意味をのみ与えられている。とすれば、それは、権力の打倒」革命以前に実現されてしまう可能性があるのなら意味がない。彼らは文章では書きたがらないが、沖繩の本土復帰が革命以前に実現するスローガンであるとしたら、彼らの論理はガタガタになってしまふのだから、推定するに心中深くその可能性を確信しているのである。だがそれは、闘争の「究極的な発展を示すスローガン」でもないのである。

そうだと、革共同の沖繩闘争論は、そのメイン・スローガン「本土復帰——沖繩奪還」の論理的な位置を確定していない。それは、ある時は、改良要求スローガンの水準へ無限に接近するかと思えば、又ある時には、帝国主義打倒(革命のことではなく何だ?)のスローガンの位相スレスレにまで上昇する。そして、まさにこの浮動性こそ、彼らの論理構成上の一切の秘密なのだ。それはしかしあまり秘密にされているわけではない。

「具体的政治過程」の中に、「日帝の攻撃の環と人民の反抗との矛盾点をつかみとることから始め」られる彼らの闘争は、「沖繩の現状と、安保によってかきたたえられている人民の反抗の意志を総結集し、その闘いの不屈非妥協の現時的展開」ととげられる。そのためのスローガンが、論理的な位置を確定することのできない、浮動的なスローガンとしての「復帰——奪還」なのだ。それは、権力の攻撃と人民の反抗との矛盾を拡大し、沖繩の分離支配の危機を拡大し、日帝の危機を深化させるために選びとられた。それが「復帰——奪還」であるのは、「かきたたえられている人民の反抗の意志を総結集」するの一番便利であるからにすぎない。(引用は武部君の「訴える」からのもの)

である。

考えてもみるがいい。捏造された「素朴な感情」復帰を「不屈・非妥協の現時的展開をもって」おしすすめ、日本帝国主義を危機においつめることがどうしてその先に、革命を展望することができようか。日帝が危機の瀬戸際へおいつめられるのは、もちろんいいことにちがいない。しかし、革命とは、何か。「革命の基本問題は、権力の問題である。」レーニンのこの一言は、我々に今、重々しく与えられている。諸君の奪還路線によっても政治技術を上手に駆使すれば、たしかに危機は増幅されるだろう。そして日帝は大変消耗するだろう。だが、支配階級が危機に直面するということと、抑圧されてきた階級が自己を支配階級として組織すること即ち権力を奪取するだけでなく、それを維持し、それを死滅させてゆく能力を自らのうちに形成することが出きるということは、全く別のことがらだとレーニンは語っているのだ。

我々はここで六〇年に戻らなければならない。六〇年の、あの安保闘争は何故敗北したのだ。「革命的マルクス主義に武装された革命的プロレタリア党がなかったから」だろうか。では、その「プロレタリア党」は、何故なかったのだ? 黒田哲学を皆が信じなかったからか。ではなぜ皆が黒田哲学を信じるつもりにならなかったのだらう……? だらぬ返答はくだらぬ問を次々と呼びおこすだけだ。くだらない返事はせめて、もっとマジメにやろう。六〇年安保闘争の敗北は、何よりもあの昂揚の中に大衆をおしやっしたパネとしての戦後民主主義が、そして、その平和意識が、闘うエネルギーを大きくひきだすものでありながら、ついにそれが闘う大衆の固有の権力意志へと結晶されなかった、その弱さの結果なのだ。我々は黒田哲

学に魂を売り渡すことを拒絶してこの問題をひきうけなければならなかったからこそ、「戦後民主主義」に固執し、「戦後の政治過程の終」を問題にして来たのだ。だが、君達はずいぶんこの問題に、あの六〇年の敗北がひびいている問題に、何ひとつ思いをはせることもなく十年近く過して来た。我々が六〇年闘争を戦後民主主義のピークだといひ、君達がそれを、自らの身を顧みることさえせずに「清算主義」的総括などと嘲笑してみせたことの間、どれ程の距離があったのか、今こそ深く考えてみる時であろう。

革共同が、△反帝反スターリン主義△の鋭い階級意識△で武装したので、安心して、純化された政治力学主義に身を委ねてきたことは、彼らの目を、△戦後△へ、意識的に集中することを決定的に妨げている。「分離支配」などと言った時、彼らがみているのは沖繩全体でなく、その△戦後△だけに限られていたではないか。「分離支配」は、戦後のことであり、それ以前は、帝国憲法のもと、まぎれもない「沖繩県」であった。だが、その「沖繩県」——帝国主義日本の琉球民族に対する迫害と侵略のその状況を、なぜ今日再びつくり出さなければならぬのだ。革共同の論理はこれに広がることのできない。そういう類の△犯罪△は、そもそも彼らの視野を越えているからだ。「具体的政治過程にたしかえる」よう、武部君は同志的に呼びかけてくれた。いいだろう。だが具体的とは即物的とどこで違うのか。今度はそちらが答えるべき番である。

我々は「権力」といい、「権力意志」と言った。しかし、その「権力」というものの重みはどれほどのものであろうか。「国家と革命」はそれを語ってはいない。レーニンが、政権の座についた後の時代に断片的に書きつけたことのうらにそれをよみとらなければならぬ

二・四ゼネストに真っ向から敵対し、革共同が期待していたのとはいささか趣の違う「政治的流動」を現実につくり出している。

すでに今まで面的に展開した我々の批判点を革共同が少しでも先に気づいていたとすれば、今日になってもなお屋良のしりおしを呼びかけたり美濃部都政の「革命的防衛」などを口にしなくてもすんだのだ。しかし、都議選も近い。「知事は美濃部、都議には北小路」のスローガンは、今さらおろすわけにもいくまいと思う。別にそのスローガンを直ちにおろせといっているわけではないのだから、つまらない選挙活動をやりながらでも、我々の批判を検討し、反批判を準備してくればそれで充分である。しかし、もうひとつつけないで、屋良の主席当選を喜ぶのなら同じ理由で五六年一月那覇市長選におけるスターリン主義者・瀬長亀次郎の当選も当然勝利の歴史として評価すべきではないのか？ 少なくとも瀬長はそのとき、米軍政権にもっとも敵視されつつそれにあたえて闘っていた。闘い方に問題があったとしても、屋良よりは「戦闘的」だったことに間違いはない。そして今君達だけが新左翼の中で使いまくっている。「沖繩県民」という名辞も、スターリニスト人民党によって普及されたのではなかったらうか？ よく考えるべき重要な問題だ。

《附記》

本章の執筆中に、われわれは森秀人著『甘蔗伐採期の思想』（六三年・現代思潮社刊）を読むことが出来た。われわれが数年まえからもってきた問題意識は、この書をよむことよってはじめて文章化される条件をもちえたといってもいい。むしろ今日のわれわれは森氏が「沖繩解放論」を書いた六二年とはかけはなれた地点におり、

いだろう。そして、それは、ロシアの「権力」の問題であった。今、南ベトナムには、新しい革命権力が成立を告げている。その革命権力が背おっているだろう重みを、我々はまえの所でほんの少しだけ推察しようとしてみた。ロシアの権力もベトナムの権力も我々が目ざす日本の権力ではないのだ。その日本の権力に我々は自らの手で接近しなければならぬ。それが「具体的な政治過程」の中に今我々が展望することのできる「危機」の果てのどこにあるのか、それは、危機を生きている中でしか察知することはできないだろう。しかし、我々が共産主義者として、現代の危機の状況を生きていることと、危機をありたためるために、政治技術を駆使することとは、又別の問題であることは何度でも繰り返し強調しておかなければならない。

もっと「具体的な政治過程」での話をつけ加えようか。一昨年十一月、沖繩で最初の主席選挙に屋良朝苗が「革新首席」として当選したとき、藤掛守氏は次のような評価を与えている。「沖繩県民は、日米帝国主義者のあらゆる恫喝にもかかわらず、『混乱と貧困』をも覚悟して『復帰』への道を選ぶことによって、日米帝国主義に大きな政治的打撃を与え、七〇年に向けて重要なくさびを打ちこんだ。（中略）屋良候補の当選は佐藤内閣の七〇年に向けての『切り札』を佐藤の手から奪い、佐藤が長期にわたってあたためてきたとっておきの七〇年政策を台なしにしてしまふことよって、七〇年に向けての新たな政治的流動状況の可能性を生み出したとも言えよう。」（『沖繩奪還』五五頁）だが、そうした「政治的流動状況の可能性」は、諸君達が期待したようにには現実化しなかった。屋良は、「革新首席」として、

従って又われわれは、沖繩コミュニティ論のような方針とは別のものへむかうだろう。しかしそれは、この書の評価を低からしめることとは別のことである。

ついでに言っておけば、革共同の論客たちがこの本を知らない筈はない。

山里章「沖繩の反スターリン主義運動」（『批判と展望』第三集・六二年六月刊）にえられた編集部のコメントには、次のようにある。

「沖繩における反スターリン主義運動は、六〇年一月の琉球大学マルクス主義研究会の結成により組織的局面に入り、沖繩における学生運動は事実上この『マル研』のヘゲモニーのもとにすめられてきている。」（同・六九頁）

この六二年、森氏は沖繩へわたり、その中から、「沖繩解放論」をはじめとする諸論稿が書かれた。そして森氏と沖繩学生運動の出会い、前掲書の中にもふれられている。だから、第三次分裂以前の革共同全国委の中では、この書は、琉大マル研を通してかどうかは別としてとにかく知られていた筈であり、今日の奪還路線に革共同も知らない筈はないのだ。だとするならば、彼らは、この本の内容を、かれらの政治技術主義と大衆操作の論理帰結として否定したのだといわねばならない。

なお、本章の（一）および（二）に関しては、他に、吉原公一郎編著『沖繩——本土復帰の幻想』（三一新書）を参照した。又、この書の座談会にも出席されている『沖繩タイムズ』紙の記者・川満信一氏が最近本土へ来て書かれたもの、話されたものからも、いくつかの点でサジェストをうけている。これらの人々には、われわれは、今後の闘争の実践によって応えてゆくつもりである。

## VIII 沖繩にとって解放とは何か (2)

われわれは、運動論と情勢認識を、革命論の視点から、限界を承知のうえで展開し、そのうえで、沖繩史の現実過程に立脚し、つづ奪還復讐論へのかじめつ的な批判を展開してきた。今やわれわれ自身の沖繩解放闘争の方針を提起すべきところへ到達している。われわれのこれまでの、いささか冗長ともおもわれる論述を耐えて読み進められて来た読者は、今ここにわれわれの実践的方途をめぐって、批判的に本稿と対峙すべき関係にはいるのである。

### 1/沖繩植民地論批判

共産党人民党から社会党、社大党、さらには革共同に至るまで、社会排外主義者の系列は異口同音に、アメリカによる異民族支配を告発している。その基柢には、沖繩がアメリカの植民地化されているという認識がある。(注) これは、チョビヒゲで有名なスターリニストの言葉を借りていえば「マルクス・レーニン主義とはエンもユカリもない」誤謬のひとつなのであるが、それは、米軍の基地武力をもって単純に権力とみなす姿勢と、他方での基地経済化、第一、二次産業の枯渇という状況を経済収奪だとみる発想とが結合して成立している以上、論理のうえで批判だけでは不足であろう。すでに予定の紙数を大幅に超えているが、批判にあらぬものを批判として売りに出すのは気がひけるので、少しばかり現実過程に近づき、沖繩経済などという、不得手な分野にも首をつっこんでみなければならぬ。

十五 内

を求めなければならなくなった農民はパイナップル生産へ転換したが、それは日本の資本のもとへくみ入れられる。甘蔗についても同様である。その結果は、農民の農業労働者への転換である。かかる過程は、米軍にとっては、不沈空母としての基地沖繩を支える低賃金労働力の確保のうえで決定的な意味をもった。

米作について／米の作付面積と収獲高を、一九三六年と一九六七年について比較すると次のようになる。

収獲量	一九三六年	一九六七年
一八二九三トン		九二〇四トン
作付面積	八六五五ヘクタール	四二六二ヘクタール

この変化は単線的なものでは決してなかった。六〇年度は三六年度を上まわっていたのだから。この変化——米作の減退は、六〇年代に急速に進行する。その契機となったものは、六二年に琉球開発金融公社と米農林省のあいだで結ばれた、「米余剰農産物借款契約」(公報四八〇号)にもとづく沖繩の「経済開発」政策である。さらに米穀輸入高は、六七年で八六九六二トンで、現地生産量の約九倍であり、いまでもなく元米作農民にとってこの事態は、現金支出の増大として結果する。

パイナップル、砂糖キビについてみよう。この両者だけで全耕地面積の八五%を占めている。沖繩農業のまさに主要生産物である。

平坦部の耕地が基地へ接収され、追放された農民は山部斜面を

ればならない。

(注) 瀬長亀次郎『沖繩からの報告』(岩波新書)  
革共同パンフ『沖繩奪還』等

現代帝国主義の植民地政策は、すでにVIでも触れたように、カイライと買弁政権にたいする投機的援助であり、反革命同盟のヘゲモニーの形成であり、その結果がアジア的停滞からアジア的飢餓への構造的転換とその昂進であり、農村の解体であり、都市流民の大量的な析出であった。この事情は、第一点を除けば沖繩にもある程度あてはまるようにみえる。しかし決定的な差は、アメリカ帝国主義にとっての沖繩の位置の問題である。米帝にとって沖繩はなによりも基地であり、不沈空母であって、それ以外の何物でもない。蓄積された剰余資本の輸出対象として、それを吸収する機能を沖繩に求めようとする衝動は一般的にはアメリカの資本にもあるだろうが、沖繩は、そうした意味では機能しえない(後述)。又、沖繩の米軍政府は、政策的にそうした衝動を最近までは排除してきた。そして、米軍政の下、沖繩人民は、賃金において、税制において、あきらかに経済的収奪をうけてはいるが、それはアメリカ資本主義にとっては、独占的超過利潤を意味するものでは決してない。収奪者は、本来の意味では日本の諸独占体であり、日本の資本主義である。

事実をみよう。

農業について。沖繩の農業は、平坦部の耕地が、朝鮮戦争期から次々と強制接収され、いちぢるしい荒廃をまねいた。山岳地に耕地開拓して農業を続けようとしたとき、パイナップル開発のアイデアにたどりついた。そこでは、スペインの自由連合の実験に似た、インテリゲンチアと農民の協同作業が実現し、栽培条件、土壌の科学的研究のうえにたつて計画が実行に移された。努力がみのってパイナップルは豊かに成熟しはじめた。かんづめ工場を建てる二万ドルの資金は、琉球銀行が自立した産業への融資をおこなわないので日本本土の資本にたよらねばならなかった。導入資本によってパイナップルはようやく順調に回転をはじめた。そのときに日本の資本は、工場は全権譲渡を迫って来た。農民代表は会社から追われ、パイナップルは一挙に、自営農民には肥料代も出ない価格までひきおろされた。

砂糖キビの場合も同様であった。甘蔗を植え、自力で共同合密糖工場をつくり、黒糖を生産していた農民につきつけられたのは、米民政府と琉球政府の命令に支えられた日本の会社の出現であった。共同工場は次々と破壊され、そのあとに、日本の製糖会社の大きな近代工場が建設された。本土資本の導入は本土との一体化の前進であり、復讐への前進である。右から左まで復讐論者たちはしゃべっていた。大会社は沖繩の産業を発展させる——大会社は甘蔗を多量に高額で購入する——大会社は沖繩の希望の星であるVキヤッチフレーズの実現は、共同工場の破壊、水田の荒廃と甘蔗畑への転換、そしてトン当り二ドルの値下げ。労働強化、略奪と収奪は組織化されたのだ。大製糖工場の資本構成は、うち六割から十割までを本土の独占が占有している。さらに肥料貸付による契約制度というものがあらわれて、農民からの収奪はいっそう強められた。高い混合肥料が現物貸与され、それには現金換算による利息までがついてくる。農民は、肥料をほどこし、除草し、株取りし、伐採し、

運搬するという作業に、資本の論理の貫徹によってしぼりつけられる。いうまでもなくこうした過程は、農業の一般的破壊ではない。農業における資本の論理の貫徹、それにもとづく農民収奪の組織化そして農民の農業プロレタリアートへの転化である。

漁業でも事態は同様に進行する。名護町の漁民は五〇年代はじめに、近海補鯨へのりだした。共同で船を購入し、技術を習得し、三年のちに鯨は、名護の第一の漁獲物となった。しかし、沖繩の近海補鯨が漁民の共同の努力で実現したとき、本土から太平洋漁業があらわれた。漁民たちのもつ三〇トン級の小型船に代って、三〇〇トン級の近代のキャッチャーボートが糸満の港にあらわれた。宮古、石垣等の離島にも補鯨基地が建設され、こうして名護の補鯨業はかじめつへ追いこまれてしまった。無論抵抗は組織された。しかし、それは米軍政によって圧殺されてしまうのである。

もういいだろう。かかる過程——戦後沖繩における日本独占の進出と現地の第一次産業の解体・再編、農漁民の零落とプロレタリアへの転化、それを武力と政治で支える米軍政権、これがアメリカの植民地の風景であろうか。

台湾産と沖繩産を比較すると、砂糖は四倍、パインは三倍の価格であり、アメリカ資本が沖繩のパイン・砂糖を支配しても特別利潤をうる事ができるわけではない。事実、アメリカの製糖資本は、一ドルも沖繩に投下されていない。沖繩糖は日本国内糖として扱われ、日本の製糖資本には無税で入手できる。(自由化の以前、外国糖には百四〇%の関税がついていた) 特恵措置がとられていたので、外国糖を輸入するよりも利益が高いのだ。

政策史のうえでみれば、かかる過程は、五八年九月の弁務官布令

△ だつて日本の大きな会社は自由に沖繩に入ってきて沖繩の人を安く使ってお金もうけているんですよ。もう復帰しているのとおなじことでしょう。V (森・前掲書二二〇三頁)

## 2/日帝の沖繩戦略と七〇年構想

すでにみたように、日本資本の沖繩進出は五八年にはじまり、六〇年代に構造化されて来た。前節では触れなかったが、紡績等の軽工業資本もこの間に沖繩に進出している。この現地沖繩の日本関係を中心とて言えば、基地としての支配権はアメリカが、経済的利益は日本資本が、それぞれ有するという構造である。米政府による沖繩人民の経済収奪は高税率・低賃金できわめて苛酷であるが、それらはアメリカ資本の利潤としてではなく、基地機能の維持費として再投入されるのである。

こうした構造の中で、六〇年の「復帰協」結成以後のいわゆる復帰運動は、米政府から、決して抑圧のみを与えられてきたのではない。池田期の駐日大使ライシャワーが、沖繩の復帰運動を正当な民主主義的権利の運動だとほめそやしたのは、六二年三月にケネディが、沖繩を日本領土として確認した発言に対応するものであった。これははたして欺瞞にすぎなかったのだろうか。六二年とは、つけ加えておけば、人民党機関紙『人民』が発行を許可され、労働組合の設立の自由がみとめられた年であり、前年六年には、日の丸掲揚が許可されている。

「アメリカが復帰ムードを喜ぶ理由の主たる側面は、対日講和条約の第三条を有効ならしめるためである。われわれはす

十一号「琉球列島における外国人の投資」によって開始された。そのもとに本土独占体の協定が「琉球パイナップル罐詰輸入協会」等々してつくられている。六三年に砂糖が自由化されたとき、一方で沖繩糖の八保護Vすなわち沖繩へ進出した日本製糖資本の保護のために特別立法(六四・三「沖繩産糖の政府買入れに関する特別法」六五・六「買入等に関する特別法」)が施行され、本土政府が直接にのりだすととも、砂糖キビ価格は四〇%も一挙にひき上げられた。

植民地というなら、日本の植民地と呼ぶほうがはるかにふさわしい。まさにこうした過程こそが「イモ・ハダシ」論の実現過程にはかならないのだ。

「アメリカは……沖繩を……プエルトリコのように経済植民地にしようという野望を強めている。」(『沖繩奪還』九頁) だの、本土資本の導入は祖国復帰への前進だとさえ言っている排外主義の宣教師どもは、打ちたおさねばならぬ。最後にもうひとつだけ読者に引用文を示して次へいこう。

「沖繩は沖繩のもの、そうはつきり答えてくれたのは美しい沖繩の娘であった。台湾で生れて戦後沖繩に帰らされたかの女は、日本の紡績工場で働いていた。いまは病気で療養中である。なお、つたらまた日本にいくのだ、という。沖繩が独立して、キューバのようになればいい、沖繩には砂糖キビがたくさんあって、そうして基地がなくなればいいなあ。

肥沃な耕地の半分以上を略奪されている沖繩の哀しみを、この娘は身にしみて知っている。そうして祖国復帰運動には反対だ、という。

に極知している。日本国政府は、日本領土であるところの沖繩をアメリカに売却したことを、つまりこの条約を有効ならしめる唯一の条件は、沖繩があくまでも日本の領土であることにある。もしそうでないことになれば、日本には売却する権利が、アメリカには購置する権利が、ともに消失する。両者のあいだに是認されるところの国際条約は、完全に非合法なものとなる。アメリカは、もはや世界に向って沖繩支配を正当づける根拠をもつことができなない。アメリカは単なる海賊、盗賊にすぎなくなるのだ。沖繩の特殊な地位と歴史が、充分その危険をもっている。戦後数年間のごとく沖繩独立運動の起る可能性を抱いているとき、沖繩はあくまでも日本であると元氣よく主張してくれる祖国復帰派は、アメリカにとっては、まことに有難い存在なのである。

第二の側面は、復帰運動はとうぜん、階級闘争よりもまず復帰という、ほまれある民主統一戦線(もちろんブルジョアもふくめて)になるから、沖繩の治安が非常によく保たれることになる。

第三の側面は、基地労働者と一般労働者とのあいだに根本的矛盾があるから、労働戦線はつねに亀裂する。復帰運動は、沖繩人民の闘争を亀裂させるように都合のいい運動であり、その分裂の上にアメリカは安定した支配をつづけられる。」(森・前掲書、一一八―九頁)

われわれは、今やこの三点が、逆の順序で崩れつつあることを次第で検討する予定であるが、ここに描かれた情景こそ、六〇年代沖繩の基本構造であったことを、しっかり押えておかねばならない。

すでにみたように、日本民間資本の沖繩進出は六〇年以後急増し、製糖資本保護立法のように政府の直接介入がそのうえにあらわれた。



ブルジョアは沖繩経済懇談会、政府は総理府の諮問機関・沖繩問題研究会を充足させ、今日の沖繩問題等、懇談会へとひきつがれてゐる。それは、沖繩を日本の経済構造の中に意識的にくみこんでゆく過程であり、「イモ・ハダシ」の構造化の過程である。

軍事問題に関する事実を追おう。

六四年、自衛隊は沖繩における戦史研究を開始した。それは、「三矢研究」の六三年と、「フライング・ドラゴン計画」(沖繩における日本共同作戦計画)の六五年の中間にあつてゐる。六三年の沖繩を中心とする「クイック・リリース作戦」演習は、沖繩の島民を直接の演習対象としていた。これは、言うまでもなく、自衛隊による肩がわりの準備のはじまりである。その中に、治安対策が重視されているのは、六八年八月の暴動鎮圧演習(「シルバー・ダガー作戦」)の実施が典型的に示している。そして、自衛隊の沖繩へむけられた目は、日帝のアジアに対する目でなくて何であらうか。

教育行政をみよう。

六八年九月、当時の文相灘尾は、沖繩教育の現状視察として那覇空港へ着いたとき、次のように語っていた。

「沖繩の教育制度は教員の身分、その行動のあり方など本土と同じでない面があるが、沖繩だけが特別な制度というのはいかゞどうか。沖繩が本土の一部となる以上、共通の制度でやっていくべきだというのが原則だと思ふ。」

「本土と同じでない面」とは何か? 教育委員の選挙制である。沖繩では行政区画とは別の地方教育区であり、そこに地方教育委員会がおかれてゐる。本土一体化とは、沖繩に十数年本土よりおくれで任命教委制を施行することを意味する。帰京したときに灘尾は言

っている。「公選制をとっている沖繩の教育委員制度は本土並に委員を任命制にする必要がある。沖繩だけに特殊な教育行政など認められない。」

いうまでもなくここには、政治的には教員の組合運動に対する自民党的アレルギーと、沖繩教職員組合の現状があり、同時に「本土を尺度として沖繩のおくれを測定し本土へ近づける」、方法としての近代主義がある。これこそ、明治の森有礼以来とられて来た差別政策の根本にある発想であつた。講座派の日本資本主義論も又、今日の民族民主二段革命や、まず復帰して次に階級闘争などという二段階論も、この点では何ひとつ異つてはいない。ここから出てくるのは、「部落」に対してとられた「同和政策」、黒人問題で言われた「インテグレーション」と同じ発想の、差別を前提とする統合論であらう。そしてこの論理のうちに日帝の沖繩支配の論理をみてとれぬ者はそれと闘ふことは出来ない。日帝打倒をいくら主観的に叫ぼうが、それは願望にすぎないのである。

しかし、沖繩の「日米共同管理体制」は、六〇年代後半によくその矛盾を顕在化させはじめた。それは第一に、一方では日本の政府援助予算が米政府援助額の倍額にまで達し、他方ではカイザー、ガルフ等四大石油会社の沖繩への進出の中であられる。それはまぎれもない日米帝国主義の市場競争のあらわれである。そして第二に、沖繩人民の解放闘争の前進である。大きな形容詞をかりつけながら、奪還論者はこれを量的にしか評価できないが、そこには、復帰路線のゆきづまりと、それをこえ出る階級性格のあらわれがある。第二点は次へまわして、前者を検討し

しよう。

六七年における米巨大石油資本の、沖繩における製油所建設申請は、沖繩そのものが目的ではない。沖繩は米軍をのぞけばなほ石油消費量があるわけのものでもないから。

「米石油資本の沖繩進出は、いろいろな背景が考えられるが、その一つとして需要構造面から理由づけられるものがある。すなわち、石油製品を工業燃料または原料として使用する場合と、ガソリンのように自動車燃料として消費する場合と二通りある。米・日本・ヨーロッパのような工業先進国は主として工業用燃料や重油を多く使用する。一方後進国は工業が進歩してないから、ガソリンの消費が多い。したがって日本本土で重油などを量産すればガソリンが生産過剰になるし、一方後進国でガソリンを需要にみあうように量産すると重油が過剰になる。そうした需要構造のちがいからくる生産分需要の不均衡を是正するためには、先進国と後進国の中間に精油所を設立することが得策と考えられるようになった。」(『沖繩タイムス』六七・十・四 関学政研の『研究レポート』第四集より重引)

いうまでもなく「先進国」とは日本であり「後進国」とはアジアである。そしてこの背景には、VI章でのべたように、アメリカ帝国主義の対後進国戦略「開発路線」にもとづく、社会開発の進行の予測がある。そして又政治的には、いかなる形態であれ沖繩返還が、いずれは必然であるという予測がひめられてゐると考えなければならぬ。

これは日本独占資本にとっては「寝耳に水」の事件であつた。六八年一月、佐藤内閣は、五項目にわたる方針を琉球政府に指示し

た。

- ① 地元資本を中心として、外資の他に日本資本の参加が望ましい。
- ② 外資は現在日本に進出しているものが望ましい。
- ③ 外資は五〇%以内を抑える。
- ④ 沖繩を足場に日本進出をはかろうとする外資は警戒を要する。
- ⑤ 日本の石油政策にそつて処理する。

しかしこれはあっさり無視された。日本政府は桐鳴的な声明を発表する。

「琉球政府がアメリカ側に有利な資本率で石油資本の進出を定めることは、本土と沖繩と一体化政策に逆行するものである。琉球政府が沖繩経済に有利な面だけを考へて、日本全体の利益に反するようなことがあつては、復帰の際、大きな障害にもなる。琉球政府当局に注意したい。」(読売「六八・一・二〇」)

さらに佐藤内閣は、カイザーを除く三社の代表をまねいて次の二点を要望した。

- ① 将来の沖繩返還に際しては日本の石油政策に従ふこと。
- ② 日本の石油の生産・流通秩序を混乱させぬこと。

まさにこの米石油資本の進出問題こそは、沖繩をアジア市場をめぐる日米帝国主義の競争の焦点としてうきほりにした事件であるということが出来る。日本資本は、この石油工場の建設工事を契機として土木・港湾関係へ進出を開始した。石油資本にとっての進出条件となるこの個別資本間の矛盾は、しかし、総資本としては、ただアジア市場への全面的進出の展望のうちのみ止揚されるだろう。沖繩が七〇年の焦点をなす意味は、このような日帝のアジア進出の現段階の中にこそある。そして今日日本の独占体は、かかる展望

のうちに軍事を、すなわち自衛隊の強化と海外派兵を、海上運輸路の保安のために公然と提唱しつつあるのだ。(例えば『エコノミスト』六月二十四日号の座談会「先進国日本の責務」における藤井丙午八幡製鉄副社長や、同志七月一日号における三菱重工社長牧田與一郎の発言をみよ)

「我が国の東南アジア経済協力活動を進める上において、沖繩をその前線基地あるいは中継基地として活用し、東南アジア医療援助研究所、亜熱帯農業の試験所、石油中継基地、アジア地域開発のための国際機構などの設置」(沖繩問題懇談会・足立発言「沖繩経済開発に関する意見」)は、このようにして今、日本帝国主義の具体的な方針の中に位置づけられている。

七〇年安保がアジア革命に対する反革命同盟・アジア安保たらざるをえない必然性とその条件は、かくして日帝の帝国主義としての運動論理の側から客観的に要請されているのであり、日帝の沖繩政策を「分離支配」の現状維持などと考えている奪還論者の発言(『沖繩奪還』十三頁他)は、ただ、そうした論者の頭脳における「現状維持」を自己暴露するものでしかない。しかもかれらの頭脳は、まえにもみたように、十年まえからずっと「現状維持」なのだ。

### 3/現地の闘争の到達点

本年六月五日の全軍労ストライキ闘争は、米兵の銃剣が社大党委員長安里らを負傷させた「流血事件」として、又、二・四ゼネストの直前でゼネスト不参加をとりきめた全軍労による実力行使として注目をあびた。しかしわれわれは、ジャーナリストの眼で見ている

のだ。そして、抵抗も空しく土地を追われ、迫害され差別されつつ生きなければならなかった農民たちのこの十数年の歴史の上にエリートたちの「祖国復帰」の旗はゆらめいて来たのである。理念への上昇を運動の前進と考えるエリートと、敵との衝突を正面からひきうける大衆との二重の構造は、日本反対制運動の歴史的な形質をなしている、それは、沖繩の労働運動にもはっきりとあらわれている。復帰運動が昂揚を示す六二年・官公労の労働者が祖国復帰運動にデモで参加し、十ドルのベースアップに赤旗を掲げて行進していたとき、基地労働者は歌もうたえずに完全にドレイの状態にしばらくつけられながら死の危険にさらされて労働していた。そして、かかる二重構造の中では、運動の実践は、権力支配の論理と鋭く向きあうことはない。実力闘争の欠如は、こうした構造の表出である。六〇年に至る本土の平和と民主主義V運動の教訓はこの点に集中している。六二年二月、それまで許可制であった労働組合結成が沖繩で自由に認められるようになった。東京ではライシャワーと外相小坂が沖繩住民の福祉増進について円満な話し合いをすすめていた。しかし、基地労働者にとって問題は何かとつわりはしなかったのである。六二年のこうした状態から、六・五に至る歴史を、「おくれた全軍労が」進んだ「官公労に」追いついたものなどと考える限り現地闘争の今日的段階とその内実は、すべりおちてしまいうほかないのだ。

六月四日、宜野湾市普天間公認市場横広場における一万五千名の決起集会とスト宣言、五日午前零時から二十四時間の全面スト、全軍労二万・メイド等非組合員一万に加えて県労働千二百その他の支

のではない。射程はさらに延ばされなければならないのだ。

全軍労の闘争としての六・五は昨年四・二四の十割休暇闘争との関連で、又、二・四ゼネスト以後の過程の中では、四・二八闘争との、又、五月におこなわれた「琉球新報」闘争、軍港湾労無期限ストとの関係で、さらに実力闘争としては、五六年の土地闘争以後の歴史における意味について、その評価が与えられなければならない。

前節ではのべなかったが、いわゆる復帰論の提唱者・普及者は、沖繩社会の中のエリートに属する部分であった。森秀人氏の表現を借りるなら、これらエリートと沖繩の土着的住民のあいだには「一次元分だけのズレがあった」。

「それは日本語を使う人間と沖繩語を使う人間との一次元分だけのズレに対応する。……知識人や都市化した者たちは、その意識構造においてエリートであり、日本への復帰意識は強い。」(前掲書・一〇一頁)

そしてエリートたちは、日本を理想郷のようにうたいあげ、そこへゆけば、そこに帰属すれば、沖繩の苦しみは解決されるというおとぎ話をデッチあげることによって、自己の運動の中に、頹廢と汚辱の無限膨張機構を形成していったのである。

しかし、生活に密着したエゴイズムが下層の民衆をエリートの運動の中へくみ入れたとしても、現実の米軍政支配と直接に衝突しなければならなかったのは、何よりもまず土地の強制接収の対象となる農民であり、漁場を奪われる漁民であった。社大党の安里らが、祖国々々とくりかえしていたとき、十数年後の今日に彼をかすることになる米軍兵の銃剣は、すでに抵抗する農民の血で洗われていた

援部隊をふくめ、全島七〇ヶ所の拠点でピケ完遂。Aギイ・ストインVの完全な機能マヒ。

これは、組織された実力闘争として、おそらくわれわれの最近のすべての闘いを上まわって充実した強力なものであった。

「琉球新報」闘争が組合の組織動員によらぬ自発的な戦闘グループをそのピケラインに加え、又、全軍港湾労の無期限ストが、同じくストを禁止されている全軍労の下部労働者に激励を与えたこと、これらの表示する過程が、二・四からの袂別としての六・五全軍労ストライキを支えたことは疑いない。軍港湾労の事務所にはA連帯を求めて孤立をおそれず——Vの文字が書きつけられていたという。四・二八上京代表団に加わった組合員がもちかえってきたのだ。それは、この五〇六月の沖繩労働運動が復帰運動の伝統から自己を解き放ちつつあることを物語っている。

五日午後三時、全軍労は再び普天間の広場へ集結し、総括を終えたあと、米軍の弾圧に対する抗議闘争に移った。二・五キロ離れたヅケラン司令部への終始戦闘的なジグザグデモ、ふりしきる雨をつきとす鋭いシュプレスコール——全軍労のこの闘争は、昨年の十割休暇闘争、二・四ゼネストの敗北、四・二八カンパニア行進の歴史が、否、六〇年以後の復帰協運動の全歴史が、全面的な地殻変動を生み、新たな歴史を切り開きつつあることを意味する。B<sup>5</sup>撤去反戦のA政治スローガンVを掲げた二・四に対して、経済要求をかけた六・五は意識のうえで低いなどという、一部に横行する評価は、新しい歴史の中に打倒されてゆくだろう。行動形態の戦闘性は、ただ形態としての問題ではない。まさに六・五の全軍労が示した実力闘争の戦闘性が、五〇年代の土地闘争を闘い敗北に追いこまれ復

復帰運動からも疎外されていった農民の、そして、漁民や企業労働者の憎悪にぬりかためられた歴史を呼びさまし、米軍支配権力との直接対決の基軸を今日の闘いの現実の中につらぬくことの意味を示したことが、そうした質こそが実力闘争として自己を表出していることが、六・五全軍労働争の真の歴史の意味なのだ。新しい歴史——それは、闘争の論理と権力の論理がななめにすれちがう復帰運動の歴史に代るべき、闘争の歴史である。

「二・四で、沖繩の労働者階級は学びとった。沖繩の『革新共闘』なるものが、当然にも屋良行政府を頂点にいただが故に、闘争の『共倒れ』になる危険をもっているということをや学んだし、県労協、総評、同盟とつらなるスト倒しの連動装置のメカニズムについても、すでにみた。

『連帯を求めて孤立を恐れず』自立したたたかいを、個別階級闘争としてたたかいていくこと、そのことを軍港港労が黙示し、全軍労がひきついだ。活動家たちは異口同音にいう。「県労協が、全軍労ストに対して、たったひとついいことをした。口出しをしなかった。」

沖繩における『革新』とはなにか。没階級的な復帰運動にそれを求めるのは見当ちがいであって、制度のラチ内に請願で入りこませてもらうというかたちでの疎外の克服ではなく、当面する支配者に対して、根元から闘いを挑むことによって、階級の権利をたたかいてもらうとする、労働者階級のたたかひの中に、その露項をみるしかない。そのたたかひのみが、沖繩の人民を解放する。」

(石田郁夫)

いままでもなく歴史の転換は開始されたばかりである。と同時に

十七 内

位置と内容を確認しなければならない。

#### ① 米軍政打倒について

われわれはここで革共同の主張をもう一度引用しよう。

「沖繩県民の闘いの爆発は、琉球政府に表現されている沖繩の『弁償』ブルジョアジーとその『権力』との対決を媒介としながらも、究極的には米軍(政)との対決に発展せざるをえない。」(『沖繩奪還』十六頁)

「われわれは米軍政打倒のスローガンを沖繩における直接的な実体的な権力との闘いの究極的な発展を示すスローガンとしてはっきり掲げるとともに、同時に沖繩における人民の闘いといえども、本質的に日本帝国主義打倒の一環として発展させられねばならぬ。」(同)

どこの世界でかれらはものを言っているのであろう。五〇年代の土地接収に抗して闘った農民から、今日の軍労働者の闘争に至る闘争は米軍政との闘いでなくて何であらう。そうして又、農・漁民の闘争の軌跡は、沖繩経済再編をおしすすめる日帝との対決を描いているのではないのか? 「沖繩における人民の闘争」が「日本帝国主義打倒の闘いの一環」となるべき根拠は、そもそも「奪還」論の中には存在しない。それこそが、「発展させられねばならない」式の主観的教説や、米軍政打倒を現実の階級闘争の現過程から疎外させ、「究極的な発展」へ彼岸化させてしまう誤謬の発生根拠なのだ。今日米軍政打倒のスローガンは、二重の意味をもっている。米軍政は、沖繩における支配権力の実体の表現であると同時に、極東アジアにおける帝国主義的革命的改革の軍事拠点の表現であり、そうであることによってそれは沖繩における実権力としての位置を持つて

没階級性と階級性的一般理論の水準における対置や啓蒙の時期は終っている。復帰論との闘争は、△進歩▽をたえず計量化しようとする傾向、それに立脚するところの政治力学主義との、具体的な闘争の諸局面での闘争によってさらに深化され拡大されなければならない。それはなお巨大な困難を残している。「琉球新報」闘争の敗北は、その困難の巨大さをあますところなく示したといえるだろう。

しかし、六・五全軍労働ストライキ闘争の貫徹は、沖繩人民の解放闘争史に、階級の自覚にもとづく自立した前進の出発点をきざむことによって、米軍政の足下をゆるがし、アジアの反革命拠点としての基地沖繩の機能の全面的なマヒをつくり出した。反革命軍事拠点沖繩が、革命的拠点に姿をかえるべき時代は開始されたのだ。島津の、天皇制権の、そして米軍政の支配の下、暗い歴史を強制されつつけてきた沖繩人民は、今や自己の歴史をきざぎざあげる歩みを開始しつつある。

われわれは、本土における十・十一月闘争を、かかる沖繩人民の今日の到達点に比肩しうるものとして死力を尽して闘い抜くことを通して、返還——復帰論の汚辱からきっぱりと袂別した地点に、本土——沖繩の革命的連帯を創出するだろう。その連帯こそが、アジアの、全世界の革命的人民の叫びかけにこたえうる国際主義の旗幟を、名実ともに自己のものとして掲げることが出来るのだ。

#### 4/スローガンについて

われわれは最後に、同盟のかかげてきたスローガンを検討し、七〇年闘争一七〇年代闘争の展望を現実たらしめるべきスローガンの

いるのだ。従って、沖繩のプロレタリアート・人民にとっては、それは二重の意味における敵対物である。第一にそれは、沖繩の全政治的社会的支配の政治的表出であることにおいて、第二にはそれが、闘うプロレタリアート人民に対する反革命的軍事拠点の中核としてあるという意味において。そして、前者のような意味では本土プロレタリアートにとっての直接的敵対者としては機能しえないが、後者のような意味でその打倒は、沖繩と本土の闘争の共通のスローガンとしてあるのである。

「ブレドや革マルの諸君などには、沖繩は米軍政打倒、本土は日帝打倒と実体的に打倒すべき権力対象を区別してしまう傾向が強い。沖繩の米軍支配が同時に日本帝国主義の沖繩政策の結果としてもたらされていると本質的に把握するならば、沖繩においても日本革命の一環として発展させられなければならないのである。ブンドのように本土復帰や日本帝国主義打倒との連関性を断つような意味で米軍政打倒が強調されるのはあきらかに誤りである。」(前同)

「日本革命の一環として発展させられなければならない」のが何かどうも文章の上ではよくわからぬ。だいたいわかりにくい文章というのは、いそいでかきすぎたのか、執筆者の頭が混乱しているのかどっちかの結果なのだが、そんなせんさくは彼らにまかしておくとして、おそらくこの文章の正しいところはただ一点、われわれの「米軍政打倒」が「本土復帰」なる頽廢のスローガンとの「連関性を断つような意味」をもって、いるところだけである。「実体的」だとか「本質的」だとか、黒寛ゆづりの武谷三段階論の用語のつもりでつかっているらしいが、彼らの理論水準を示すものとして

なかなかおもしろい。

かれらの誇る「鋭い階級意識」の理論水準は、先の引用について言えば、闘争の論理段階と発展段階の区別に関する無知、前者の後者への無原則な二重化として典型的にあらわれている。すでにのべた「米軍政打倒」のスローガンの、沖縄人民にとっての二重の意味は、沖縄における支配の構造からひきだされる、闘争の論理段階の差であって、闘争の発展段階における差ではない。革共同はこの区別がわからぬから、前者と後者へ移行させ、発展段階の区別のうえに、「米軍政との対決」を設定してしまい、その結果として「米軍政打倒」は、「究極の発展を示すもの」へ彼岸化されてしまうのである。いうまでもなく、論理段階の問題は、闘争の全発展段階において貫徹する。そして全発展段階、全局面でその闘争の論理内容が問われつづけなければ、闘争の実体的水準における対立関係が、本質として主観化されてしまうであろう。そしてここにこそ、階級闘争にとっての理論の果すべき位置と役割があるのだ。革共同の低水準にはあっさりときよならんといつて、われわれは不断の理論深化を実践してゆかねばならない。

反革命軍事拠点の政治表現としての米軍政に対する対決は、同時に、かかる反革命軍事拠点としての実体構造に沖縄における軍事基地の全面撤去のスローガンを伴わなければならない。しかし、本土と沖縄の闘争の結合を、基地闘争に求めるのは、一面的誤謬である。毛林派や四トロ派は、実体にひきづられる傾向のゆえに、こうした誤謬にまといつかれている。米軍政打倒のスローガなき軍事基地撤去のスローガンは、本土と沖縄の連帯を、闘争の実体的側面に限定するという意味において、その連帯は部分でしかないだろう。

## ② 日帝の侵略前線基地化阻止について

をその前線基地あるいは中継基地として活用し、東南アジア医療援助研究所、亜熱帯農業の試験所、石油中継基地、アジア地域開発のための国際機構などの設置……(沖縄問題等懇談会における足立報告 強調は引用者)

これは一体何であろう。ギマンか、ペテンか、「まったく信用できないもの」であるのだろうか？ 革共同の諸君の意見を聞きたいところだ。

ベトナム戦争において、「全土臨戦体制化」などと口走った諸君は、軍事をもって政治を語る傾向が大変強いのに、アメリカの軍隊について語りながら日本の軍隊についてはあまり言わないようである。われわれは日帝の侵略前線基地化が、在沖縄米軍を自衛隊が追い出して、あの広大な基地を今日の自衛隊が管理するなどというマンガチックなことは考えないけれども、帝国主義の対外衝動が軍事問題を伴うという原則の貫徹しているさまを少しだけ紹介しよう。

「アメリカはベトナムで手を焼いた、イギリスも財政上からスエズ以来の軍事力を七一年以後撤退するということになってくると、東南アジアに一種の真空状態がおこってきますね。そういう場合、いつ何がどこで起こるかかわからないという不安も絶無とはいえませぬ。

早い話が、日本は工業原料をぜんぜん持っていないから、通商航路の確保だけでも大問題ですよ。日本の原油でも中近東に九〇％近く依存しているが、これは非常に危険な環境にあるともいえるわけです。そういうこと考えますと、やはり、ある程度、国防に対する意識を真剣にもつべきではないかと思う。」(藤井丙午、『エコノミスト』六・二四)

まさに紹介したように、革共同の諸君は、日帝の沖縄政策は「徹頭徹尾現状維持の主張に貫かれている」(八九頁)と信じこんでおり、従って、佐藤政府が「返還」をいかに口にしようが「その場限りの言いのがれ」(同)であり「まったくギマン的、かつペテン的なもので、まったく信頼することのできないものである」(十五頁)とおもいこんでいるので、「日帝の侵略前線基地」などということは考えもつかないのであるが、その理由にはおそろしく二つのことが考えられる。第一は、帝国主義とは侵略するものだというような粗雑な一般論で現代政治の実体をとらえるのではダメだという、すぐれて現実的かつ無条件に正しい「予見」がある。ところがこの正しさは、残念ながら「予見」あるいは粗雑ではない、精妙な理論がほしいという「願望」の域にとどまっているので、あまり説得力が充分とはいえないわけである。そして第二に、かれらも又粗雑な一般論にとどまっているなりの表現として、日米帝国主義の力関係をもっぱら「軍事力」に求めてしまう発想があって、「日本帝国主義が沖縄の返還を実現した後には日本の法律の適用下で、現在の沖縄の軍事基地を『アジア侵略前線基地』としてそのまま維持しようと考えることはできない。」(八八頁)とか「日本帝国主義の『アジア膨張の本格化』ともない、はじめて沖縄返還政策」が日本帝国主義の政策となったというのも全くデタラメな口実にすぎない。」(同)とかいう結論が大胆に出てくることになってしまっているのである。日本帝国主義の対外的衝動について全面展開するのはここではムリであるから別稿にゆずることにして、まえにも引用したことをもう一度読んでもらおう。

「我が国の東南アジア経済協力活動を進める上において、沖縄

そして、沖縄返還のメドだと佐藤の言う七二年は、第四次防衛整備計画のはじまる年として予定されており、その増強の重点は海軍と空軍におかれているのである。われわれは、革共同がどういおうが、「日帝の侵略前線基地化阻止」のスローガンを掲げることが義務として考えないわけにはいかない。このスローガンはさらに当面の実体的対決論として、「自衛隊の沖縄派遣実力阻止」のスローガンを伴わねばならないであろう。

## ③ 沖縄解放のスローガンについて

わが同盟のスローガンの中に、一度は「沖縄解放」の文字がふくまれていたのであるが、今やこれを復活させるべきである。ここでの「解放」とは、日米両帝国主義からの同時解放を意味するものとして、従って、復帰論やその左翼的亜種に対する階級的対決の表現としてある。われわれは、高等弁務官を長とする米民政府は、反革命軍事拠点の政治支配機構として、補助機関たる琉球政府とともに米軍政打倒のスローガンのうちにその打倒をすでに表現している。

従って、革マル派のように、現代アジアの革命のすぐれて現代的な性格に対する盲目を支柱として「一國主義的にこの「権力」の打倒を「人民解放」などというまい。沖縄人民の自己解放は、アジア革命と切断されるやいなや、必然的に一國主義へすべりおちる。その結果の必然として、革マル派のいう「人民解放」は、かれらの得意とするところの「人間解放」論の世界へ投影されてしまうのだ。いうまでもなくそれは、観念の自己解放であり、疎外革命論のゆきつくそれゆえに又、かれらの闘争は、インテリゲンチアの運動にしかなくなりえず、復帰論を民族主義だとして反発しながらも、「日本人」になりたいたいという沖縄インテリのエリート意識それ自体には根元的批

判を向けることができず、中途はんばなことを言っておくほかなくなってしまうのだ。あるときには「日本帝国主義壯年期説」となえ、かとおもえば、「日本軍事同盟のさらなる強化が七〇年安保にかけた日帝の野望である」などと言いだして、革共同から「中核派路線の下手くそな密輸入」などとあげつらわれてしまうのは、これらのとくいな「論理」の非論理性と、これらの現状認識のいいかげんさを物語ってあまりある。反スタ派が、ベトナム解放革命と呼ぶことをひかえなければならぬのは、かれらの信仰のもたらすものであって、信仰の自由は認められねばならないからここでは何も言うまい。しかしわれわれは、そのような信仰から自由であり、従って革命的インタナショナルイズムの旗を手にすることが出来る。そ

### 結び

四・二八闘争の総括と、われわれの沖繩闘争方針は、以上のよううに提起される。われわれは、以上の展開で、何よりも今日の政治過程における政治同盟にとって問われているところの政治指導上の問題に特に注意をそそいできた。レーニンがロシアで、共産主義前衛の建設をめざす苦闘のうちに教訓化したものは、わが国の階級闘争のうえに血肉化されなければならないとすればどのようにか、われわれはもっぱら問題を、指導における自然成長論の批判にしぼりあげざるをえない。それは、しかし、つねに具体的な内容をもって問われ、答えられなくてはならないと同時に、ふるいものに、新しい材料をつけ加えることで解決されるもんだいでないがゆえに、方

われわれはそのもつ意味が、決してわが同盟のみにかかわるものとしてあるのではないと考えている。論争は、全戦線へ拡大されるであろう。それをわれわれは意識的に追求するであろう。

日本帝国主義ブルジョアジーの七〇年は、アジアをめざす七〇年である。そして、日米安保は、すでにのべたように、アジアにおける反革命同盟Ⅱアジア安保へと巨大な旋回をとげるであろう。そして沖繩こそは、かかる旋回の基をなすものとして、又、日米帝国主義の熾烈さを加える市場競争の火花散る焦点として位置している。

アジア安保には、アジアの革命が応えるだろう。そして沖繩人民の闘争は、汚れた「祖国復帰」論をようしなく打ち倒しつつ、かかるアジアの革命過程の焦点へ進出するであろう。反革命の拠点沖繩が、革命の拠点へ姿をかえる歴史はすでに開始されようとしている。それは、一切の一國主義的革命論からの革命的袂別と革命的インタナショナルイズムの実現の過程として進行するだろう。それこそが七〇年闘争の、七〇年代階級闘争の歴史的な意味と位置にほかならない。

われわれはこの歴史へ、全精力をあげて自己を革命的に登場させるだろう。当然にもそれは、破防法をはじめとするあらゆる暴虐と弾圧と報復によってむかえられるであろう。だが、それは死の苦悶にあえぐ帝国主義の衝動的けいれん以外ではありえない。

おそれることなく進撃しつづけることによって、未来は開かれるのだ。ためらうことなく撃ちまくることの中に、全世界は獲得されるのだ。

十月、十一月、帝国主義権力との熾烈な攻防戦を、われわれは死力を尽して闘いぬくであろう。十、十一月闘争は、反帝統一戦線の

して、すでにあきらかにしたように、沖繩人民の解放は、アジアと世界の革命の現過程の中に自己をおくことによって、はじめて、人間解放論などとは関係なくその現実性を語る事が出来るのである。かくてわれわれの沖繩闘争のスローガンは次のようにかかげられる。

- 一、米軍政打倒・沖繩解放ノ
- 二、全軍事基地撤去ノ
- 三、日帝の侵略前線基地化阻止ノ
- 四、自衛隊の沖繩派遣阻止ノ

法論そのものをも変革されることを強要される。方法論と具体的展開の両側面が、沖繩問題に内容を限定したうえでもなお内的に充分統一されているかどうかは、いぜんとして今後の批判と論争をまたねばならぬ問題として残されている。

現在は、たえずのりこえられるべきものとしてある。四・二八闘争の総括は又、四・二八のわれわれ自身を克服するものでなければならず、昨年の四・二八以来、革共同とわが同盟の間にかわされた論争の位相をこえてることをめざすものでなければならぬ。沖繩問題については、今後の闘争過程でさらに探究を深化する予定であるが、各方面での実践者からの批判をまちたいとおもう。本稿の執筆中に、わが同盟は、同盟の組織をかけた党派闘争に直面しなければならなかった。しかし、その論争内容に関する限り、

密集した進撃のもと、これまでの一切の闘争を過去のものとする、巨大な闘いとして爆発するであろう。闘いの鐘は打ち鳴らされている。

革命的国際主義の旗の下、佐藤訪米を武力で阻止せよノ  
共産主義者同盟の旗の下、安保粉砕・日本帝国主義打倒へ前進せよノ

### 追記

〔一〕「軍事問題」「軍事外交路線」「過渡期世界論」等に関して、現在の論争に対応すべく、若干の追記が要請されている。印刷・製本の進行過程からしてここでそれらを展開することは出来なくなってしまうので、ひきつづき発行予定の次号(本号第二部)において補足することにした。以下二点について、簡単に記すにとどめる。

〔二〕赤軍派との論争は、七月六日の事態によって、内部論争の域を超えてしまった。しかし、このことは、他方において赤軍派を批判しさえすればすべては片づくかのような傾向を生んでいる。問題はいぜんとしてその批判の質にある。赤軍派の論理をこえるだけの力量も責任意識も持ちあわせず、ひたすら官僚主義的に自己保身をはかろうとする部分に対しては、深刻な論争が継続されるであろう。かれらは赤軍派の登場の客観的根拠に完全に盲目であり、それゆえかれら自身がひとたび「軍事」について語りはじめるとや否や赤軍派のみずましされたものを持ち出すほかなくなるのである。言

っておくが「軍事」とは、「政治」の凝集であり、凝集さるべき政治の内容を、進行する階級闘争の現実過程に対する政治指導の全内容において責任をもってあきらかにしない者たちの「軍事」は、単なる「戦術」に転落する。そして、「戦術」は空論的な言葉の問題ではなく、具体的な「技術」の問題である。これを空論にかえるとき、実践的には階級闘争の現実過程からの召還となつてあらわれるのだ。

〔三〕「侵略前線基地化」の内容は本文中で展開した。われわれは、同盟内にあらわれた「軍事外交路線」論（「日米戦争論」にまでエスカレートした）とは基本的に見解を異にしているが、日帝の対外膨張衝動は当然にも軍事防衛問題にもあらわれている。

六月初旬、経団連防衛生産計画委員会と防衛庁主脳部との懇談会で、委員長岡野が、国家安全保障問題審議会の設置提案をはじめとして、同友会の木川田・経団連の榎村・兵器工業会総会での会長大久保らの一連の発信は、ブルジョアジーの軍事力強化の要請を露骨に表現している。七〇年安保の位置を、あいかわらず日米関係の中にしか見ることの出来ぬ者たち、アジアに危機をみることはあつても革命をみることの出来ぬ者たちは、あらためてかかる事態の検討に頭を向けるべきであろう。

## 後記

「叛旗」第二号は、予定よりもぐっと遅れて、今よやく読者の手へとどけられる。この遅れに加えて、われわれは、本号自身が予定していたものの三分の一にすぎないことをあきらかにして、お詫びしなければならぬ。

本号は、予定では、さらに、「方針」と「原理論」（過渡期世界論）各百、二百枚も一挙に掲載する予定であったが、予想外に原稿が遅れたため、ひとまず「総括」部のみで発行することにした。従つて、本号は、「本号」の三分の一をなすものにすぎず、本号を手にかされた読者は、すでに印刷に入っている次号を、ただちに読まれるべきである。批判をうける用意はつねにあるが、本号を読んで次号を読まずしては、批判も批判として成立しないことを肝に銘じて欲しい。次号（本号第二部）は、八月上旬に刊行される。

本号に掲載した「総括」は、四・二八闘争の直後から執筆はじめたもので、すでにいくつかの点では過去のものとなった感もあるが、それらをこえて、まんえんする復帰論、就中その左翼的亜種に対する闘争の武器としては、批判に耐えうるものと自負している。

革マル派に対する批判は、別稿で補充すべき課題として残されており、早急にその責を果したい。本号文中「次論文」等とあるものはすべて次号（本号第二部）の「方針」部分をさすものである。

全共闘、労評を軸に、反帝統一戦線を強化し、秋の闘争を全力を挙げて闘い抜き、安保粉砕・日帝打倒の七〇年へ前進しよう。

## 第二部 近日発行

### 方針／過渡期世界論

『叛旗』第二号（第一部）／頒価 一八〇円

編集・発行 共産主義者同盟三多摩地区委員会

連絡先 戦旗社／東京都千代田区神田三崎町二一七一六

滝沢ビル TEL (二六四) 二九六一

# THE BANZAI REBELLION

●突然、俺の眼に、過ぎて行く街々の泥土は赤く見え、黒く見えた、隣室の燈火の流れる窓硝子の様に、森に秘められた寶の様に。幸福だ、と俺は叫んだ、そして俺は火の海と天の煙とを見た。左に右に、數限りもない霹靂の様に、燃え上るありとある豊麗を見た。

●だが、酒宴も女等との交友も、俺には禁じられていた。一人の仲間さへなかった。銃刑執行班をまともに眺め、激怒した俗衆の面前に俺は立っていたのだ、彼等には解らない不幸に歎きながら、そして彼等を宥しながら。

——まるでジャンヌ・ダルクだ。——『牧師や教授や先生方、俺を裁判所の手に渡したといふのが君等の誤りだ。俺はもともとさういふ手合ひじゃない。基督を信じた事はない。刑場で歌を歌ってゐた人種だ。法律などは解りはしない。良心も持ち合せてはるやしない。生れた儘の人間なのだ。君達が間違っている』

●さうだとも、俺は貴様等の光には眼を閉ぢて来た。如何にも俺は獣物だ、黒ん坊だ。だが、俺は救はれないとも限らない。貴様等こそいかさまの黒ん坊ぢゃないか、氣違い染みた残忍な貪欲な貴様等こそ。商人、貴様は黒ん坊だ、法官、貴様も黒ん坊だ、將軍、貴様も黒ん坊だ。……古臭い野望、貴様も黒ん坊だ。悪魔の工場から来た課税しない酒を喰った貴様も亦。——熱病と癌腫とに眼眩んだ奴共だ。病人や老人が、進んで釜茹にならうとは、見上げたものだ。——不憫な人々を人質に取らうと瘋癲のうろつき廻るこの大陸を離れるのが惻巧である。俺はカムの本物の子供等の王国に這入る。

●俺はまだ自然といふものを辨へていたか、この俺を辨へていたか。——駄言は澤山だ。俺は死人達を腹の中に埋葬した。叫びだ、太鼓だ、ダンス、ダンス、ダンス。白人達は上陸し、俺は何處ともしれず落ちて行く、何時の事か、それすら俺には解らない。

●飢え、渴き、叫び、ダンス、ダンス、ダンス。

■ A・ランボオ『地獄の季節』

頒価 ● 180円